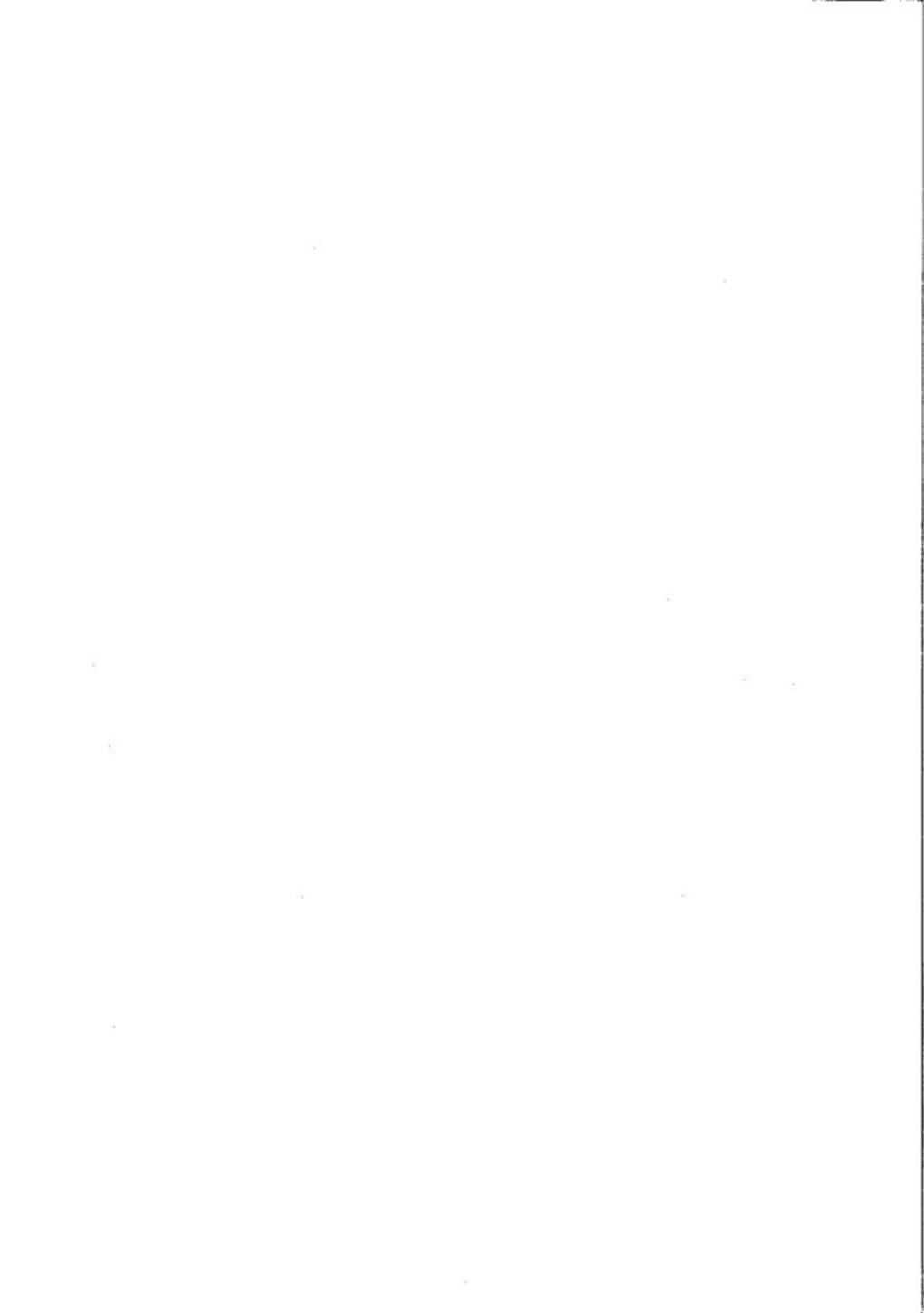


財團法人八尾市文化財調査研究会報告78

- I 恩智遺跡（第14次調査）
- II 亀井遺跡（第14次調査）
- III 木の本遺跡（第9次調査）
- IV 木の本遺跡（第11次調査）
- V 久宝寺遺跡（第47次調査）
- VI 小阪合遺跡（第38次調査）
- VII 渋川廃寺（第4次調査）
- VIII 成法寺遺跡（第19次調査）
- IX 福万寺遺跡（第2次調査）
- X 弓削遺跡（第5次調査）

2004年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



# 財団法人八尾市文化財調査研究会報告78

- I 恩智遺跡（第14次調査）
- II 亀井遺跡（第14次調査）
- III 木の本遺跡（第9次調査）
- IV 木の本遺跡（第11次調査）
- V 久宝寺遺跡（第47次調査）
- VI 小阪合遺跡（第38次調査）
- VII 渋川廃寺（第4次調査）
- VIII 成法寺遺跡（第19次調査）
- IX 福万寺遺跡（第2次調査）
- X 弓削遺跡（第5次調査）

2004年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

## はしがき

八尾市は、大阪府の中央部東寄りに位置し、西は上町台地、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵に囲まれた山麓・丘陵先端から平野部にかけて立地しています。山麓や丘陵先端部には、古く旧石器時代に遡り得る人々の生活の痕跡が点在しています。また、平野部では、古大和川水系が運び続ける土砂が厚く堆積しており、その中に、弥生時代以降の生活の跡が連續と積み重なっています。

このような先人の残した財産－埋蔵文化財－は、市民が共有すべき財産であるといつても過言ではありません。しかし、市民生活の利便性や豊かさを追求するための開発工事は、一方ではこのような共有財産を破壊することが前提となってしまいます。そこで、私どもは、開発工事によって破壊される埋蔵文化財について事前に発掘調査を行い、記録保存・研究に努めています。

本書は、市民生活に密接にかかわる公共下水道工事に伴う発掘調査の報告をまとめたもので、平成14年度から15年度にかけておこなった10件の調査成果が集録されています。今回報告する調査地からは、弥生時代中期以降中世に至るまでの遺構や遺物が検出され、古代史上での八尾市の重要性があらためて認識されたといえます。本書が地域史、ひいては日本史解明の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、八尾市下水道部をはじめ多くの関係諸機関および地元の皆様方に、多大な御協力をいただきましたことを心から厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

財團法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 木山丈司

# 序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成14・15年度に実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の報告を収録したものである。
1. 内容整理及び本書作成業務は、各現地調査終了後に着手し、平成15年12月までに終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の日次のとおりである。
  1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I・VI・IX-樋口 薫、II-高萩千秋、III・V-成海佳子、IV-岡田清一、VII-金親満夫、VIII・X-西村公助である。全体の構成・編集は成海が行った。
  1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2500分の1(平成8年7月編纂)八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成13年度版)をもとに作成した。
  1. 本書で用いた高さの基準は東京湾の標準潮位(T.P.)である。
  1. 本書で用いた方位は磁北及び日本測地系(第VI系)の座標北を示している。
  1. 遺構は下記の略号で示した。  
土坑-SK 溝-SD 小穴-SP 落ち込み-SO 自然河川-NR
1. 遺物実測図の断面は、須恵器・陶磁器-黒、瓦-斜線、その他の遺物-白とした。
1. 土色については、『新版 標準土色帖』1996 農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・実測図のほかにカラースライドも多数作成している。市民の方々に広く利用されることを希望する。

# 目次

## はしがき

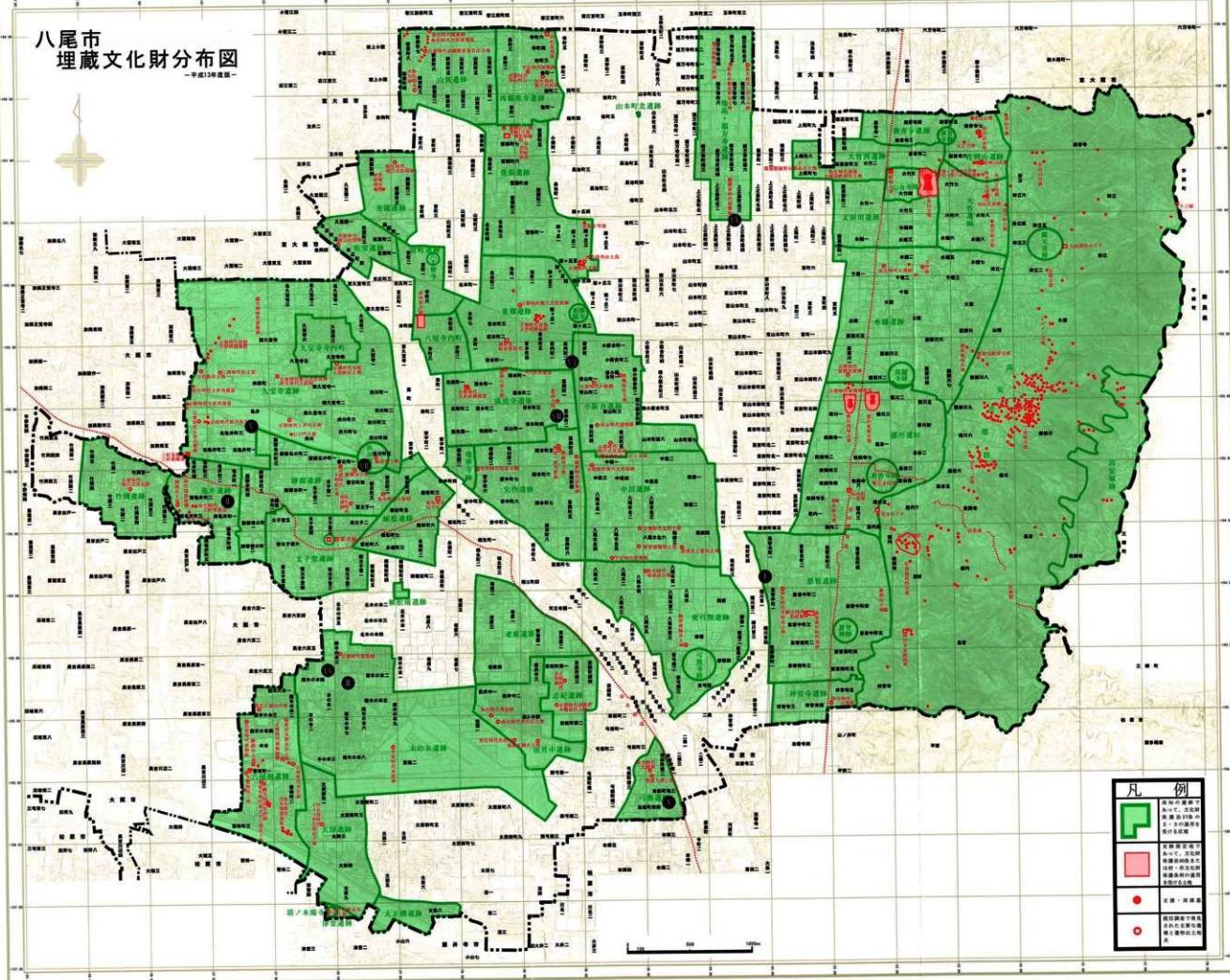
## 序

## 八尾市埋蔵文化財分布図

I 恩智遺跡 第14次調査(O J 2002-14)	1
II 亀井遺跡 第14次調査(KM2003-14)	11
III 木の本遺跡 第9次調査(S K 2002-9)	15
IV 木の本遺跡 第11次調査(S K 2002-11)	27
V 久宝寺遺跡 第47次調査(K H 2002-47)	33
VI 小阪合遺跡 第38次調査(K S 2002-38)	59
VII 渋川廃寺 第4次調査(S K T 2003-4)	67
VIII 成法寺遺跡 第19次調査(S H 2003-19)	99
IX 福万寺遺跡 第2次調査(F K 2002-2)	103
X 弓削遺跡 第5次調査(Y G E 2003-5)	109

# 八尾市 埋蔵文化財分布図

一平成18年版



I 恩智遺跡第14次調査（O J 2002-14）

# 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市恩智中町1丁目地内で実施した公共下水道工事（平成13年度小阪合排水区第15工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する恩智遺跡第14次（OJ 2002-14）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教生文第341号 平成13年12月26日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成14年7月9日～平成15年3月26日（実働8日間）にかけて、樋口 薫を調査担当者として実施した。調査面積は約28.14m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査にあたっては、下記の方々の参加を得た（敬称略、五十音順）。  
荒川和哉・飯塚直世・市森千恵子・岩本順子
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成15年9月30日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、以下の通りである。  
【遺物実測】 荒川・市森  
【トレース】 市森  
【執筆・編集】 樋口

## 本　文　目　次

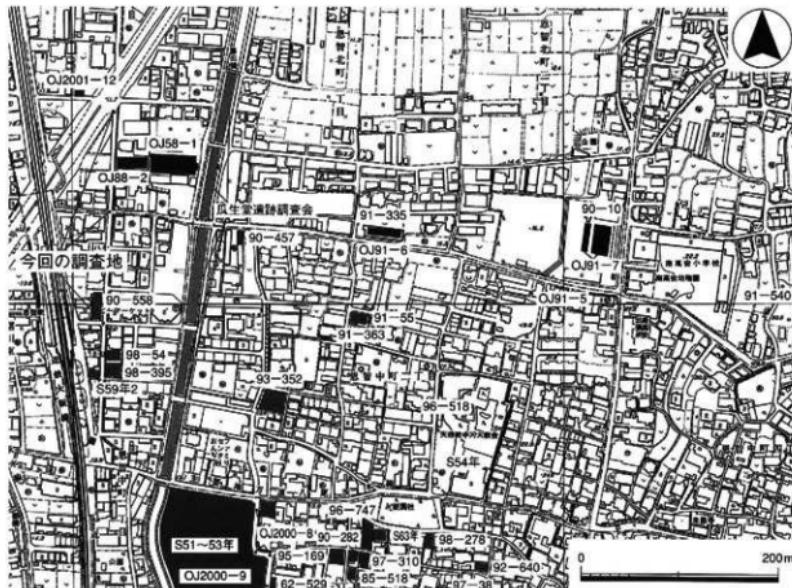
1.はじめ	1
2.調査概要	5
1) 調査方法と経過	5
2) 基本層序	5
3) 検出遺構と出土遺物	6
3.まとめ	8

# I 恩智遺跡第14次調査(OJ 2002-14)

## 1. はじめに

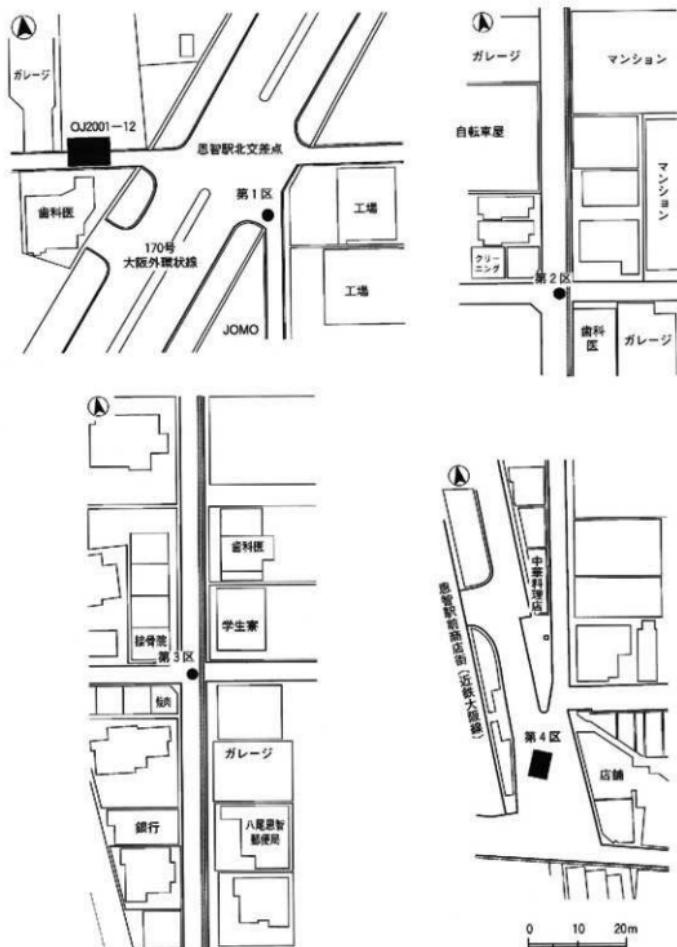
大阪府の東部、現在の大和川と石川の合流する付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に区画されている。この河内平野は、旧大和川の分流がもたらす沖積作用によって形成されてきた。今回報告する恩智遺跡は、この大平野の東部を画する八尾市の南東部に位置する。地形的には、生駒山地西麓に展開する扇状地と旧大和川水系により形成された沖積平野上にまたがり、現在の行政区画では、恩智北町1～4丁目、恩智中町1～5丁目、恩智南町2・3丁目一帯の南北約1.2km、東西約1.0kmがその範囲と推定されている。

恩智遺跡は、古くから「天王の森」と呼ばれる広場を中心に、遺物の散布地として知られていた。1917年、梅原末治・島田貞彦両氏の踏査により、弥生時代各時期の土器や石器が出土したのをはじめ、鳥居龍藏・岩井武俊両氏による試掘調査(1917)、藤岡謙二郎氏による踏査(1939)でも弥生時代各時期の遺物の出土を見た。その後、1948年には今里幾次氏による踏査で縄文土器が出土し、当遺跡の起源が縄文時代に遡ることが判明した。一方1975年には、瓜生堂遺跡調査会が本遺跡の沖積地部分にあたる恩智川において、改修に伴う大規模な調査を実施し、縄文時代～弥

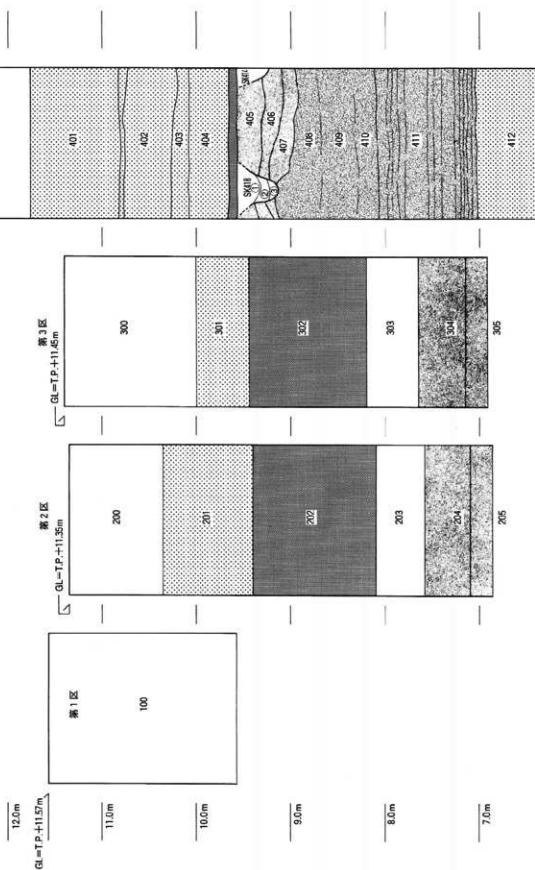


第1図 調査地周辺図 (S=1/5000)

生時代の遺構・遺物を数多く検出した。その後、当遺跡では、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、当調査研究会等により、多次にわたる調査が実施され、これまでの調査と同様に縄文時代・弥生時代を中心とした遺構・遺物が検出されている。特に2001年には、「天王の森」の南付近において当調査研究会による第11次調査が行われ、滋賀里IV式期(縄文時代晚期後半)に属する多



第2図 調査区位置図 (S=1/1000)



地層名	色 調	粒 度	組 成	性 質	堆積過程	抽出測量・出土遺物	備 考
100							土壤改良により整された地盤である。
200	50G6/1青灰色～10YR5/6暗青色	粗粒砂～細砂	粘土・粗粒	水成層			アリビビ粒化、ほくんどミルトとなる。
201	5G4/1灰灰色	シルト質粘土	土壌化層?				これより下の方において、暗緑色帶～褐褐色 粘土質ミルトが存在する。
202	5G4/1暗青色	細砂・中粗粒シルト質粘土	粘土・粘土シルト	水成層			当か? 粘土は鮮やかである。
203	5G4/1暗青色	細砂・中粗粒シルト質粘土	粘土・粘土シルト	水成層			ビュアル粘土層。
204	10G7/5暗青色	粗粒砂粘土シルト	粘土・堆土層				
205	10G4/4暗青色	粗粒砂粘土シルト	粘土・堆土層				
300	10Y4/1灰色	粗粒砂～細砂	粘土・粗粒シルト	水成層			堆積が存在する可能性がある。
301	10Y4/1黒色	粗粒砂～細砂	粘土・粗粒シルト	水成層			ビュアル粘土層。
302	10G4/1暗青色～10Y4/1灰色	細粒砂粘土シルト	粘土・粗粒シルト質粘土	水成層			
303	10G5/1暗青色	粗粒砂粘土シルト	粘土・粗粒シルト質粘土	水成層			
304	10G5/1暗青色	粗粒砂粘土シルト	粘土・粗粒シルト質粘土	水成層			
305	20G4/4暗青色～10Y4/1灰色	粗粒砂粘土シルト	粘土・粗粒シルト	水成層			
400	10YR6/4(5)-5暗青色	10YR6/4(5)-5黄褐色	粘土・重土層	ミナ粒化			基本的には水平方向に堆積したミナ粒化層をもつて構成であるが、互層の位置は不明瞭である。402
401	2Y4/1灰色	細砂～中粗粒	細砂～中粗粒	ミナ粒化			層や404層は、初期～中期の層であり、耕作による擾乱は、一時期状態の風化物のようだが、耕
402	2Y4/1灰色	細砂～中粗粒	粗粒砂～粗粒砂	ミナ粒化			の層は、これまでおり、かなり円滑化している。
403	2Y5/6(4)に近い黄色	粗粒砂～粗粒砂	中粗粒(3.5-5.0mm)の花崗岩	ミナ粒化			よく離れており、
404	2Y4/1灰色	粗粒砂～粗粒砂	中粗粒(3.5-5.0mm)の花崗岩	ミナ粒化			
405	10YR3/5(4)黑褐色	シルト質粘土・粗粒シルト	粗粒砂～粗粒砂	ミナ粒化			
406	10Y4/1黑色	粗粒砂～粗粒砂	粗粒砂～粗粒砂	ミナ粒化			
407	407 A	25G5/4(4)暗青色	粘土シルト	水成層			
407 B	25G5/4(4)暗青色	粘土シルト	水成層				
408	408 A	10Y5/1(4)灰色	粗粒砂粘土質シルト	水成層			
408 B	2G5/5(4)暗青色	粘土シルト	水成層				
409	409 A	10Y7/4(4)暗青色	粗粒砂・粗粒砂・質シルト～粗粒砂多	水成層			
409 B	2G5/5(4)暗青色	粗粒砂・粗粒砂・質シルト	水成層				
410	10Y4/1灰色	粗粒シルト・質粘土	ミナ粒化	ミナ粒化			泥炭化や、あるいは、少しある場合には、水分率の絶対値
411	10Y7/7(4)暗青色	シルト・粗粒砂	粗粒砂・細砂	ミナ粒化			で形成されたミナ粒化層が認められる。
412	2G5/7(4)暗青色	粗粒砂・細砂	水成層	水成層			下方に向かうにつれて、水分率の傾向を示す。

第3図 地質断面図 (S=1/40)

量の縄文土器の中から、本市で3例目となる土偶の出土を見た。当該期の土偶としては、近畿地方でも類例に乏しく、恩智遺跡の縄文文化を解明する上で貴重な成果を提供したと言える。

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法と経過

今回の調査は、八尾市恩智中町1丁目地内で行われた公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が恩智遺跡内で実施した第14次調査(OJ2002-14)にある。調査区は4箇所(総面積約28.14m<sup>2</sup>)である。調査では、西から順に第1区(径2m 面積3.14m<sup>2</sup>)、第2区(径2m 面積3.14m<sup>2</sup>)、第3区(径2m 面積3.14m<sup>2</sup>)、第4区(5.2×3.6m 面積28.14m<sup>2</sup>)と呼称した。掘削の方法は、第1区では、現地表(T.P.+11.57m)下2.0m前後までを機械と人力を併用して掘削した。第2・3区では、現地表(第2区=T.P.+11.35m・第3区=T.P.+11.45m)下4.5m前後までをPIT工法を用いて掘削、地層観察と、上げ土内に遺物が含まれているかどうかの確認に留めた。第4区では、現地表(T.P.+13.265m)下7.0m前後までを機械と人力を併用して掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。なお、調査期間は平成14年7月9日～平成15年3月26日(実働8日間)である。

### 2) 基本層序

【第1区】現地表面はT.P.+11.57mを測る。以下2.0m前後までを調査した。本調査区では、砂礫層の堆積が続き、湧水が激しいことなどからなど薬剤注入による土壤の改良が行われていた。したがって、地層の観察すらできない状況であり、考古学的な成果は皆無であった。

【第2区】現地表下1.0mまでは客土・盛土(200層)。以下現地表下4.5m前後までの3.5m間で、5層もの地層を確認した。201層は、青灰色～黄褐色粗粒砂～細礫である。下方ほど細粒化し、ほとんどシルトになる。202層は緑灰色シルト質粘土。これより若干上方において、暗灰色細礫～中疊混粘土質シルトが存在する。弥生時代中期の生活面が展開する可能性が考えられる。遺物は皆無である。203層は暗青灰色細礫～中疊混シルト質粘土。204層は緑灰色粘土～粘土質シルト。ピュアな粘土層である。205層は暗青灰色細礫～中疊混シルト。

【第3区】現地表下1.4mまでは客土・盛土(300層)。以下現地表下4.5m前後までの3.1m間で、5層もの地層を確認した。301層は灰色粗粒砂～細礫である。302層はオリーブ黒色細礫混粘土質シルト～シルト。弥生時代中期に属する壺の細片を包含する地層である。本層上面において遺構が存在する可能性が高い。303層は暗青灰色～灰色シルト質粘土。304層は緑灰色粘土～粘土質シルト質粘土。ピュアな粘土層である。305層は暗青灰色～灰色シルト質粘土。ピュアな粘土層である。

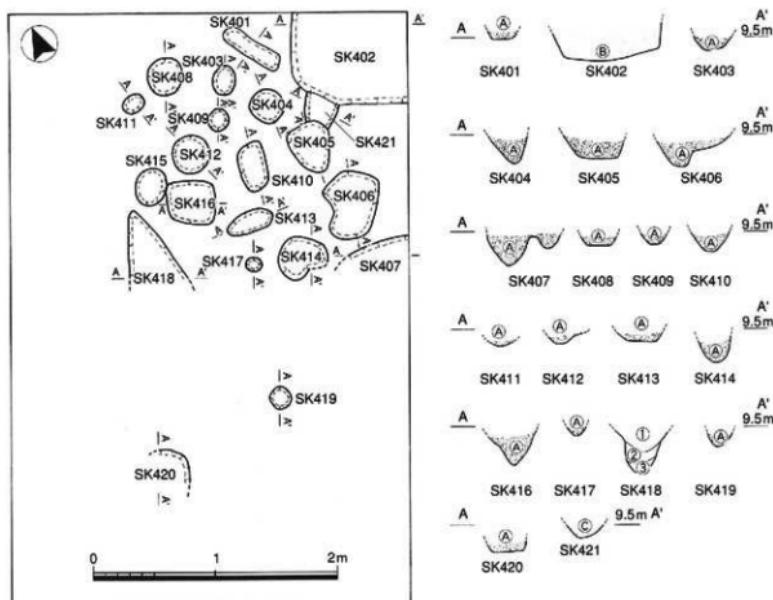
【第4区】現地表下1.5m前後までは客土・盛土(400層)。以下現地表下7.0m前後までの5.5m間で、12層もの地層を確認した。401～405層は黄色系の中粒砂～中疊である。水平方向に発達したラミナ構造を有する地層である。402層や404層は、細礫～中疊が優勢で、一見扇状地性の堆積物のようであるが、疊の角はとれておりかなり円球化が進んでいる点が特徴的である。406層は、黒褐色を呈したシルト質粘土～粘土質シルト層である。土器細片や細かい炭化物が混在し、非常に汚れている。土壤化層である。層厚は、10cm前後であるが、上面を405層に削られている可能性も考えられる。地層に混在する土器細片は弥生時代中期のものに限定されることから、この時期に形成された地層であろう。407層は、暗オリーブ灰色粘土質シルトである。上面において、

弥生時代中期の遺構群を検出した。408層は酸化鉄分の沈着した粘土質シルト。酸化鉄分の影響で、よく縮まっている。409層はオリーブ灰色を呈した細粒砂～中粒砂混シルトである。410層は灰色の粘土～シルト質粘土。上方において炭化物がラミナ状に含まれる。粘性に富む。閉塞した湿地帯のような環境下で形成された地層と推測される。411層はラミナ構造が顕著に残るシルト～粗粒砂層である。未分解の植物遺体がラミナ状に挟まれる。412層は青灰色を呈した粗粒砂～細砾。ラミナ構造は不明瞭であるが、概ね水平方向に発達している。下方に向かうにつれて粗粒化の傾向が強くなる。

### 3) 検出遺構と出土遺物

【第1～3区】遺構の有無は不明である。遺物は第3区において弥生時代中期(畿内第IV様式期)に属する土器の細片(1・2)が出土した。

【第4区】406層上面で、土坑を21基(SK401～421)検出した。この土坑群は、平・断面の形状やその法量により、①平面形状が円形、あるいはそれに近いもので、直径は15～30cm前後を測る一群(SK403・404・408・409・411・412・414・415・417・419)、②平面形状が方形から隅丸方形、あるいはそれらに近いもので、直線的なラインが認められる一群(SK401・405・406・410・413・416)、③平面法量が30cm以上を測る大型のもの(SK402・418)、の3グループに分類が可能である。この内①・②群は、断面形状を見ると一部分が深く落ち込むという特徴を有す



第4図 第4区平・断面図 (S=1/40)

るものが多く、柱穴の可能性が考えられる。一方遺構内埋土を観察すると、ほとんどが単層である。概ね(A):2.5Y3/1黒褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土～粘土質シルト(炭化物が混在)(2~3cm大のブロックで形成)、(B):2.5Y4/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土～粘土質シルト(2~3cm大のブロックで形成)、(C):10Y4/1灰色極細粒砂～中粒砂混粘土質シルト(2~3cm大のブロックで形成)に分類できる。いずれの埋土もブロック土が充填されていることから、意図的に形成されたものと推測される。各遺構の詳細については一覧表を参照されたい。次に出土遺物について述べる。出土遺物は、遺構面精査時に出土したもの(3)、遺構内から出土したもの(4~13)が挙げられる。この内、遺構内から出土したものについては、遺構が加工された、あるいは機能していた段階のものではなく、廃絶した後に何らかの理由で充填した埋土に混入していたものと考えられる。したがって、遺構内遺物の時期をもって、遺構の廃絶段階を示すものと考えたい。

表1 第4区検出遺構一覧表

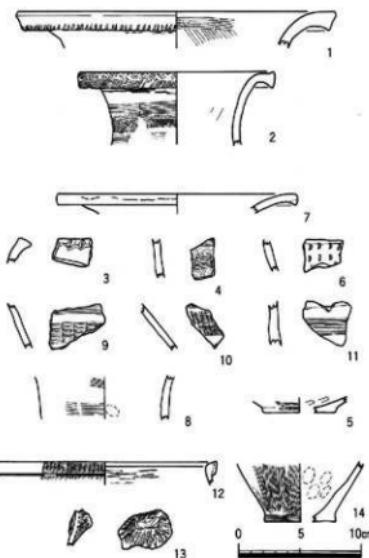
遺構番号	平面			断面 ×深さ割合=深さ+上幅×100				埋土		
	法量(cm)	平面形状	平面の特徴	法量(cm)	断面形状	底面形状	断面の特徴	深さ割合	粒度組成	堆積構造
S K401	南北-北西 53 北東-南西 20	長方形～ 隣丸方形	南北-北西に長軸をもつ 東側と北側が隅合区外に至 るために内部容積は小	幅20 深さ7	逆台形	平坦面	平底面あり	35	A	ブロック
S K402	東-西 90 南-北 74	隣丸方形?	東側と北側が隅合区外に至 るために内部容積は小	幅90 深さ32	逆台形	に高い平面	あり	35	B	ブロック
S K403	南-北 30 東-西 18	楕円形	南北-北方向に主軸をもつ	幅30 深さ11	楕状	U字状		36	A	ブロック
S K404	北北西-南南東33 西南西-東北東24	円形		幅33 深さ24	小皿U	U字状		72	A	ブロック
S K405	西北西-南南東50 西南西-東北東32	不定形	北北西-南南東に長軸をもつ	幅50 深さ23	字型	平底面あり		46	A	ブロック
S K406	南-北 61 東-西 38	不定形	南北-北方向に長軸をもつ	幅61 深さ27	逆台形	平底面あり	2段階	44	A	ブロック
S K407	東-西 52 南-北 16	不明	東側と南側が隅合区外に至 るために内部容積は不明	幅52 深さ23	不定形	U字状		44	A	ブロック
S K408	南-北 29 東-西 28	円形		幅29 深さ15	不定形	半底面あり		26	A	ブロック
S K409	南-北 21 東-西 16	円形		幅21 深さ9.5	逆台形	半底面あり		45	A	ブロック
S K410	北北西-南南東31.5 西南西-東北東22	長方形～ 隣丸方形	北北西-南南東方向に長軸 をもつ	幅31.5 深さ16	逆台形	U字状		51	A	ブロック
S K411	北東-南西 18 東北-北西 20	楕円形	南北-北方向に主軸をも つ	幅18 深さ4.5	楕状	U字状		23	A	ブロック
S K412	北西-南東 29 東北-南西 30	円形		幅29 深さ9	直状	平底面あり	掘形は 2段階	31	A	ブロック
S K413	東北東-西南西38.5 北北西-南南東18	楕円形～ 隣丸方形	東北東-西南西方向に主軸 をもつ	幅38.5 深さ9	不定形	平底面あり		23	A	ブロック
S K414	東-西 40 南-北 36	不定形		幅40 深さ22	逆台形	U字状		55	A	ブロック
S K415	南-北 30 東-西 26	楕円形	南北-北方向に主軸をもつ	幅30 深さ13	楕状	?	?	?	?	ブロック
S K416	東-西 40 南-北 34	不定形な 正方形	東-西に長軸をもつ	幅40 深さ20.5	?	V字状	掘形は 2段階	74	A	ブロック
S K417	東-西 15 南-北 12	円形		幅15 深さ7	逆V字	U字状		46	A	ブロック
S K418	南南東-北北西60 東-西 30	不定形	南北が調査区外に至るため 全容は不明	幅50 深さ34	U字状～若干 半底面あり			68	3層	ブロック
S K419	南-北 20 東-西 18	円形		幅20 深さ13	楕状	U字状		65	A	ブロック
S K420	東-西 31.5 南-北 26	円形?		幅31.5 深さ11	不定形	平底面あり		35	A	ブロック
S K421	東-西 30 南-北 20	不明	北側をS K2に、南側をS K 5に囲られるため全容は不明	幅30 深さ11	楕状	U字状		36	C	ブロック

\* S K418は上記①10Y4/1灰色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト、②10Y5/1灰色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト、③2.5GY6/1オーリーブ灰色粘土質シルト

各土器は、細片のものがほとんどであり、したがって、器種や部位に不確定要素が多分に含まれるが、概ね、弥生時代中期（河内第IV様式期）に属するものと推測される。また、土器の胎土に混在する角閃石の有無により、各土器の产地同定を試みた。概ね角閃石が混在しており、生駒山地西麓部の胎土を用いていることが予想される。なお、各遺物の詳細については一覧表を参照されたい。

### 3.まとめ

今回調査を行った第1～4区周辺では、過去の調査において弥生時代中期の遺構を多数検出している。したがって、今回もその可能性が充分想定できたわけであるが、第1区では、12次調査（OJ 2001-12）の成果と同様、各時代を通じて河道域であった可能性が極めて高い。一方第2・3区では、遺構の存在を積極的に支持する考古学的証拠を得ることはできなかった。しかしながら地層観察では、T.P.+8.3m付近で、土壤化層と思われる暗色を呈した地層（202層）を確認したほか、第3区では、T.P.+8.2～8.9m付近（302層）から、弥生時代中期に属する壺の細片が数点出土した。これらの遺物（1・2）は、遺構に伴うものであるのかは不明であるが、摩滅を受けておらず、器面調整が良好に残っていることから、遠くから流されてきたものではないと思われ、遺構に伴うものの可能性が考えられる。第4区では、407層上面で検出した弥生時代中期に構築されたと推測される遺構群が挙げられる。これらの遺構群は、配置に一部企画制が認められ、居住域を構成した建物の柱穴と思われる。この成果は、第4区周辺に当該期の居住域が存在する可能性を示唆する。周辺における過去の調査では、天王の森周辺から、現恩智川付近において、弥生時代中期の濃厚な居住域の存在が確認されており、その居住域の西端がどこまで広がるのかが争点であった。恩智中町1丁目の調査（市教委84-80・市教委98-54・市教委98-395）では、当該期の遺物包含層を検出し、居住域の西方への広がりを推察しているが、本調査区の成果により、それらが裏付けされたことは有意義であった。なお、本調査区では、弥生時代中期の遺構面を407層上面で検出したが、407層上面は土壤化しておらず、これらの遺構群の本来の構築面は、406層上面であったと推測される。ただし、先述した通り、406層上面は、その上層に存在する405層（砂礫層）に削り取られている可能性も考えられることから、考古学的な遺構面の表記は、405層下面検出遺構となる。



第5図 出土遺物実測図 (S=1/4)

表2 出土遺物観察表

遺物 番号	器種 形式	部位	法量(cm)	成形・調整・装飾	色調	備考	出土遺構
1	弥生 広口壺	口縁部	口径 26.3 器高 3.0以上	(外)口縁端部は横ナデ後、下端にキザミを加える。腹部はナデ。 (内)左上りのハケナデ後横方向のハケナデ(6 灰褐色 本/単位)。	7.5YRS/2		第3区 202層内
2	弥生 広口壺	口縁部～ 頸部	口径 16.2 器高 5.0以上	(外)口縁端部には簡状文(6本/単位)を2帯(上 帯:左上り・下帯:右上り)施す。腹部は横ナデ 後一部横方向のミガキを行う。その後撫括直 線文(8本/単位)を2帯以上とし、その間に1帯 褐色色の波状文(9本/単位)を加える。 (内)横ナデ。	10YR4/1	搬入品?	第3区 202層内
3	弥生 壺?	口縁部	—	(外)横ナデ。端部にキザミを加える。 (内)横ナデ。	10YR7/2 にぶい黄褐色	搬入品?	第4区 遺構圖 精查時
4	弥生 壺?	不明	—	(外)左下りの板ナデ後横方向の撫括直線文(9 本/単位)を3帯以上施す。 (内)ナデ。	10YR5/2 灰褐色	生駒西蔵庭	S K402
5	弥生 壺?	底部	底部 5.8 器高 1.3以上	(外)横方向のミガキ、底面はナデ。 (内)横方向に板ナデ。	10YR6/4 にぶい黄褐色		S K405
6	弥生 壺?	不明	—	(外)横ナデ後『D』字状のスタンプ文を施す。 (内)横ナデ。	10YR5/3 にぶい黄褐色	生駒西蔵庭	S K406
7	弥生 広口壺	口縁部	口径 19.6 器高 1.7以上	(外)横ナデ。 (内)横ナデ。	10YR4/2 灰褐色	生駒西蔵庭	S K407
8	弥生 長颈壺	頸部	頸径 11.3 器高 3.6以上	(外)撫括直線文(7本/単位)を2帯以上施す。 (内)指押えあり。	10YR4/1 褐色色	生駒西蔵庭	S K410
9	弥生 壺	体部?	—	(外)ナデ後撫括直線文(5本以上/単位)を1帯 以上、難状文(13本/単位)を1帯以上施す。 (内)ナデ。	10YR6/3 にぶい黄褐色	生駒西蔵庭	S K414
10	弥生 壺	体部?	—	(外)ナデ後難状文(20本以下/単位)を2帯以 上施す。 (内)ナデ。	10YR5/3 にぶい黄褐色	生駒西蔵庭	S K416
11	弥生 壺	頸部または 体部?	—	(外)ナデ後撫括直線文(10本/単位)を2帯以 上施す。 (内)指押え後ナデ。	10YR4/3 にぶい黄褐色	生駒西蔵庭	S K418
12	弥生 鉢?	口縁部	口径 18.4 器高 1.9以上	(外)口縁端部に難状文(10本/単位)を1帯、瓶 部に難状文(5本以上/単位)を1帯以上施す。 (内)1腰端部は横ナデ、腹部は横方向のミガ キを施す。	7.5YRS/3 にぶい褐色		S K420
13	弥生 水差形 土器	把手	—	(外)指押え成形後、ミガキを加える。 (内)ナデ。	10YR5/3 にぶい黄褐色	生駒西蔵庭	S K420
14	弥生 壺または 壺	体部～ 底部	底径 5.9 器高 4.9以上	(外)体部は瓶方窓の、底部は横方向のミガキ をそれぞれ施す。 (内)指押え成形後指ナデを行う。	2.5Y6/2 灰黄色	搬入品?	S K420

## 参考文献・引用文献

- 田代克己他 1980『恩智遺跡Ⅰ』瓜生堂遺跡調査会
- 鶴村友子 1987『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ－恩智遺跡の調査－』八尾市教育委員会
- 寺沢 薫・森岡秀人編 1989『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社
- 岡田清一 2002[1] I 恩智遺跡第10次調査(O J 2001-10)』財団法人八尾市文化財調査研究会報告73』(財)  
八尾市文化財調査研究会
- 森本めぐみ 2003[VI 恩智遺跡第11次調査(O J 2002-11)]『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』  
(財)八尾市文化財調査研究会
- 樋口 薫 2003[Ⅸ 恩智遺跡第12次調査(O J 2002-12)]『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』(財)  
八尾市文化財調査研究会



第1区 周辺状況(北東から)



第2区 周辺状況(東から)



第3区 周辺状況(西から)



第4区 周辺状況(南東から)



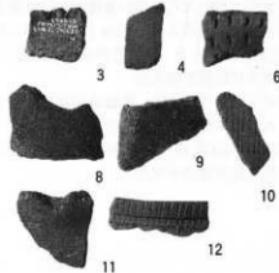
第4区 造構検出状況(南西から)



SK 417、418断ち割り状況(南東から)



第3区 出土遺物



第4区 出土遺物

## II 亀井遺跡第14次調査 (KM2003-14)

# 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市亀井町1～4丁目、跡部本町4丁目、跡部南の町1丁目地内で実施した公共下水道工事(平成14年度八尾排水区第11工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する亀井遺跡第14次(KM2003-14)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第351号 平成15年1月9日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成15年4月23日～12月3日(実働4日間)にかけて、高萩千秋・岡田清一・樋口薰を調査担当者として実施した。調査面積は約64m<sup>2</sup>である。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し、平成15年12月27日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、高萩で行った。なお本文の文責は文末に記した。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	11
2.調査概要.....	12
1) 調査方法と経過.....	12
2) 基本層序.....	12
3) 検出遺構と出土遺物.....	13
3.まとめ.....	13

## II 亀井遺跡第14次調査(KM2003-14)

### 1. はじめに

亀井遺跡は、八尾市南西部の亀井町1～4丁目、南亀井町1～5丁目一帯に所在し、旧大和川の支流である長瀬川の左岸の沖積地に位置する。周辺には東に跡部遺跡・西に竹洞遺跡・北に久宝寺遺跡・大阪市加美遺跡があり、南側には大阪市長原遺跡・城山遺跡などがある。

当遺跡は、昭和43(1968)年、平野川改修工事の際、多量の弥生土器が出土したことによって発見された遺跡である。それ以後、大阪府教育委員会による遺跡範囲確認調査が行われ、昭和44(1969)年、近畿自動車道予定地内では、(財)大阪文化財センター(現、大阪府文化財センター)による試掘調査が行われた。その後、昭和53(1978)年には長吉ポンプ場築造工事に伴う発掘調査、昭和55(1980)年には近畿自動車道建設に伴う発掘調査が、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによって実施された。その調査の結果、東西・南北500m以上の範囲をもつ複合遺跡であることが明らかになった。

今回の調査地は国道25号線沿いで、周辺では小規模な発掘調査が八尾市教育委員会、(財)八尾市文化財調査研究会により行われている。それらの調査では弥生時代中期～奈良時代の遺構および遺物を検出している。



第1図 調査地周辺図 (S=1/5000)

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法と経過

今回の調査は、八尾市亀井町1～4丁目、跡部本町4丁目、跡部南の町1丁目地内で行われた公共下水道工事(14-11工区)に伴うもので、当調査研究会が亀井遺跡内で実施した第14次調査(KM2003-14)にあたる。調査区は国道25号線沿いの3箇所である。総面積は約64m<sup>2</sup>を測る。

調査では、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財指示書に基づき、現地表(T.P.+8.0m前後)下1.8m前後までを機械掘削とし、以下現地表下4.0m(T.P.+5.5m前後)までの2mについては、重機と人力を併用した掘削を行った。なお、今回の調査は、国道25号線沿いなどの諸事情によりすべて夜間で実施した。現地での調査は第1区－平成15年4月23～24日・28～29日、第2区－11月6～7日、3区－12月2～3日の夜間に行った。各調査区では、地層状況および遺構・遺物の有無などの検出に努めた。

### 2) 基本層序

今回の調査は、東西に約370mの範囲に3箇所の調査区で、1区と2区が約200m、2区と3区が170m離れており、調査区との層位関係は明確にできない。以下、各調査区の層序について記す。

#### 〈1区〉

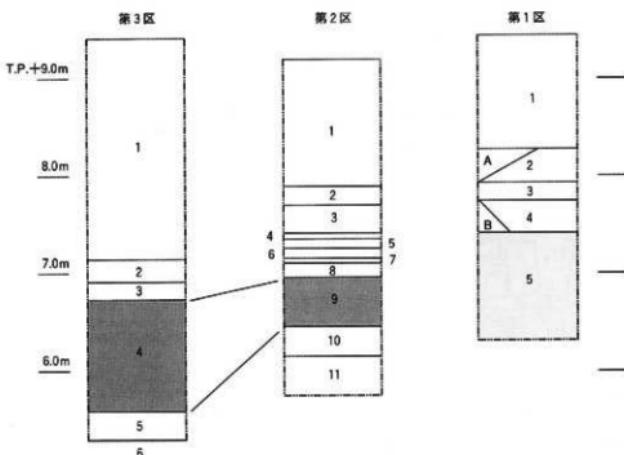
第1層 盛土(層厚1.0m)。

第2層 乳灰茶色細粒砂混粘土質シルト(層厚0.4m)。

第3層 茶灰色中粒砂～粗粒砂(層厚0.2m)。

第4層 淡灰色粘土質シルト(層厚0.2m)。

第5層 淡茶灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト(層厚2.0m以上)。水平のラミナが見られる。



第2図 断面図 (S=1/50)

第A層 灰茶色粘土質シルト(層厚0.3m)。

第B層 乳灰青色粘土質シルト(層厚0.3m)。

〈2区〉

第1層 盛土(層厚1.3m)。

第2層 淡茶灰色粘土質シルト(層厚0.2m)。

第3層 灰青色細砂混じりシルト(層厚0.3m)。

第4層 灰色粘土質シルト(層厚0.05m)。

第5層 淡灰色微砂(層厚0.1m)。

第6層 灰色シルト(層厚0.1m)。

第7層 灰色微砂質シルト(層厚0.05m)。

第8層 暗オリーブ灰色シルト(層厚0.15m)。

第9層 暗灰色粘土質シルト(層厚0.5m)。弥生土器の小片をごく微量に含む。

第10層 灰青灰色シルト(層厚0.3m)。

第11層 暗緑灰色粘土質シルト(層厚0.4m以上)。

〈3区〉

第1層 盛土・旧耕土等(層厚1.9m)。

第2層 茶灰色粘土質シルト(層厚0.35m)。

第3層 青灰色シルト(層厚0.25m)。

第4層 淡灰色微砂(層厚0.20m)。

第5層 灰黒色粘土(層厚1.1m)。上部は小片遺物をごく微量に含み、下部は器種の判別できる程度の弥生土器片を含んでいる。

第6層 乳灰青色シルト質粘土(層厚0.3m以上)。

3) 検出遺構と出土遺物

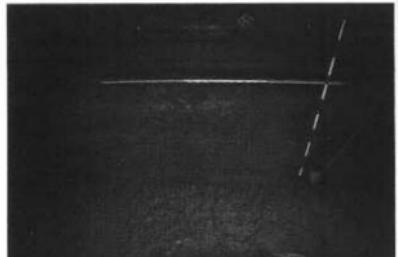
今回の調査では、各調査区で遺構を確認することはできなかった。第1区では奈良時代以前の河川跡と思われる砂層が厚く堆積していた。第2・3区では弥生時代中期～後期にかけての遺物が含まれる層を確認した。第2区は現地表下約2.24～2.75m(T.P.+6.45～6.96m)に堆積する層。第3区は現地表下が約2.7～3.8m(T.P.+5.6～6.7m)に堆積する層である。

3.まとめ

今回の調査では、遺構の有無を確認することができなかったが、第2・3区で弥生時代中期～後期の遺物を含む層、第1区で奈良時代以前に埋没した河川跡を確認することができた。弥生時代中期～後期の遺物を含む層は、第2区が浅く、西側の第3区が深くて厚く堆積している。

参考文献

- ・中西靖人・宮崎泰史・西村尋文編 1982「亀井遺跡」(財)大阪文化財センター
- ・岡田清一 1993「II 跡部遺跡第8次調査(A T92-8)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告39」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・森本めぐみ 2000「III 跡部遺跡第30次調査(A T98-30)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告65」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・近江俊秀・岡田清一 1989「亀井遺跡 一南亀井町4丁目41-1の調査-」「(財)八尾市文化財調査研究会



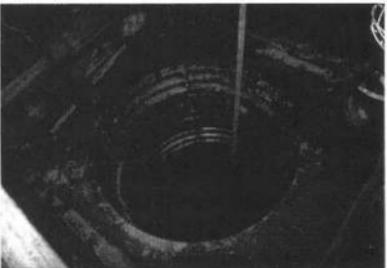
第1区 北壁 (T.P.+7.0~8.0m)



第1区 砂層検出状況 T.P.+6.5m前後



第2区 挖削状況 (東から)



第2区 完掘状況 T.P.+6.5m前後 (南から)



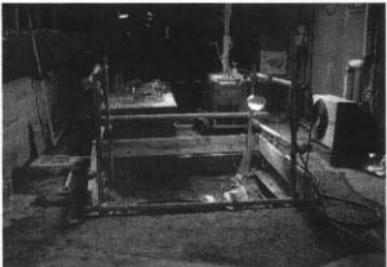
第3区 完掘状況 最深T.P.+3.5m (南から)



第3区 弥生時代中期～後期の地層 (南から)



第3区 弥生時代中期～後期の地層 (南から)



第3区 全景

### III 木の本遺跡第9次調査（SK2002-9）

# 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市南木の本2・6～8丁目で行った公共下水道工事(13-31工区)に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する木の本遺跡第9次(S K2002-9)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第431号 平成14年2月27日付)に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、その1(平成14年度)、その2(平成15年度)に分けて実施した。
1. 木の本遺跡第9次発掘調査(その1)の調査期間は平成14年7月8日～8月2日(実働13日間)にかけて、成海佳子を担当者として実施した。調査面積は96m<sup>2</sup>である。現地調査・内業整理には、以下の調査補助員が参加した。荒川和哉・飯塚直世・垣内洋平・川村一吉・國津れいこ・曹龍・多田一美・實樹婦美子・村井俊子
1. 木の本遺跡第9次発掘調査(その2)の調査期間は平成15年8月19日～8月20日(実働夜間2日間)にかけて、西村公助・樋口薰を担当者として実施した。調査面積は約6m<sup>2</sup>である。
1. 本書作成にあたっては、遺物実測ー飯塚・實樹、トレースー村井俊子、遺物写真撮影ー成海があたった。
1. 全体の構成・編集は成海がおこなった。文責は1・2・4が成海、3が西村である。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	15
2.木の本遺跡第9次調査(その1)調査概要.....	16
1) 調査方法と経過 .....	16
2) 基本層序 .....	17
3) 検出遺構と出土遺物 .....	18
3.木の本遺跡第9次調査(その2)調査概要.....	24
1) 調査方法と経過 .....	24
2) 調査成果 .....	24
4.まとめ.....	24

### III 木の本遺跡第9次調査(SK2002-9)

#### 1. はじめに

木の本遺跡は八尾市南部に位置し、八尾市域内の現在の行政区画では、木の本1~3丁目、南木の本2~9丁目、空港1・2丁目にあたり、東西1.8km・南北1.2km程度の範囲が推定されている。西~南は八尾南遺跡・太田遺跡と接しているが、これらの遺跡が羽曳野台地の先端部を占地するのに対し、木の本遺跡は長瀬川左岸の沖積地に位置している。同一の沖積地には木の本遺跡のほかに、弓削遺跡・田井中遺跡・志紀遺跡・老原遺跡が位置している。

当遺跡発見の契機は、昭和56(1981)年、南木の本4丁目で行われた店舗建設に伴う試掘調査による(①)。次いで同地で行われた発掘調査では、現地表下約3.0m(O.P.+8.2m=T.P.+6.9m)で弥生時代中期前半と古墳時代前期・中期の遺構が検出された。ここでは遺構保存の処置が講じられたため、広範囲な発掘調査は行えなかったが、低平地で弥生時代中期の遺構が発見されたこと、古墳時代中期のいわゆる初期須恵器や韓式系土器・製塙土器などがまとまって出土したことなどの多大な成果が得られた。その後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当研究会では、10数件の発掘調査を行い、現在に至っている。これらの調査結果から、遺跡北西部では古墳時代の集



第1図 調査地周辺図 (S=1/4000)

表1 周辺の調査地一覧

番号	略号	調査主体	調査期間	文 獻
①	SK82-1	(財)八尾市文化財調査研究会	19810326～ 19810411	原田昌樹 1983[第3章 木の本遺跡発掘調査概要報告]「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」1980・1981年度】
②	90-176		19910221～ 19910331	酒 茂 1992[2. 木の本遺跡(90-176)の調査]「八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅱ」
③	SK82-2		19830221～ 19830303	木田敏幸 1983[1. 木の本遺跡]「昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査—その成果と概要—」
④	SK83-3		19830510～ 19830618	高森千秋 1984[1. 木の本遺跡]「昭和58年度事業概要報告」
⑤	SK90-4		19900119～ 19910131	西村公助 1991[VI. 木の本遺跡(第4次調査)]「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」
⑥	SK91-5		19911202～ 199211219	岡田清一 1992[X IV. 木の本第5次調査(SK91-05)]「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」
⑦	SK96-7		19961001～ 19961016	岡田清一 1998[VII. 木の本遺跡(第7次調査)]「財団法人八尾市文化財調査研究会報告6」
⑧	SK2002-9		20020708～ 20030828	今回報告 本誌III
⑨	SK2002-10		20030128～ 20030314	西村公助 2003[III. 木の本遺跡(第10次調査)]「財団法人八尾市文化財調査研究会報告7」
⑩	SK2002-11		20030227～ 20030731	今回報告 本誌IV
⑪	第1区	大阪府教育委員会	19960210～ 19960307	藤沢真枝・横田明・地村英夫・井西貴子 1999[木の本遺跡発掘調査・III]
⑫	第2区～第5区		199704～ 199903	岩瀬透・横田明 1999[木の本遺跡発掘調査・IV]
⑬	第6区		200003～ 200005	藤田道子 2001[木の本遺跡発掘調査・I]

落、南西部・南東部では平安時代の集落、南部中央では平安時代の水田が検出されている。

今回の調査は、木の本遺跡第9次調査(略号SK2002-9)で、大阪府八尾市南木の本2・6～8丁目で行った公共下水道工事(13-31工区)に伴うものである。調査は、その1(平成14年度)、その2(平成15年度)の2年度に分けて実施した。その1調査区は南部の発進立坑、その2調査区は、北部の人孔である。

調査地は遺跡範囲の北部に位置しており、その1調査区の北70m地点には、第4次調査地－東区(⑤)、北西150m地点には第1次調査地(⑪)がある。その2調査区は、その1調査区から北約200m地点に位置し、南西100mに第1次調査地、西50mに第11次調査地(⑩－本誌IV)、南東20mに市教委調査地(⑫)、北～東80mに大阪府教育委員会調査地がある(⑬～⑭)。

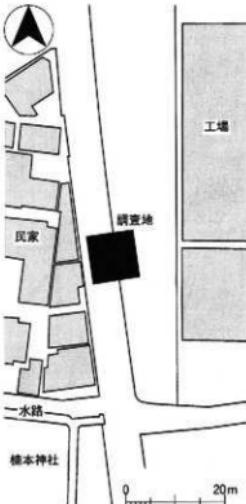
## 2. 木の本遺跡第9次調査(その1)調査概要

### 1) 調査方法と経過

調査区は約10m四方の方形で、西側の約半分は道路下となっている。そのため、東側半分(1区)を調査した後、西側(2区)の調査を行うこととなった。

1区では、現地表(T.P.+10.5m前後)から約2.5mまでを機械掘削し、以下1m前後を人力で掘削し、平安時代以前(第1面)と古墳時代中期(第2面)の遺構面を検出した。

2区では、調査前に現地表下1.5m付近まではすでに掘削され、既設の埋設管などが覆鋼板に吊り下げられていたため、それ以下については、通常の開放された場所での調査方法はとれなかった。



第2図 調査区設定図  
(S=1/1000)

そこで、やむを得ず第1面の調査を断念し、第2面直上(現地表下1.5~3.2m)までに堆積する土を重機によって掻き出し、第2面のみの調査を行うことにした。ところが、機械掘削終了時点の調査地は泥沼のような状態となり、2区全面を掘削・調査することは不可能となった。そこで、南北の2か所にトレーナーを設定し、部分的に第2面の調査を行った。

調査区名は、南のトレーナーを2区、北のトレーナーを3区と変更した。規模は2区が東西4.5m・南北1.5m、3区が東西3.0m・南北1.5mである。

## 2) 基本層序

1区でも、東側壁面が崩れてしまったため、現地表面から 第3図 調査区設定図 ( $S=1/200$ ) の堆積状況は1区北側壁面でしか確認できなかった。2・3区では日光が入らなかったため、地層の観察は充分にはできなかった。

現地表面の標高は10.4~10.6mで、西部の道路側が高い。盛土は0.7~1.2mなされており、やはり西が厚い。確認した地層は第1層以下第15層まである。

盛土直下には旧耕土である第1層黒褐色砂質シルトが東部で遺存していた。第2~6層まではいずれも酸化鉄を多量に含む搅拌された層で、作土と考えられる。第7層は水成層、第8・9層は粘性の強いシルト~粘土で、水田作土の可能性がある。第10~11層は砂礫の混じるシルト質粘土~粘土質シルトである。第12~14層は不安定な極細粒砂混シルト質粘土などからなる。最下の第15層は砂質シルト~粗粒の互層で、水量は極めて豊富であった。

第1層：10YR3/1 黒褐色砂質シルト(旧耕土)。1区東部のみに遺存する。層厚0~0.2m。上面の標高は9.6~9.7mである。

第2層：2.5GY8/1灰白色砂質シルト(床土)。酸化鉄を含む。層厚0~0.2m。

第3層：7.5GY8/1明緑灰色細粒混砂質シルト。層厚0.15~0.3m。

第4層：10YR8/4浅黄橙色極細粒砂混砂質シルト。酸化鉄を含む。層厚0.2~0.3m。上面に溝状遺構①が見られる。上面の標高は9.2~9.3mである。

第5層：10YR7/4にぶい黄橙色シルト質粘土。酸化鉄を含む。層厚0.15~0.3m。

第6層：10YR8/1灰白色シルト質粘土。酸化鉄を多量に含む。層厚0.2~0.3m。

第7層：10BG7/1明青灰色シルト。水成層である。層厚0~0.2m。

第8層：10GY6/1明緑灰色粘土。粘性が極めて強い。層厚0.2~0.3m。

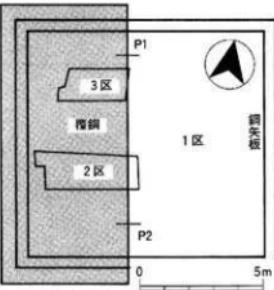
第9層：N5/0灰色粘土質シルト。しまりの弱い地層である。層厚0.1m前後。

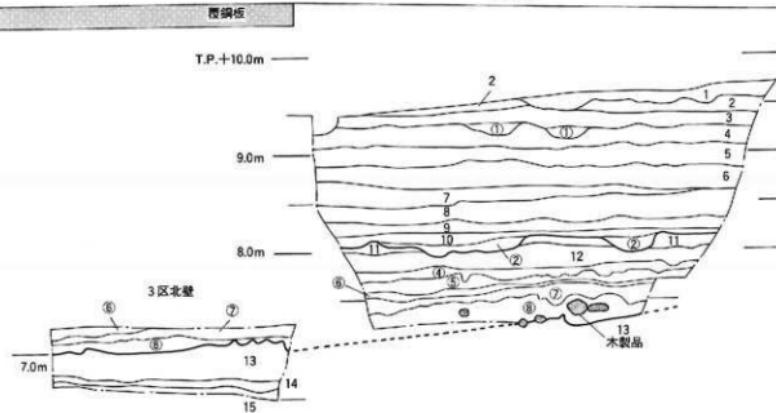
第10層：10GY4/1暗緑灰色極細粒砂~中疊混シルト質粘土。層厚0.05~0.15m。上面の標高は8.2~8.3mで西が低い。1区南端にはここから切り込む落ち込み(S O101)がある。

第11層：2.5GY3/1暗オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルト。層厚0.05~0.15m。この層上面を第1面として調査を実施した。上面の標高は8.1~8.2mで南東が高く北西が低い。

第12層：2.5GY2/1黑色極細粒砂(極少量)混シルト質粘土。層厚0.1~0.3m。

第13層：10GY4/1暗緑灰色シルト質粘土。層厚0.2~0.3m。この層上面が第2面ベースで、上面の標高は7.3m前後である。





第1層 10YR3/1 黒褐色砂質シルト（旧植土）  
 第2層 2.5GY8/1 白灰色砂質シルト（底土）  
 第3層 7.5GY8/1 明緑灰色細粒砂質シルト  
 第4層 10YR8/4 浅黄褐色極細粒砂混粘土質シルト  
 第5層 10YR7/4に少い青緑色シルト質粘土  
 第6層 10YR8/1 明緑灰色シルト質粘土  
 第7層 10BG7/1 明青灰色シルト  
 第8層 10GY6/1 明緑灰色シルト  
 第9層 NS5/0 灰色粘土質シルト  
 第10層 10GY4/1 暗緑灰色極細粒砂～中細粒シルト質粘土  
 第11層 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルト  
 (上面が第1面ベース)  
 第12層 2.5GY2/1 黒褐色極細粒砂（極少量）混シルト質粘土  
 第13層 10GY4/1 暗緑灰色シルト質粘土  
 (上面が第2面ベース)  
 第14層 10BG6/1 青灰色極細粒砂混粘土質シルト  
 第15層 10BG7/1 明青灰色砂質シルト～粗粒の互層

第4層 上面造構内土  
 ①10GY8/1 明緑灰色シルト質粘土  
 第1面造構内埋土  
 ②2.5GY3/1 暗オリーブ灰色極細粒砂に粘土質シルトの  
 ブロック (S D 101-102)  
 第2面河川内埋土  
 ④2.5GY4/1 オリーブ灰色粘土質シルトと植物遺体の互層  
 ⑤2.5GY4/1 オリーブ灰色粘土質シルトに植物遺体点在  
 ⑥7.5GY4/1 暗緑灰色粘土質シルトと植物遺体の互層  
 ⑦7.5Y4/1 灰色粘土質シルト  
 ⑧7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト混粗粒砂

第4図 地層断面図 (S=1/50)

第14層: 10BG6/1 青灰色極細粒砂混粘土質シルト。層厚0.1m前後。

第15層: 10BG7/1 明青灰色砂質シルト～粗粒の互層。層厚0.1mまでを確認した。極めて含水量の多い地層である。

### 3) 検出造構と出土遺物

#### 〈第1面〉

標高8.1～8.2mの第11層上面で、溝状造構(S D 101・102)、落ち込み(S O 101)を検出した。

#### S D 101

1区東端をほぼ南北に伸びるもので、幅0.3～0.5m・深さ0.15m程度の規模を測る。内部には②2.5GY3/1 暗オリーブ灰色極細粒砂に粘土質シルトのブロックが堆積し、遺物は出土していない。

#### S D 102

S D 101の西側1～2mで検出した。S D 101にはほぼ平行して伸びる。幅0.5～0.8m、深さ0.15m程度を測るが、北端では西へ屈曲するものか、幅広となっている。埋土はS D 101と同じ、遺物は出土しなかった。

## S O101

調査区南端で検出した。前述のとおり、1枚上層の第10層上面から切り込むものである。ほぼ東西の方向に伸び、深さ0.3mまでを確認した。内部には③10GY4/1明緑灰色極細粒砂混シルト質粘土が堆積する。遺物は出土していない。

## &lt;第2面&gt;

標高7.3mの第13層上面で、河川(N R201)の東の岸を検出した。

## N R201

1区の南西-北東に肩をもち、北西へゆるやかに下がっている。2区は南東隅で肩の下がりが認められ、3区はすべて河川内部にあたる。流路方向は南西-北東と考えられる。深さは0.5m程度まで確認できた。

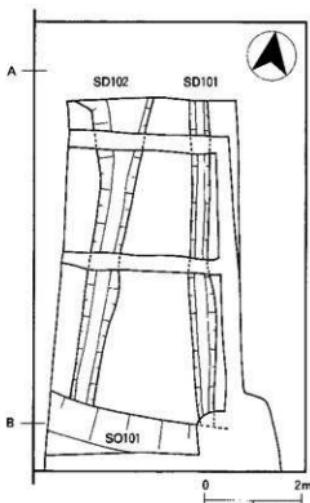
埋土は④2.5GY4/1オリーブ灰色粘土質シルトと植物遺体の互層、⑤植物遺体を含む2.5GY4/1オリーブ灰色粘土質シルト、⑥7.5GY4/1暗緑灰色粘土質シルトと植物遺体の互層、⑦7.5Y4/1灰色粘土質シルト、⑧7.5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト混粗粒砂からなる。このうち、⑧肩から多量の木製品(未成品・杭・用材・加工木・自然木を含む)が出土した。

出土した範囲は岸に沿った河川内外で、岸から南東・北西側とともに3m程度におさまる。長い材は岸から1m程度内側の範囲におおむね平行して横たわっており、小型の木製品や土器がそれらにからまっていた。数本の杭が河川内部および岸にかけて南北方向に打ち込まれているのを確認したが、その他の材が杭で留め付けられた状況は見られなかった。

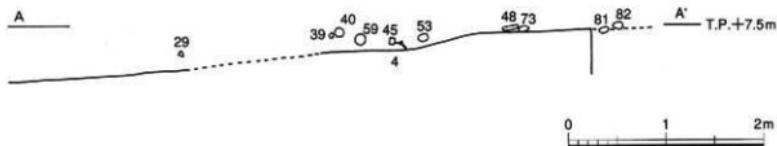
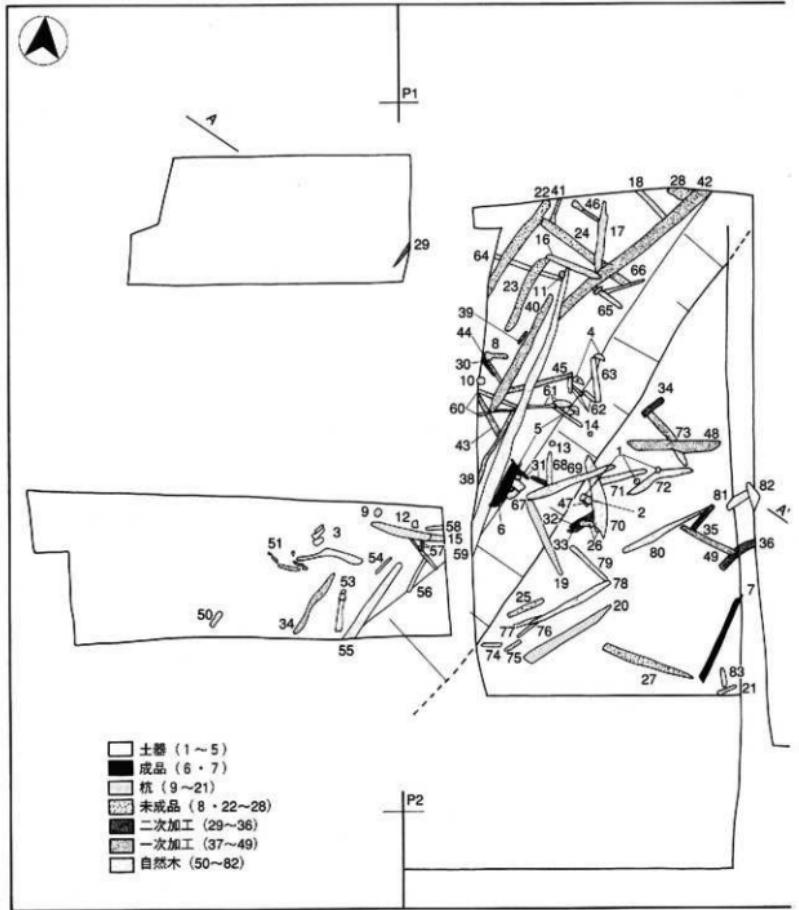
出土遺物は、遺存状態の良い土師器3点(1~3)、須恵器2点(4~5)のほか、多量の木製品(未成品・自然木含む)で、木製品の総数は78点(6~83)を数える。木製品のうちわけは、杭以外の未成品2点(6~7)、用途不明未成品1点(8)、杭15点(9~21)、杭未成品6点(22~28)、鋸未成品の可能性のある材1点(28)、用材として板状・棒状に加工されたもの8点(29~36)、樹皮をとる・枝を払う・切り取るなどの一次的な加工のある材13点(37~49)、未加工の自然木34点(50~83)である。このうち、上器5点(1~5)、木製品3点(6~8)を図示した。出土遺物の詳細は、第2表にゆだねる。

土師器小型鉢(1)は半球形の体部に内湾して立ちあがる口縁部がつく。外面体部には、下半に放射状・上半に横方向のハケが施される。ハケ目は深く粗い。内面体部はヘラケグリの後ヘラナデ、口縁部には横方向のハケが施される。ほぼ完形品で、口径10.5cm・器高5.9cmを測り、にぶい黄橙色を呈する。

土師器高杯(2)は小型の脚部である。やや粗雑なつくりで指オサエの痕跡がめだち、裾端部も指による成形が残る。脚部のみ完存。裾部径8.4cm・現存高5.9cmを測る。にぶい黄橙色を呈する。



第5図 第1面平面図 (S=1/100)



第6図 第2面平面断面図 ( $S=1/50$ )

土師器甕(3)は3区北東端、河川肩から1.5mほど内側で出土した。口縁部から屈曲部付近まで遺存する。肩部から丸く屈曲し、内湾気味に聞く口縁部に至る。外面体部には横方向のハケ、内面には指オサエの痕が顯著に残る。口径15.6cmを測る。器表面は灰オリーブ色、器肉は灰色を呈する。

須恵器高杯蓋(4)は断面三角形を呈する稜から、下外方に聞く口縁部に至る。端部は内に段を持つ。つまみは中央部がくぼむ。口径13.6cm・器高5.5cm・つまみの径は2.6cmを測る。灰色を呈するが、外面天井部は灰かぶりのため白灰色を呈する。

須恵器杯身(5)は丸みのある体底部から断面三角形の短い受部に至る。受部上面は水平である。口縁部は内傾した後直立気味となり、端部は丸みをもって終わる。ほぼ完存しており、口径10.6cm・器高5.5cmを測る。灰色を呈するが、外面底部に暗青灰色の火捺状の変色が見られる。

木製容器(6)は船形を呈するいわゆる「櫓」である。3/4程度が遺存する。長辺は楕円形を呈しており、短辺は直線的に面取りされる。短辺の縁は、幅1.5~2.0cm程度の範囲が水平に削りだされている。長さ47cm・最大幅13.6cm・高さ8.0cmを測る。身の部分の厚さは1.9~2.5cm、縁の部分は長辺で1.0cm前後、短辺は1.5cm程度である。

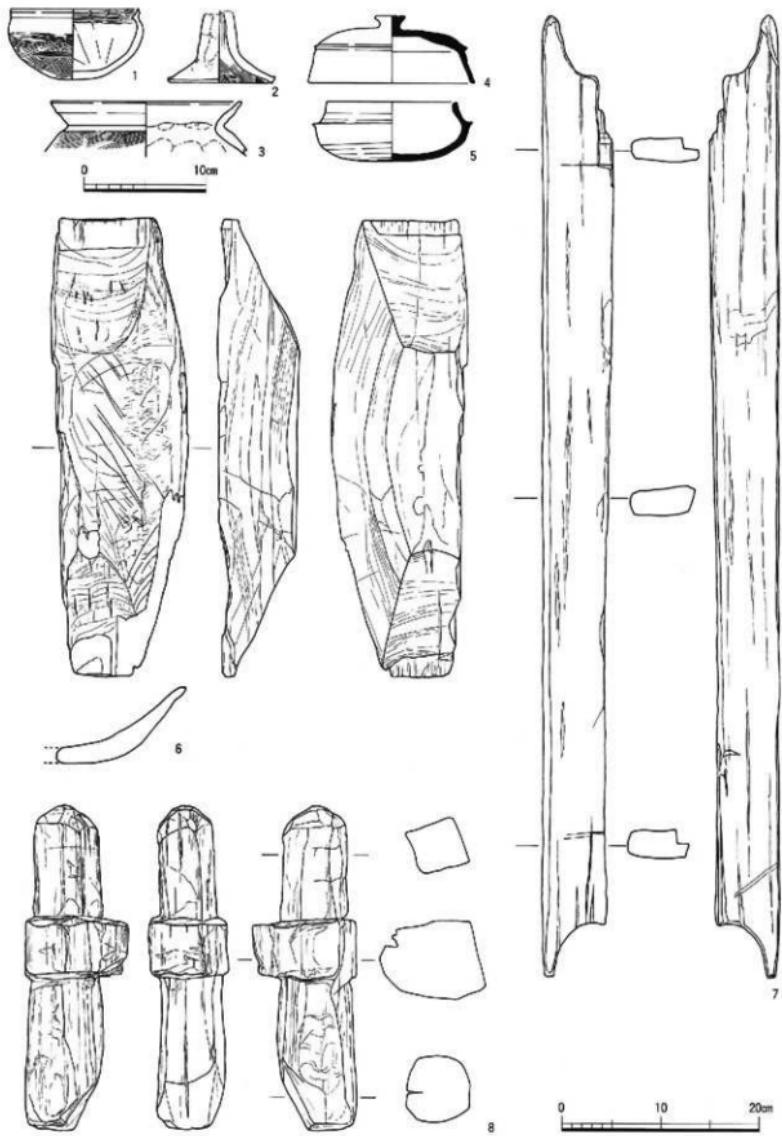
用途不明木製品(7)は板状を呈し、長辺の一辺は欠損している。短辺は半形に抉られ、6.0cm程度の突起が削りだされている。一方の面の抉りに接して方形の窪みが切り取られている。長さ99.5cm・最大幅7.0cm・最大厚3.0cmを測り、窪みは長さ9.5cm・幅1.2~2.1cm・深さ1.1~1.5cmを測る。扉の可能性のある板である。

用途不明未成品(8)は中央部に突起をもつ角材で、一面は欠損している。突起部をはさみ、一方の断面は方形、もう一方の断面は円形~隅丸方形である。突起部の断面は楕円形である。両端は周縁を削り、尖りぎみとなり、一端は丁寧に面取りされている。長さ33.5cm・突起部の幅11.0cm・厚さ8.0cmを測る。

表2 木製品一覧表

番号	器種	遺存状態	出土地点・状況		法面(cm)			特徴
			地区	川岸から來 川に対して	埋在長	最深	幅	
9 柄	一端欠損	2区	北西1.5m	打ち込む	17.0	10.0		一端を削って尖らせる。
10 柄	一端欠損	1区	北西1.5m	打ち込む	25.0	8.0		一端を削り取る。
11 柄	一端欠損	1区	北西1.5m	打ち込む	45.0	9.0		一端を削って尖らせる。炭化している。
12 柄	両端欠損	2区	北西1.2m	打ち込む	15.0	8.0		半裁?
13 柄	一端欠損	1区	北西0.5m	打ち込む	16.5	4.0		一端を削り取る。
14 柄	一端欠損	1区	北西0.2m	打ち込む	42.0	4.5		一端を削って尖らせる。
15 柄	一端欠損	2区	北西1.2m		83.0	8.0	6.5	一端を削って尖らせる。
16 柄	一端欠損	1区	北西1.2m		126.0	9.0		一端を削って尖らせる。先端から40~50cmのところに2条1組の溝をめぐらせる。
					77.0	7.5		
17 柄		1区	北西1.2m		54.0	6.0	4.0	先端を削って尖らせる。もう一端を切り取る。
18 柄	一端欠損	1区	北西1.0m		92.0	6.0	4.0	一端を削って尖らせる。炭化している。
19 柄		1区	河川岸		81.5	5.5	4.0	先端を削って尖らせる。もう一端を切り取る。
20 柄	一端欠損	1区	南東0.7m		23.0	3.0	2.0	一端を削り取り
21 柄	一端欠損	1区	南東2.5m		103.0	7.5	5.5	一端を削って尖らせる。
22 柄未成品	一端欠損	1区	北西2.0m	平行する する	85.5	9.0	7.0	一端を丸く削り取る。
23 柄未成品	一端欠損	1区	北西1.5m	平行する	95.5	3.0	4.5	一端を丸く削り取る。
24 柄未成品	一端欠損	1区	北西1.0m	直交する	39.5	4.5		一端を丸く削り取る。
25 柄未成品	一端欠損	1区	南東0.2m		21.5	4.5	2.5	一端を丸く削り取る。
26 柄未成品	両端欠損	1区	南東0.2m		86.0			一端を削り削る。半裁?
27 柄未成品	両端欠損	1区	南東1.5m					一端に削り、炭化あり。一部に剥皮残る。

番号	器種	遺存状態	出土地点・状況		法量(cm)			特徴
			地区	川摩から奈 川に対して	現存長 (幅)	長径 (厚)	短径	
28	鼎?未成品	一端欠損	1区	北西0.7m		15.0	13.0	7.0 一端を薄く削る。
29	用材	両端欠損	3区	北西3.0m	平行する	44.0	3.0	2.5 角柱か、接線有り。
30	用材	両端欠損	1区	北西1.5m	直交する	14.0	2.5	2.5 角柱か、接線有り。
31	用材	両端欠損	1区	北西0.5m	直交する	17.0	4.0	3.5 角柱か、接線有り。
32	用材	両端欠損	1区	南東0.2m	平行する	15.0	3.5	1.5 角柱か、接線有り。
33	用材	両端欠損	1区	南東0.2m	平行する	49.0	4.0	3.0 三角柱。
34	用材	両端欠損	1区	南東0.2m	平行する	15.0	2.0	1.0 角柱か、接線有り。
35	用材	両端欠損	1区	南東1.2m	平行する	35.5	5.0	3.0 接線あり。
36	用材	一端欠損	1区	南東1.7m	平行する	61.5 (長径) 8.0	7.5 (幅) 8.0	端を薄く削る。炭化している。
37	一次加工	一端欠損	2区	北西1.5m	平行する	123.0	6.5	5.0 一端を切り取る？一部炭化
38	一次加工	両端欠損	1区	北西1.0m	平行する	25.0	4.0	半段？
39	一次加工	両端欠損	1区	北西1.3m	平行する	16.0	3.5	1.0 一部炭化
40	一次加工	一端欠損	1区	北西1.3m	平行する	122.0	8.0	6.0 一端を切り取る？一部炭化
41	一次加工	両端欠損	1区	北西1.6m	平行する	61.0	6.0	半段？
42	一次加工	両端欠損	1区	北西0.8m	平行する	179.0	12.0	半段？
43	一次加工	一端欠損	1区	北西1.1m		44.5	5.5	4.0 端を切り取る。
44	一次加工	端欠損	1区	北西1.2m		76.0	4.0	端が炭化、半段？
45	一次加工	一端欠損	1区	北西1.0m		54.5	4.0	端が炭化、半段？
46	一次加工	一端欠損	1区	北西1.5m	直交する	56.0	4.0	端を切り取る。
47	一次加工	両端欠損	1区	南東0.1m		26.5	3.5	1.5 半段？
48	一次加工		1区	南東0.6m		90.0 (長径) 10.0	2.5 (幅) 10.0	両端を切り取る。
49	次加工	一端欠損	1区	南東1.5m	直交する	59.0 (長径) 5.0	3.0 (幅) 5.0	端を切り取る。
50	未加工	両端欠損	2区	北西2.0m	平行する	9.0	3.5	1.5
51	未加工	両端欠損	2区	北西2.0m		19.0	6.0	4.0 枝分かれの部分
52	未加工	両端欠損	2区	北西1.8m		58.0	7.0	4.5
53	未加工	両端欠損	2区	北西1.3m		151.5	4.5	3.0 弧状にまがる。
54	未加工	両端欠損	2区	北西1.2m	平行する	14.0	2.0	1.5
55	未加工	両端欠損	2区	北西1.1m	平行する	183.0	11.0	7.5
56	未加工	両端欠損	2区	北西0.9m	平行する	23.5	2.0	
57	未加工	両端欠損	2区	北西1.0m	直交する	24.0	1.0	
58	未加工	両端欠損	2区	北西1.0m		14.5	4.0	2.5
59	未加工	両端欠損	1区	北西1.0m	平行する	284.0	9.5	5.0
60	未加工	両端欠損	1区	北西1.2m		120.0	4.0	1.0
61	未加工	両端欠損	1区	北西0.7m	直交する	32.0	2.5	1.5
62	未加工	両端欠損	1区	北西0.5m	直交する	75.0	4.0	3.0
63	未加工	両端欠損	1区	北西0.5m		43.0	6.5	3.5 樹皮残る。
64	未加工	両端欠損	1区	北内1.6m	直交する	40.0	3.5	
65	未加工	両端欠損	1区	北西0.8m	直交する	33.0	5.5	4.0 樹皮残る。
66	未加工	両端欠損	1区	北西0.8m		67.0	4.5	樹皮残る。
67	未加工	両端欠損	1区	北西0.8m		37.5	3.0	1.0
68	未加工	両端欠損	1区	北西0.4m		56.0	4.5	3.0
69	未加工	両端欠損	1区	北西0.1m		100.0	5.0	4.5
70	未加工	両端欠損	1区	南東0.2m		82.0	11.0	9.0
71	未加工	両端欠損	1区	南東0.3m		36.5	7.0	3.5
72	未加工	両端欠損	1区	南東0.6m		44.0	8.5	5.5
73	未加工	両端欠損	1区	南東0.5m		56.5	5.5	3.5 弧状にまがる。
74	未加工	両端欠損	1区	南東0.1m		30.0	6.0	3.5
75	未加工		1区	南東0.3m		25.0 (幅) 20.0	4.0 (厚) 20.0	木の根。
76	未加工	両端欠損	1区	南東0.3m		18.0	4.0	2.0
77	未加工	両端欠損	1区	南東0.3m		27.0 (長径) (幅)	4.0 27.0	
78	未加工	両端欠損	1区	南東0.5m		51.0	6.0	2.5
79	未加工	両端欠損	1区	南東0.5m	直交する	34.0	5.0	4.0
80	未加工	両端欠損	1区	南東1.0m		94.0	5.5	3.5 樹皮残る。芯材が抜けている。
81	未加工	両端欠損	1区	南東1.5m		36.0	6.0	
82	未加工	両端欠損	1区	南東1.5m		33.0	8.0	3.5
83	未加工	両端欠損	1区	南東2.3m		26.0	4.5	2.5



第7図 出土遺物実測図（土器：S=1/4・木製品：S=1/5）

### 3. 木の本遺跡第9次調査(その2)調査概要

#### 1) 調査方法と経過

現地表(T.P.+10.640m)下3.9mまで機械掘削し、調査を行った。夜間のケコム工法による工事掘削のため、結果的には掘削工事に立ち会う形となった。

#### 2) 調査成果

現地表下3.2m(T.P.+7.4m)前後の地層から、古式土師器(庄内式～布留式期)が出土した。平面的な調査および断面の観察は不可能であったが、現地表下3.2m(T.P.+7.4m)前後で、古式土師器を包む地層を確認することができた。周辺における既往の調査成果でも、同時期の遺構や遺物を検出していることから、当地に当該期の居住域が存在しているものと考えられる。

### 4.まとめ

その1調査区では、2面の調査を行った。土質のためか、地層観察用のセクションは一部しか残せず、西部は道路下にあたり、ごく一部しか発掘できなかつたことは悔やまれる。

第1面検出遺構の所属時期は不明であるが、周辺の調査結果・層位等から平安時代中頃以前と考えられる。第2面で検出した河川N R 201は、須恵器の所属時期から、5世紀中頃(陶邑ON46段階)のものと考えられる。

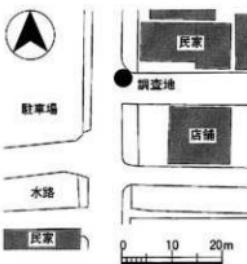
河川N R 201内部には数本の杭が打ち込まれているのを確認したが、その他の木製品の出土状況からは、構築物を構成するものとは考えにくい。枚方市交北城ノ山遺跡第12次調査では、5世紀中頃の河川から多量の木製品・建築部材が出土している。出土状況は当調査地と同様、川岸に沿って並んでおり、杭でとめられていた痕跡があることから、「何らかの足場を構築する材料に転用されていた」と考えられている。また、建築部材が多量に含まれることから、大型の建物の存在を想定され、「古墳(牧野車塚古墳)築造のさいのベースキャンプ的な集落だったのではないか」とも考えられている。当地では、明確な建築部材は少なく、加工のないものがほとんどであったが、時期・出土状況が符合することから、何らかの関連性はあるものと考えられる。

また、その2調査区は夜間調査で、工法も特殊であったが、既往の調査成果同様、古墳時代前期(庄内～布留式期)の遺物包含層が確認できたことから、この付近は当該期の集落の中心部に近いことが考えられる。

これらの結果から、古墳時代の木の本遺跡は、その2調査区付近には前期、その1調査区付近には中期の生活の場が展開していたことがわかる。

#### 参考文献・引用文献

- 田辺昭三 1981「須恵器大成」角川書店
- 西村健司 1991『古代史発掘'88～'90新遺跡カタログVol.3』朝日新聞社
- 桑原武志・西村健司 1992「7 交北城ノ山遺跡(第12次調査)」『枚方市文化財年報11(1989年度)』(財)枚方市文化財研究調査会



第8図 調査地設定図 (S=1/1000)



第1面 全景



第2面 検出状況（南東から）



第2面 全景（南東から）



第2面 全景（南東から）



遺物（1・2）出土状況（南から）



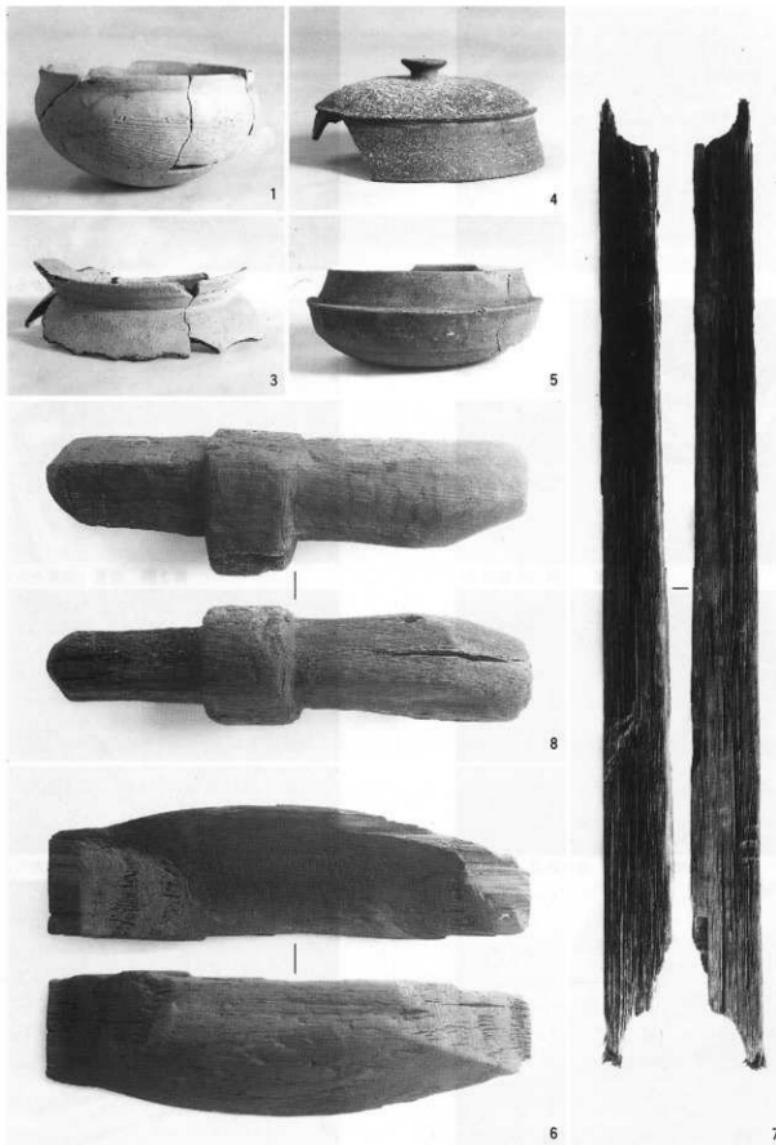
遺物（4）出土状況（南から）



遺物（6）出土状況（西から）



遺物（8）出土状況（東から）



出土遺物

IV 木の本遺跡第11次調査（S K2002-11）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市南木の本3・4丁目地内で実施した公共下水道工事(14-32工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本調査で報告する木の本遺跡第11次調査(SK2002-11)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第379号 平成15年2月5日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成14年度調査(第5区)－平成15年2月27日～平成15年3月14日(実働8日間)、平成15年度調査(第1～4区)－平成15年6月12日～平成15年7月31日(実働8日間)の2年度にかけて、平成14年度調査(第5区)－岡田清一、平成15年度調査(第1～4区)－西村公助・岡田を担当者として実施した。総面積は約39m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては荒川和哉・飯塚直世・岩本順子・國津れいこ・鈴木裕治・曹龍・都築聰子・横山妙子が参加した(敬称略。五十音順)。
1. 本書に関わる業務(遺物実測・図版トレース・遺物撮影)および執筆・遺物撮影・編集は岡田が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	27
2.調査概要.....	28
1)調査経過と方法.....	28
2)基本層序.....	28
3)検出遺構と出土遺物.....	30
3.まとめ.....	31

## IV 木の本遺跡第11次調査(S K2002-11)

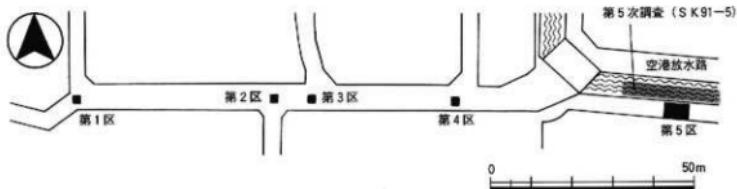
### 1. はじめに

木の本遺跡は八尾市南部に位置し、範囲は概ね南北1.2km・東西1.7kmを測る。現在の行政区画範囲では木の本1～3丁目、南木の本2～9丁目、空港1・2丁目付近にあたる。地理的には、旧大和川の主流である平野川左岸の自然堤防上に立地し、周辺には、北東に老原遺跡、南西に太田遺跡、西に八尾南遺跡が隣接している。

本遺跡は昭和56年に南木の本4丁目において実施された調査の結果、弥生時代中期後半頃に比定される柱穴・溝・井戸・土坑といった居住域関連の遺構とともに多量の土器が検出され、遺跡として認知されるようになった。この調査地点から北西約200m地点のところに今回の調査地点が位置する。先述の昭和56年の調査以後、現在まで八尾市教育委員会および当研究会によって10件を数える調査が実施されている。これら既往調査の中で、今回の調査地に最も近接しているのが平成3年度に当研究会が実施した北側の空港放水路改修工事に伴う調査である。本調査では、古墳時代初頭～中期にかけての土坑・溝・ピット群が検出されている。ピット群は古墳時代中期前半頃に比定されるもので、建物の復原までは至っていないが住居址の可能性を有するものである。また、出土遺物で特筆すべきものとして初期須恵器や韓式土器片がある。



第1図 調査位置および周辺図 (S=1/2500)



第2図 調査区設定図 (S=1/120)

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法と経過

今回の調査は公共下水道工事(14-32工区)に伴うもので、当研究会が本遺跡内で実施する第11次調査にある。調査対象は発進立坑1箇所、人孔4箇所の計5箇所で総面積約39m<sup>2</sup>を測る。なお、今回の調査は平成14年度と平成15年度の2年間に亘るもので、平成14年度に発進立坑部分、平成15年度に人孔部分の調査を行った。以下、調査の便宜上、西側にあたる人孔部分を西から第1~4区、そして東端にあたる発進立坑部分を第5区と呼称する。

【第1~4区】4箇所ともに平面約2m四方を測る。掘削は現地表(T.P.+10.3~10.5m)下約1.5mまでの盛土および搅乱層を重機によって排除した後、以下、1.0~1.3mまでの堆積層を重機と人力を併用し、遣構・遺物の検出に努めた。

【第5区】平面規模は南北3.6m×東西6.4mを測る。掘削は現地表(T.P.+10.2m)下1.2mまでの盛土および近・現代の作土層を重機によって排除した後、以下、3.3mまでを重機と人力を併用し、遣構・遺物の検出に努めた。

### 2) 基本層序

【第1~4区】現地表下1.5~1.8mまでは既存の道路築造時に伴う盛土および上水道・ガス管等埋設に伴う埋め戻し土で構成されており、後述する第5区に見られる近・現代の作土層は存在しない。第1区では現地表下1.5~2.1m(T.P.+8.8~9.4m)間で氾濫性の水成層を確認した(第1層)。出土遺物が無いため時期決定は難しいが、層位と周辺における調査成果から中世~近世にかけての年代観が与えられる。なお、第1区では本層以外の各層序(第2~5層)についても第2~4区とは様相が異なる。第2~4区では、いずれも最深部にあたる現地表下2.4~3.0m(T.P.+7.5~8.1m)間で遺物を含む堆積層(第11層)を確認した。その内訳は、第2区で弥生時代後期の甕底部、第3区で古墳時代中期と推定される須恵器片、第4区で古墳時代前期(布留式期)と推定される古式土師器の壺の破片といった概ね3時期に亘る土器片が出土した。さらに本層上部には、灰色粘土のブロック土が混入する攪拌を確認した。以下、各層について記述する。なお、第1~5層は第1区のみに存在する堆積層である。

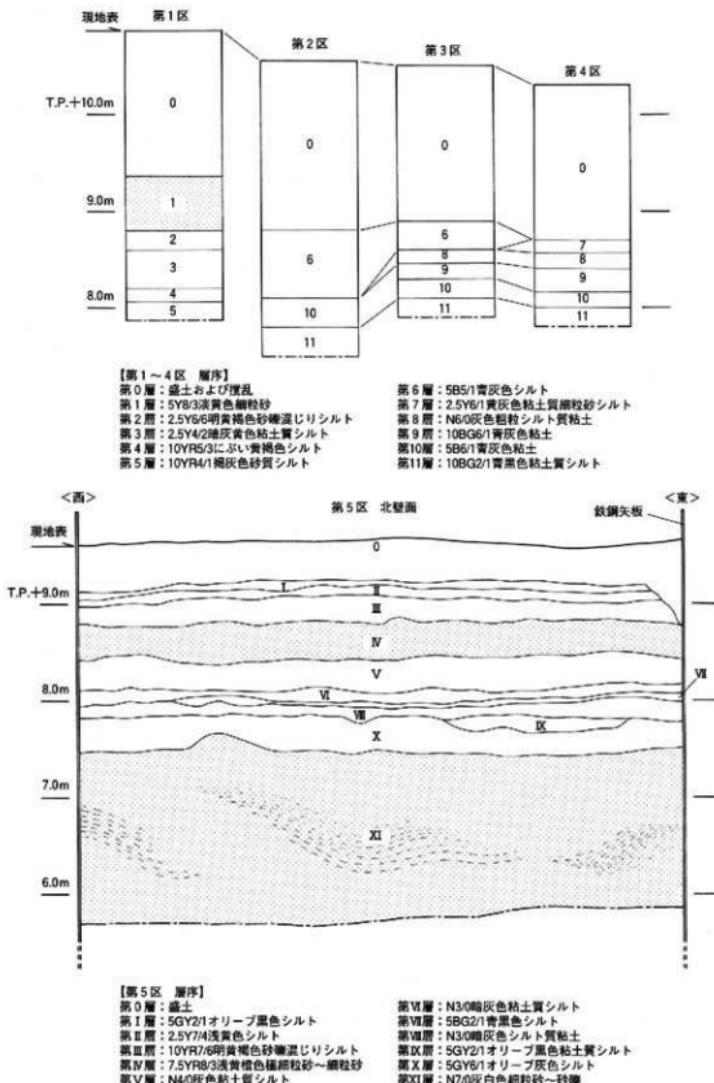
第0層：盛土および搅乱。層厚1.5~1.8m。

第1層：5Y8/3淡黄色細粒砂。層厚0.6m前後。砂質シルトのラミナが挟在する。

第2層：2.5Y6/6明黄褐色砂礫混じりシルト。層厚0.2m前後。上部に鉄分・マンガンの沈着が観察される。

第3層：2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルト。層厚0.4~0.5m。

第4層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト。層厚0.15m前後。



第3図 第1～4区地層断面模式図および第5区北壁断面図 (S=1/50)

- 第5層：10YR4/1褐色灰色砂質シルト。層厚0.2m以上。氾濫性の水成層と思われる。
- 第6層：5B5/1青灰色シルト。層厚0.3~0.7m。やや粘性が強い。第2・3区に堆積する。
- 第7層：2.5Y6/1黄灰色粘土質細粒砂シルト。層厚0.15m前後。氾濫性の水成層と思われる。第2区のみに堆積する。
- 第8層：N6/0灰色粗粒シルト質粘土。層厚0.15m前後。第3・4区に堆積する。
- 第9層：10BG6/1青灰色粘土。層厚0.15~0.25m。植物遺体を含む。第3・4区に堆積する。
- 第10層：5B6/1青灰色粘土。層厚0.15~0.2m。第2~4区に堆積する。
- 第11層：10BG2/1青黒色粘土質シルト。層厚0.3m以上。上面に灰色粘土のブロックが混入し、攪拌が見られる。第2~4区に堆積する。

【第5区】現地表下1.4~1.8m(T.P.+8.4~8.8m)間で氾濫性の水成層(第IV層)、現地表下2.7~4.5m(T.P.+5.7~7.5m)間で河成堆積層(第XI層)のいずれも河川に起因する堆積層を確認した。2層ともに検出遺物が無いため時期決定は難しいが、第XI層については層位と周辺における調査成果から古墳時代初頭以前が考えられる。以下、各層について記述する。

- 第0層：盛土。層厚1.0m前後。
- 第I層：5GY2/1オリーブ黑色シルト。層厚0.1m前後。現代の作土層である。
- 第II層：2.5Y7/4浅黄色シルト。層厚0.1~0.15m。近世の陶磁器片が若干含まれる。
- 第III層：10YR7/6明黄褐色砂疊混じりシルト。マンガンを含む。
- 第IV層：7.5YR8/3浅黄橙色極細粒砂~細粒砂。層厚0.3~0.4m。微細な植物遺体が挟在する。
- 第V層：N4/0灰色粘土質シルト。層厚0.3~0.4m。管状マンガンが全域に見られる。
- 第VI層：N3/0暗灰色粘土質シルト。層厚0.05~0.15m。やや粘性が強く、植物遺体を若干含む。
- 第VII層：5BG2/1青黒色シルト。層厚0.05~0.1m。第VI層と同様に植物遺体を含む。
- 第VIII層：N3/0暗灰色シルト質粘土。層厚0.15~0.2m。植物遺体ラミナを含む。
- 第IX層：5GY2/1オリーブ黑色粘土質シルト。層厚0.1~0.15m。断面の観察から土坑あるいは溝といった遺構になる可能性があるが、面的に捉えることはできなかった。北側の第5次調査では同層位で古墳時代初頭の遺構面を検出している。やや粘性が強く、植物遺体を若干含む。

- 第X層：5GY6/1オリーブ灰色シルト。層厚0.3~0.4m。植物遺体や炭化物が含まれる。
- 第XI層：N7/0灰白色細粒砂~砂疊。層厚2.0m以上。周壁面のラミナの状況から南東~北西方向の河川流路が考えられる。

### 3) 検出遺構と出土遺物

すべての調査区において面的に遺構を捉えることはできなかった。しかし、第5区の第X層上面(T.P.+7.8m前後)から切り込む第IX層は、断面観察および北側の第5次調査成果と照合すると古墳時代初頭に比定される遺構の可能性がある。さらに同区では、第XI層にみる南東~北西方向に流路



第4図 第2区第一11層出土遺物実 写真1 第2区第一11層出土遺物  
測図 (S=1/2)

を有する古墳時代初頭以前の埋没河川を確認することができた。

出土遺物の中で図化できたものは、第2区—第11層検出の弥生時代後期(畿内第V様式)に比定される壺の底部1点(1)のみである。外面はタタキメを有し、外底面はややドーナツ底気味である。胎土は生駒西麓産で、色調は内外面ともに暗褐色(10YR3/3)を呈する。

### 3.まとめ

今回の調査では面上に遺構を捉えることはできなかつたが、第2~4区にかけては弥生時代後期~古墳時代中期の遺物を含む堆積層、そして第5区では古墳時代初頭に相当すると見られる遺構および当該期以前の河川を確認することができた。冒頭でも記したように第5区の北側で実施された第5次調査では、古墳時代初頭~中期にかけての遺構が検出されており、有機的関係が示唆される。しかし、当地一帯ではまだまだ調査例が少なく、実態解明に至るには今後の調査の累積を要する。

#### 註

- 1 原田昌則 1983.8「第3章 木の本遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告2
- 2 岡田清一 1992「X IV 木の本遺跡(第5次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告34



写真2 調査地／第1~4区（北東から）



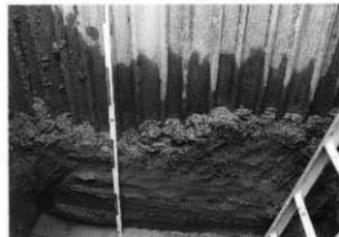
第1区 北壁面



第2区 北壁面



第3区 南壁面



第4区 南壁面



調査地／第5区（北東から）



第5区 北壁 (T.P.+9.0~9.5m付近)



第5区 全景 (T.P.+7.0~9.0m付近/南東から)



第5区 完掘状況 (最深T.P.+約5.7m/東から)

V 久宝寺遺跡第47次調査（K H2002-47）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市北龜井町2・3丁目で行った、公共下水道工事(14-8工区)に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第47次(KH2002-47)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第350号 平成15年1月9日付)に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成15年2月28日～7月2日(実働30日間)に、成海佳子を担当者として実施した。調査面積は、153.4m<sup>2</sup>を測る。
1. 現地調査に参加した調査補助員は、伊藤静江・岩沢玲子・垣内洋平・加藤邦枝・川村一吉・鈴木裕治・竹田貴子・田島宣子・永井律子・中村百合・實樹婦美子・吉川一栄・若林久美子である。
1. 内業整理に参加した調査補助員は、上記のほか、村井俊子・村田知子である。
1. 本書作成にあたっては、遺物実測—伊藤・岩沢・加藤・竹田・田島・永井・中村・吉川・若林、拓本—中村・村井、トレース—村井、遺物写真撮影—垣内、本文執筆・全体の構成—成海がおこなった。

## 本　文　目　次

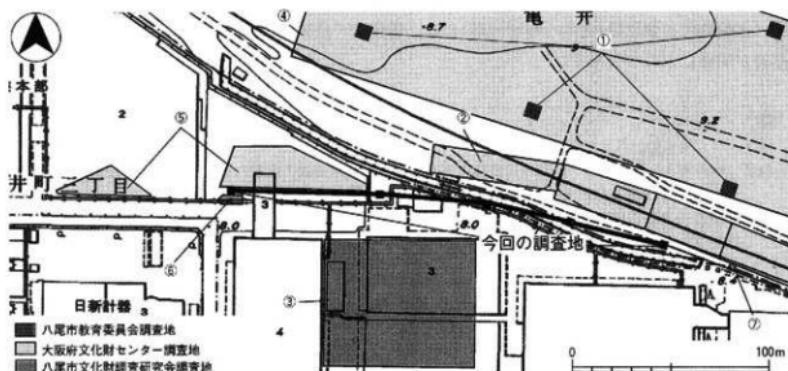
1.はじめに.....	33
2.調査概要.....	34
1) 調査方法と経過.....	34
2) 基本層序.....	35
3) 検出遺構と出土遺物.....	36
3.まとめ.....	46

## V 久宝寺遺跡第47次調査(KH2002-47)

### 1. はじめに

久宝寺遺跡は八尾市西部中央に位置し、市域を越え、北は東大阪市、西は大阪市に広がっており、東西・南北1.7km四方の広範囲に及んでいる。八尾市域内の現在の行政区画では、北久宝寺1～3丁目・久宝寺1～6丁目・西久宝寺・南久宝寺1～3丁目・神武町・渋川町1～7丁目・大字龜井・大字渋川・北龜井町1～3丁目がその範囲である。南東端に渋川廃寺・北東に久宝寺寺内町を擁しており、南は跡部遺跡・龜井遺跡、西は龜井北(加美南)遺跡・加美遺跡、北東は佐堂遺跡と接し、東には長瀬川の旧流路をはさんで竜華寺跡・成法寺遺跡・八尾寺内町・宮町遺跡が南から北へと連なって位置している。

当遺跡発見の契機は、昭和10(1935)年、「久宝寺部落の西南部すなわち許麻神社の西方小字西口及び栗林で」(現久宝寺5丁目)道路工事の際、現地表下約1.8～3.0mの範囲で「舟の残片とともに後期弥生式土器、土師器の壺形土器、坏、及び高杯の破片や須恵器の壺や坏などがまざって発



第1図 調査地周辺図 (S=1/2500)

表1 周辺の調査地一覧表

番号	略号	調査主体	調査期間	文 獻
①	95-565	八尾市教育委員会	1996.10.9～ 1996.07.12	藤井淳弘・吉田珠巳「1997.1.久宝寺遺跡(95-565)の発生」「八尾市内道路平成8年度発 掘調査報告書Ⅱ」八尾市文化財調査報告37
②	竜華東西線	(財)大阪府文化財 センター	1999.3.6～ 1999.12.24	西村 歩「2000「久宝寺遺跡(竜華東西線)」発掘調査終了報告書」
③	KH2000-34	(財)八尾市文化財 調査研究会	2000.7.18～ 2000.11.25	酒 純「2001「5.久宝寺遺跡第34次調査(KH2000-34)」「平成12年度(財)八尾市文化財 調査研究会事業報告」
④	水処理施設	(財)大阪府文化財 センター	2001.4.20～ 調査中	
⑤	竜華東西線 その2	(財)大阪府文化財 センター	2002.12.2～ 2002.07.31	西村 歩・奥村茂輝「2002「久宝寺遺跡(竜華東西線その2)」発掘調査終了報告書」
⑥	KH2002-42	(財)八尾市文化財 調査研究会	2002.09.30～ 2002.10.24	柏口 雄「2003「5.久宝寺遺跡第42次調査(KH2002-42)」「平成12年度(財)八尾市文化 財調査研究会事業報告」
⑦	AT2002-35	(財)八尾市文化財 調査研究会	2002.12.09～ 2003.01.14	金城尚夫「2003「III跡部道路筋35次調査(AT2002-35)」「財団法人八尾市文化財調査研究 会報告75」

見された」ことによる。<sup>b1</sup>その後は目立った開発もなく、発掘調査もなされず、遺跡の実態は不明なままであったが、昭和48~49(1973~1974)年、近畿自動車道建設予定地での試掘調査が行われることとなった。試掘調査は国鉄関西線(現JR大和路線)をはさんで南北1.5kmの間に7箇所のトレンチを設定して行われたが、各調査区で弥生時代から中世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が広範囲に広がる複合遺跡であることが明らかとなった。<sup>b2</sup>試掘調査の結果を踏まえ、昭和57(1982)年以降は、(財)大阪文化財センターによる発掘調査が行われることとなり、試掘調査の結果を裏付ける多大な成果が得られている。<sup>b3</sup>

当遺跡内南部の旧国鉄竜華操車場跡地(以下操車場跡地と呼ぶ)では、昭和61(1986)年の国鉄解散に伴い、再開発が進められることとなり、昭和63(1988)年以降、久宝寺駅新設、駅周辺の既存道路の拡幅・延長などに伴う発掘調査が行われるようになった。平成9(1997)年度以降は、道路網の新設・公共施設整備が計画され、それに伴い、操車場跡地外での開発工事も活発になってきた。以来、周辺では当調査研究会・(財)大阪府文化財センター・大阪府教育委員会・(財)大阪市文化財協会が断続的に発掘調査を行い、数々の成果が得られている。

これまでの調査結果から、平野部に立地した他の遺跡同様、明確な生活の痕跡が見られるのは繩文時代晚期以降であるが、弥生時代後期以降爆發的に発展したことが明らかとなっている。とくに古墳時代初頭以降(庄内~布留式期)には、居住域・生産域・墓域が検出されており、集落の全貌が明確にされつつある。

#### 註

註1 『八尾市史』八尾市役所 1958

註2 中西靖人・辻内義浩 1974『近畿自動車道天埋~吹田線建設予定地内第1次発掘調査報告書(現地調査總括編)』大阪文化財センター調査報告X 大阪文化財センター

註3 中西靖人他 1986『久宝寺南(その3)』・1987『久宝寺南(その1)』・1987『久宝寺南(その2)』  
1987『久宝寺北(その1~3)』近畿自動車道天埋~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書  
大阪文化財センター

註4 第1表文献参照

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法と経過

今回の調査は久宝寺遺跡第47次調査(略号KH2002-47)で、大阪府八尾市北龜井町2・3丁目地内で行った公共下水道工事(14-8工区)に伴うものである。

調査地は、操車場跡地内とその南西側にある民間の旧工場敷地内にまたがって伸びる計画道路(竜華東西線)の歩道部分に位置し、北には(財)大阪府文化財センターの竜華東西線調査地④・⑤があり、西は当調査研究会第42次調査地⑥と、東は当調査研究会跡部遺跡35次調査地1区⑦と接し、南側には当調査研究会第34次調査地③がある。東西の総延長は240mあり、人孔(マンホール)5か所とそれを結ぶ管路部分からなる。このうち、中央部にあたるNo.2・3人孔間の管路は、改修された植松放水路跡および工場旧建物跡にあたるため、市教育委員会からの調査の指示範囲外となった。調査対象となったのは、人孔部分がNo.1・3~5の4か所、管路部分がNo.1・2間の約70m、No.3~5間の約110mである。調査面積は、人孔部分が約2m四方、管路部分は幅1.4m前後、深さは3m前後である。

調査日程は、当初、各人孔を先行し、その後管路部分を西から進めていく予定であったが、工場敷地と掘削位置の調整や工場内の工事・他の埋設物の移設などの問題解決をしないまま調査を実施したことから、予定通りに行うことはできなかった。また、調査終了後は直ちにマンホール・管路を設置して埋め戻したため、各調査区の横のつながりは不明瞭である。

掘削方法は、ある程度の深さまでを素掘りとし、その後矢板を立てて以下の掘削を続ける「矢板立て込み」によるもので、人孔部分ではこの方法で調査することができた。管路部分の調査については、市下水道部・竜華地区都市拠点整備室から素掘りの状態で数日間放置(調査であるが)することや、セクションを高く残すことが危険だと指摘されたため、安全を最優先させることになった。具体的には、現地表下1.5m前後までを機械で1次掘削し、矢板を立てた後、北側に地層観察用のセクションを残し、以下を2次掘削とした。2次掘削の範囲は現地表下1.5~2.0m程度に堆積する古墳時代前期の遺物包含層直上まで、この間、遺構・遺物の有無を確認しながら慎重な機械掘削を進め、濃密な遺物を検出した時点で人力掘削に切り替えた。その後、セクションをはずし、新たに下層にセクションを残しながら3次掘削として古墳時代初頭前半(庄内式期古相)の基盤層である河川堆積土を工事深度まで機械掘削したが、湧水が多く危険な部分については最終面まで観察していないところもある。

調査区の位置については、すでに操車場内で基準としている国土座標第VI系(原点一東経136°00'・北緯36°00' - 福井県越前岬付近)を使用し、他の調査区との位置関係をあきらかにするように努めた。

地区名については、西から1~46区とした。西端のNo1人孔が1区・No3人孔が19区・No4人孔が32区・No5人孔が46区である。管路部分は工事の都合で約4mごとに区切り、2~18区・20~31区・33~45区とした。

## 2) 基本層序

調査地の現地表面の高さは、T.P.+7.9~8.4mで東が高いが、道路工事の終了している北側、工場敷地内で工事の終了している南西部(1~5区)や、下水道工事が終了している18・19区などはT.P.+8.3~8.4mと一定している。旧操車場設置の際の盛土は1m前後なされているが、旧工場・操車場敷地内とともに産業廃棄物の埋め立てなどがあり、損傷を受けていた部分が多い。また、植松放水路跡も19~21区の南側で認められた。

全体的な層序は、盛土以下おむね0~Ⅳ層に分けることができたが、Ⅲ層までは部分的にしか確認していない。西端の1区~01層は調査直前になされた盛土で、直下の02層上面はT.P.+8.1mを指し、2~18区の現地表面と大差ない。東端の45区~01~03層は操車場設置前の水路跡の可能性がある。

I層は作土で、操車場や工場として利用される前の水田耕土である。II層は床土・島畑作土などと考えられる。III・IV層は島畑の盛土またはベース層で、マンガン・鉄分を多く含む黄褐色~褐色系の粘土質シルト・砂質シルトなどのブロックからなる。古墳時代中期以降の土器類の小片を含む。V層・VI層は古墳時代前期の遺構ベースとなるもので、一部水田耕土となる部分もある。VII・VIII層は久宝寺遺跡の古墳時代前期の基盤層をなす埋没河川で、上面は古墳時代初頭前半(庄内式期古相)の遺構ベースとなっており、12区ではVIII層上面で弥生時代後期末~初頭前半の落ち込みが形成されている。

### 3) 検出遺構と出土遺物

平面的に検出できた遺構は、近世以降の溝1条(S D101)、古墳時代中期の小穴1個(S P201)・土坑1基(S K201)・溝1条(S D201)、古墳時代初頭～前期(庄内～布留式期)の土坑3期(S K301～303)・溝2条(S D301・302)・河川1条(N R301)、で古墳時代初頭前半(庄内式期古相)の土坑1基(S K401)・溝3条(S D401～403)・落ち込み2か所(S O401・402)、弥生時代後期末の落ち込み1か所(S O501)である。古墳時代中期の遺構はV層上面、古墳時代初頭～前期の遺構はV・VI層上面、古墳時代初頭前半の遺構はⅦ層上面、弥生時代後期末の遺構はⅧ層上面で検出した。その他、壁面で確認できた遺構に河川1条・溝5条・土坑2基・小穴2基がある。調査地は、下水道工事がすでに完了している18・19区間に55m離れているので、西部(1～18区)と東部(19～46区)とに分けて記述する。

#### 西部(1～18区)の概要

##### 〈V層上面検出遺構〉

###### S P201

7区南端で検出した。古墳時代前期(布留式期)の遺構同様V層上面で検出されたが、本来の構築面は削平されている可能性が高い。径0.3～0.35m・深さ0.2mを測る。平面の形状は東西に長い楕円形、断面の形状は半円形である。埋土はN4/0灰色シルト質粘土である。内部から須恵器杯身2個(1・2)が出土した。

2個の杯身はともに口縁部を東に向けて、立てた状態で重なっていた。1は底部内面中央に同心円タタキが残り、2には底部裏面に2条のヘラ描き沈線がある。ともに6世紀前半(陶邑II形式1段階-M T15)に属する。

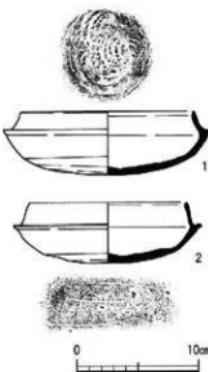
###### S K301

6区で検出した。東西幅3.5m程度を測る土坑である。深さは0.5m程度で、2段の掘り形を有する。埋土は①2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト混極細粒砂と②2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト～極細粒砂のブロックからなり、②には多量の炭を含む。西部では古式土師器8個体(3～10)、東部では楕形高杯(11)が出土した。

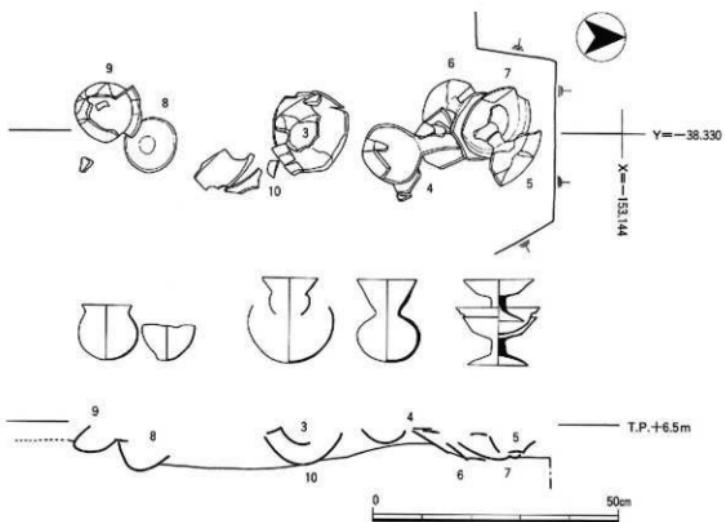
3～10は、西側2段目のテラスに南北に並んだ状態で検出された。検出状況から、西側の肩に沿って並べられていたようで、直立していたもの(8～10)、横倒しになったもの(4～7)がある。いずれも遺存状態は良いが、器表面の風化が著しいため、調整には不明瞭なものが多い。土器は、北から高杯5・小型有段鉢7・高杯6・小型直口壺4・小型丸底壺3・布留式壺10・直口鉢8・小型壺9である。このうち、小型壺3は布留式壺10の体部内に落ち込んでいた。また、高杯6の杯部には小型有段鉢7が、さらにその上に高杯5が載せられていたようで、3個体が重なって横倒しとなっていた。小型丸底壺3・小型直口壺4・高杯5・6・小



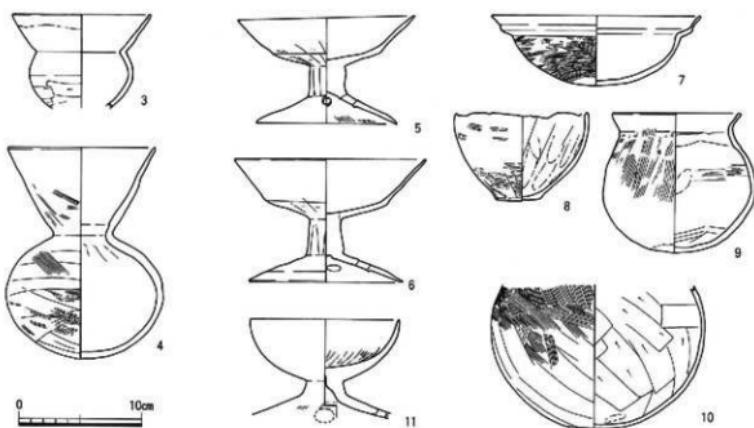
写真1 S P201遺物出土状況  
(北から)



第2図 S P201出土遺物実測図  
(S=1/4)



第3図 SK 301出土遺物断面図 (S=1/10)



第4図 SK 301出土遺物実測図 (S=1/4)

型有段鉢7は、いずれも精製の器種であるが、直口鉢8・小型壺9は粗製である。

小型丸底壺3は口径が胴部最大径より大きく開く。小型直口壺4は頸が著しくしまり、体部はやや扁平、丸底である。高杯5・6は、やや小型の有稜高杯で、相似形をしている。稜はにぶく、

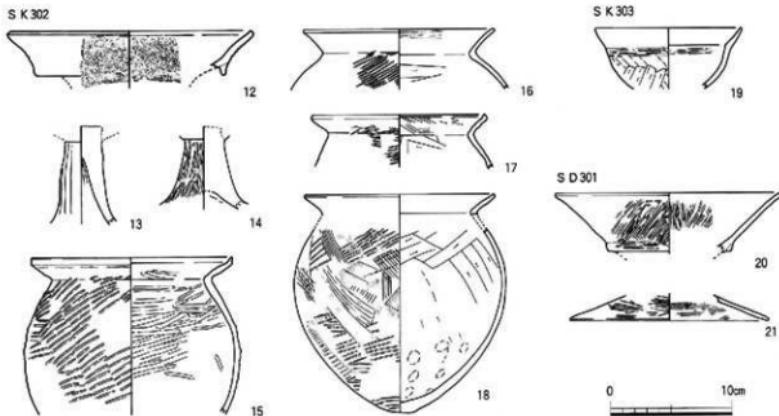
杯底部から脚柱状部にかけて、一次成形時のヘラケズリの痕跡が残る。小型有段鉢7にも一次成形時のヘラケズリの痕跡が残る。直口鉢8は弥生時代後期の系譜を引くもので、タタキと指ナデで仕上げられ、口縁端部は波状を呈している。小型壺9は類例を見ない粗製壺で、搬入品の可能性がある。外面全体と内面底部には煤・炭が付着し、器表面は剥離が甚だしい。布留式壺10はほぼ球形の体部で、底部はわずかに平面をなしている。高杯11は低脚の椀形高杯で、杯部内面には放射状ヘラミガキが施される。

高杯に低脚で椀形のものもあること、小型丸底壺の口径が体部最大径を凌駕すること、小型直口壺・布留式壺の体部が球形であること、V様式タイプの直口鉢が残ることなどの特徴から、これらの土器群は古墳時代前期前半(布留式古相)に比定できる。

#### S K 302

8~9区にかけて検出した。検出部での規模・形状は、南に底辺をもつ一辺1.5m程度の三角形であるが、南南西~北北東に軸をもつ方形を呈するものと考えられる。深さは約0.2m、断面は逆台形を呈する。埋土は10YR4/1褐色極細粒砂と粘土質シルトのブロックで、炭を含んでいる。平面の形状から堅穴住居の可能性が考えられたが、確証は得られていない。内部から、二重口縁壺(12)・高杯(13・14)・V様式系壺(15)・庄内式壺(16~18)のほか、古式土師器の小破片が比較的多量に出土した。

二重口縁壺12は粗雑な櫛描き文で加飾するもので、外面に波状文・直線文・波状文、内面に波状文3帯が施される。高杯13・14はともに脚柱状部に縱方向の調整を行うもので、13はヘラナデ、14は細かく密なヘラミガキが行われる。ともに杯部との接合は挿入法である。壺15はV様式系壺で、内面体部の調整はヘラナデである。16~18は河内型庄内式壺の最古の形態をもつもので、18の底部は径2cm未満の小さな平底を呈し、外底面にもタタキ目が見られる。遺構の時期は、壺などの特徴から、古墳時代初頭前半(庄内式古相)に位置づけられる。



第5図 S K 302・303・S D 301出土遺物実測図 (S=1/4)

**S K 303**

16区北端で、南半分を検出した。平面の形状は径2.2mの円形で、深さは0.3mを測り、2段の掘り形を有する。埋土は上から①2.5Y5/2暗灰黄色中疊混粘土質シルト、②焼土、③5Y4/1灰色炭混じり極細粒砂である。下部に焼土や炭を多量に含むことから、いわゆる「焼土坑」であろう。①層から、小型鉢(19)ほか、古式土器の極小破片が極少量出土した。小型鉢19は体部下半に一次成形時のヘラケズリを残すもので、小型有段鉢出現以前の器種である。

**S D 301**

9区、S K 302の東側で検出した。検出面はVI層上面であるが、IV-44層に削平されている可能性が高く、本来の構築面はV層上面であろう。南南西-北北東に伸び、幅0.55~0.65m・深さ0.3mを測り、断面の形状は浅いU字形である。埋土は土坑S K 302と同じ10YR4/1褐色極細粒砂と粘土質シルトのブロックで、内部から高杯(20・21)のほか、古式土器の小破片が若干出土した。高杯20の内外の調整は縦方向のヘラミガキによるもので、口径比・口縁比からも古墳時代初頭前半(庄内式古相)に位置づけられる。南端でS K 302と直角に接するが、切り合い関係は不明である。S K 302とは造構の時期・埋土も同じであることから、無関係とは考えにくい。

**〈VII層上面検出遺構〉****S K 401**

15区南西端で検出した。東西0.95m以上・南北0.6m以上を測る方形の土坑である。断面の形状は逆台形で、深さ0.15mを測る。内部はN6/0灰色中疊である。遺物は出土していない。

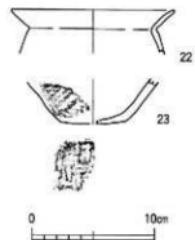
**S D 401**

8区で検出した。南南西-北北東に伸びる。幅0.5m・深さ0.15m、断面の形状は浅いU字形である。埋土は5BG3/1暗青灰色極細粒砂と5BG6/1青灰色粘土質シルトのブロックで、内部からV様式系壺(22)・器種不明底部(23)のほか、極少量の土器片が出土した。底部23は底面が方形を呈するもので、器表面に(籠か)の圧痕が残る。

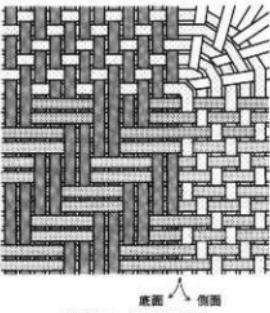
網目は「綾織り」で、底面と側面の編み方は異なっている。底面はたて条・よこ条とともに2条1組を用いて「1超え2潜り1送り」で、底側面は底面のたて条・よこ条をともに1条ずつのたて条とし、新たによこ条を加えて「2超え1潜り1送り」で編んでいる。平面の形状は方形を呈しているため、側面の角でたて条をV字形に加え、広げている。底面の網目は纏向遺跡東田地区北溝出土の壺(27)と同じである。

**S D 402**

8区で検出した。南東-北西に伸び、溝S D 401とT字形に接続する。幅0.3m・深さ0.1m、断面の形状は浅いU字形である。埋土はS D 401と同じ5BG3/1暗青灰色極細粒砂と5BG6/1青灰色粘土質シルトのブロックで、遺物は出土していない。



第6図 S D 401出土遺物実測図  
(S=1/4)

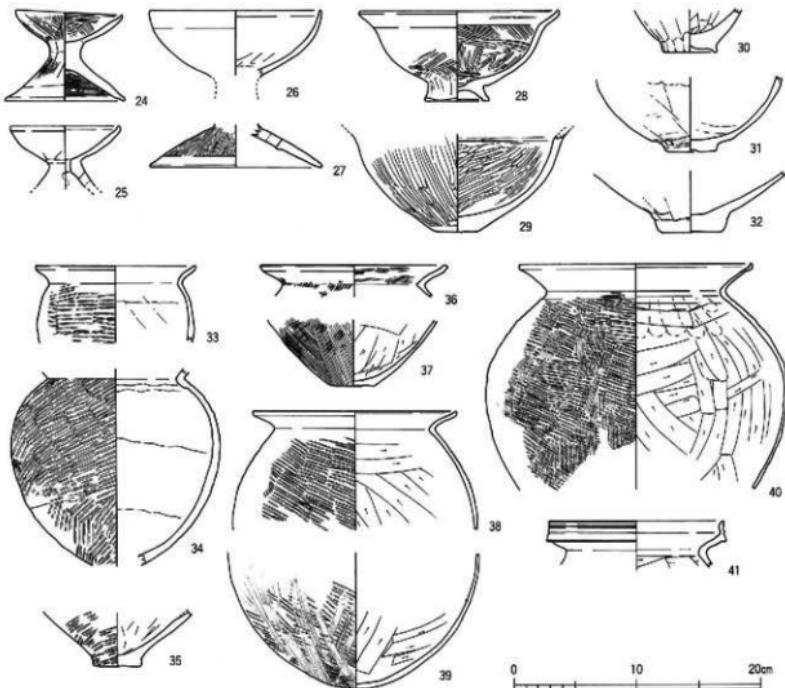


第7図 網目模式図

### S D 403

10~12区で検出した。南東南~西北西に流路をもつ。西側の肩は平面的には検出できなかったが、壁面の観察から、幅7.2m・深さ0.5mを測る大規模な溝であることがわかる。断面の形状は逆台形である。埋土は上から①N7/0灰白色砂質シルト~極細粒砂の互層、②N7/0灰白色粘土質シルト~中粒砂の互層で、①から小型器台(24・25)、高杯(26・27)、鉢(28・29)、不明底部(30~32)、V様式系壺(33~35)、庄内式壺(36~39)、大和型庄内式壺(40)、吉備系壺(41)のほか、土製支脚(42)等、比較的多量の土器類が出土している。

小型器台24は深めの皿形の受部と、短い脚柱状部から円錐形に聞く脚裾部からなるもので、受部と脚部の間は貫通しない。調整はハケ、胎土は生駒西麓のものである。小型器台25は浅い椀形の受部に円錐形の脚部がつくもので、口縁端部には面をもつ。受部と脚部の間には径0.7cmの焼成前の円孔が穿たれている。ともに定型化しない段階の形態で、胎土も精製されていない。高杯杯部26は椀形で、裾部27の調整は、縦ヘラミガキによる。鉢28は高台状の底部がつくもので、粗いヘラミガキ調整とともに、V様式の系譜を引くものかもしれない。鉢29も両面ヘラミガキで調整され、底部は小さな平底を呈している。形態からは吉備に系譜を求めるができるかもしだれ



第8図 S D 403出土遺物実測図

ない。底部は30・31が鉢、32が壺のものであろう。30は高台状の底部、31は球形の体部に小さな突出平底がつくもので、底面には木葉痕がある。32の底部には、ヘラケズリが見られる。V様式壺33～35は分割成形の痕跡が顕著で、外面は水平～右上がりタタキ内面にはナデ調整が行われている。庄内式壺36の口縁部は内湾気味に伸び、端部は外方へつまみ出される。37の底部は径3.5cm程度の平底で、外から中へと時計回りのヘラケズリが行われている。38・39はともに外面に左上がりのタタキが行われているが、内面のヘラケズリの方法・胎土はいわゆる「河内型」の庄内式壺である。40はいわゆる 第9図 S D403出土土製支脚実測図(S=1/4)「大和型」の庄内式壺で、口縁部と体部間の屈曲部が丸いこと、外面の左上がりタタキ・疎らなハケ、内面の指ナデ、不揃いなヘラケズリの方向等にその特徴が表されている。胎土は灰白色を呈する。吉備系壺41は口縁外側面に3条の擬凹線を有する。

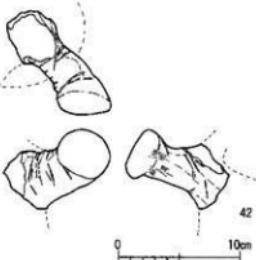
土製支脚42は向かって右の指のみ遺存するもので、摘み・左の指・脚部への移行部分から欠損している。指の径3cm・現存長10cm余りの棒状で、先端は丸みのある平端な面を作る。タタキ・ナデ・ハケなどで粗雑に作られている。伊予中部の弥生終末期新相(梅木III-2)に類例がある。

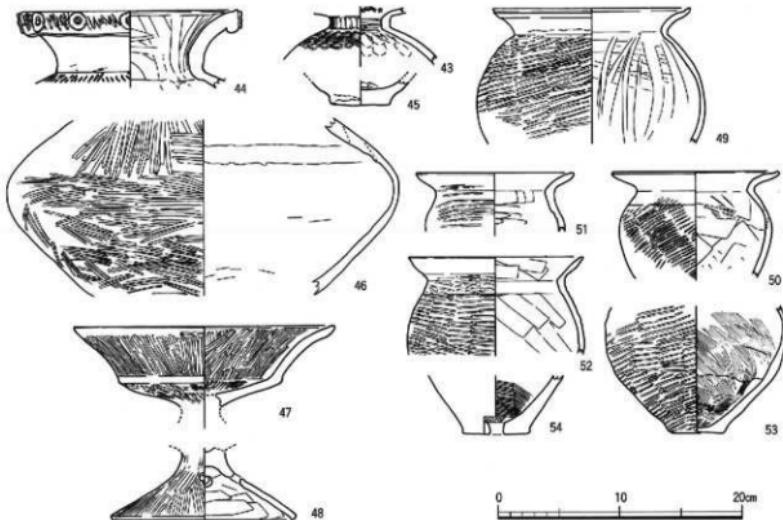
遺構の時期は、小型器台とともに定型化していないこと、小さな平底を有する庄内式壺があること、大和型庄内式壺(寺沢庄内1式)・吉備系壺(高橋IX-X a)とともに古い段階のものであること、さらに土製支脚が前述のように庄内式期直前のものと考えられることなどから、古墳時代初頭前半(庄内式古相)と考えられる。

#### 〈V層上面検出遺構〉

##### S O501

11～12区で検出した。南東～北西に伸びる河川流路の可能性があるが、幅1～2m・深さ0.5mにわたって南東へ落ち込む2段の掘り形が検出できただけである。ここより西へさらに下がるために、10区以西では検出できなかった。埋土はN4/0灰色粘土質シルトとN7/0灰白色極細粒砂～疊の互層で、北東側のテラス状の段から、弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半の壺(43～46)・高杯(47・48)・壺(49～53)・底部有孔土器(54)などが出土した。43は小型の二重口縁壺と考えられる。内面口縁部および外面の肩部に櫛描き波状文が施される。広口壺44は口縁部外側面にヘラ先または半截竹管による粗雑な波状文を1条めぐらせ、竹管押圧円形浮文を一周13個貼り付ける。外面の肩にヘラ状工具によるナデが見られるが、工具は波状文の施文原体に似る。底部45は外底面にヘラケズリの痕跡が見られる壺または鉢の底部であろう。46は大型で扁平な球形を呈する体部のみ遺存する。外面の調整はヘラミガキで、上部は縱方向、中位は横方向、下位は何方向かに分割して施される。内面の上半部分には粘土粋の接合痕が顕著に見られる。有稜高杯47の調整はすべてヘラミガキで、放射状を基本に施されている。脚柱状部との接合は挿入法である。48は楕円高杯の脚部である。外面調整は放射状の粗いハケ、内面調整は横方向の板ナデである。裾部上位に4孔を穿つ。壺には中型49と小型50～53があり、形態・調整とも一定していない。いずれも分割成形時の接合部から割れている。49は球形の体部に強く外反する口縁部がつくもので、口縁端部はつまみ上げられ、外側面に沈線状の窪みが一周する。内面の調整は、横方向の板ナデ





第10図 S O 501出土遺物実測図 (S=1/4)

後、縦方向の指ナデである。50は口径が最大径を凌ぐが、体部は上位に最大径をもち、張りは強い。外面のタタキは右上がりで、細く密である。内面は下半にヘラケズリがなされ、上半に板ナデ・ミガキ状のヘラの圧痕などが見られる。口縁部のヨコナデの範囲は広く、肩のタタキが消されている。51も口径が最大径より大きく、体部の張りは弱い。外面のタタキは水平で粗い。内面は板ナデである。52はやや内湾気味に開く口縁部をもつもので、外面のタタキは水平～左上がり、内面調整は板ナデである。53は球形の体部に小さく突出する底部が付く。外底面はヘラケズリされ、やや上げ底となっている。外面のタタキは水平～右上り、内面はハケ調整である。底部有孔土器54は焼成後底部中央に穿孔するもので、内面には厚く煤が付着している。

遺構の時期は、二重口縁壺43や加飾壺44・大型の扁平壺46・椀形高杯48の存在、高杯47の口縁比、45・50・53の外底面や内面に見られるヘラケズリや甕の小型化・体部の球形化などの特徴から、弥生時代後期末～古墳時代初頭前半に比定できる。

#### 東部(19～46区)の概要

##### 〈I層上面検出遺構〉

###### S D101

24・25区で検出した。幅2.8m・深さ1.5m、南東一北西に流路をもち、断面の形状は逆台形である。内部のほとんどは、産業廃棄物で埋められ、底にN7/0灰白色細～粗粒砂と5BG5/1青灰色粘土質シルトの互層が堆積する。近世以降の溝で、操車場設置前後に埋められたものであろう。

##### 〈III層上面検出遺構〉

###### S K 201

36区北西端で検出した。径0.9mの円形を呈し、深さは0.75m、二段の掘り形を有し、下段は袋

状となる。埋土は上から①N5/0灰色粗粒砂、②2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト、③2.5Y5/2暗灰黄色混極細粒砂、④2.5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルト、⑤N5/0灰色粘土質シルトで、②～⑤にはいずれも植物遺体が含まれ、なかでも⑤には極めて多量の植物遺体が含まれていた。遺物は出土しなかった。

## S D 201

37区で検出した。南西一北東に流路をもつ。幅2.0m前後、深さ0.3m、断面の形状は浅いU字形である。埋土は、上から①N7/0灰白色細～中粒砂、②N6/0灰色粗粒砂～疊である。遺物は出土しなかった。

## 〈VI層上面検出遺構〉

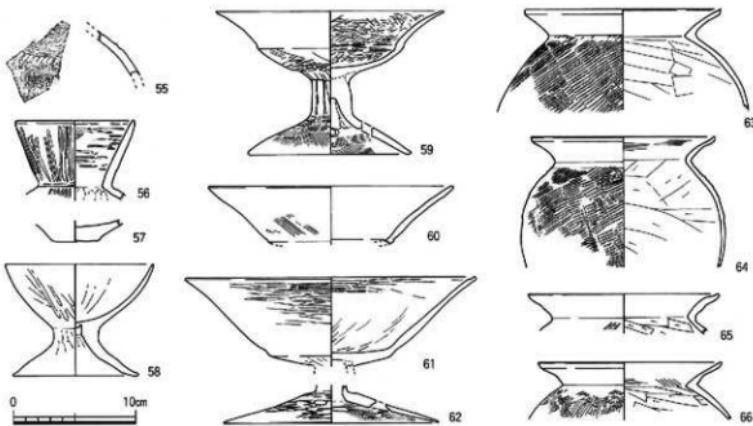
## S D 302

40区で検出した。南西一北東に伸びる。幅4.0m・深さ0.6m、断面の形状は二段の掘り形を有し、西の肩はVI層を主としたブロックで構成されている。埋土は中央部の①7.5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト、②2.5GY3/1～4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト、外側の③2.5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂～粘土質シルトの互層、④7.5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト～極細粒砂の互層からなり、内側の①・②層は植物遺体を含んでいる。遺物は出土していない。

## N R 301

26～35区で検出した。南南西一北北東に伸びる河川である。幅30m・深さ1.2mを測る。西の肩は攪乱を受けており、平面的には検出できなかったが、東の肩は直線的に落ちている。埋土は上から①5BG2/1青黒色～N5/0灰色粘土質シルト(下半部に植物遺体のラミナ)②2.5Y5/3黄褐色・N7/0灰白色・5BG5/1青灰色砂質シルト～極細粒砂にN5/0灰色粘土質シルト(植物遺体含む)のブロック、③N5/0灰色粗粒砂混シルト質粘土、④灰白色極細粒砂と5BG4/1暗青灰色粘土質シルトの互層、⑤5BG4/1暗青灰色粘土質シルトとN7/0灰白色極細粒砂の互層に5BG2/1青黒色極細粒砂のブロック、⑥5BG4/1暗青灰色粘土質シルトとN7/0灰白色極細粒砂の互層、⑦5BG4/1暗青灰色極細粒砂とN7/0灰白色粗粒砂～大疊の互層、⑧N7/0灰白色極細粒砂にN3/0暗灰色中粒砂混シルト質粘土(植物遺体多量に含む)のラミナ、⑨N7/0灰白色極細粒砂に5BG4/1暗青灰色粘土質シルトの互層、⑩N3/0暗灰色疊混粘土質シルトである。このうち②層から壺(55)・高杯(59・60)、③層から高杯(58・61・62)・直口壺(56)・壺底部(57)・庄内式壺(63～66)などが出土した。

55は壺の肩部分の破片である。外面には、細かい縦位のヘラミガキがなされ、櫛描き直線文・波状文・直線文が施され、最下に連続ヘラ压痕がある。高杯59～61はすべて有稜高杯である。59は杯部に密なヘラミガキ、柱状部はヘラナデ、裾部はハケで調整され、柱状部は短く、裾部上位に4孔を持つ。60にはハケがわずかに見られるほか、ヨコナデで仕上げられている。61は深く直線的な杯口縁部に水平な狭い底部が付くもので、横方向の密なヘラミガキで仕上げられている。一方、58は椀形の高杯で、小型で粗製、粗いヘラミガキが施される。直口壺61も高杯60同様小型でやや粗製、粗いヘラミガキが外面は縦方向に、内面は横方向に行われている。壺底部62の外底面にはヘラケズリが行われている。庄内式壺63は、体部から「く」の字形に屈曲外反し、端部をつまみあげる口縁部をもつ典型的なものである。体部の張りも強く、上位に最大径をもつものと考えられる。64は体部の張り・屈曲部の稜も弱く、口縁端部のつまみ上げも小さい。65・66は体部の張り・屈曲部内面の稜も強いが、口縁端部はつまみ上げ気味に終わっている。



第11図 NR 301出土遺物実測図 (S=1/4)

これらの遺物のうち、とくに有縁高杯には、59(庄内式古相)から61(庄内式新相)への時期差が顕著にみられることから、NR 301は古墳時代初頭後半(庄内式新相)以降に埋没したものと考えられる。

#### S O 401

20区南西端で検出した。東西2.2m以上にわたって深さ0.35m程度が2段に落ち込んでいた。埋土は①2.5G4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルト、②2.5Y5/1オリーブ灰色細粒砂にN4/0灰色粘土質シルトのブロック、③N4/0灰色中～粗粒砂混粘土質シルトからなり、いずれも少量の炭を含んでいる。遺物は出土しなかった。

#### S O 402

21区北東端で検出した。S O 401から6m前後東に位置する。東隣の22区については調査を行わなかったため、西側しか検出できなかった。検出部での東西幅2.1mを測る。西の肩に沿って幅0.5m・深さ0.3mの溝状の窪みがあり、そこから0.1m立ち上がり、東1.5mのところから再び深さ0.1m程度の窪みに至る。埋土は全体に①2.5G4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルトが、溝状の窪みには②2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細粒砂混シルト質粘土が堆積し、いずれも多量の炭を含んでいる。東部の浅い窪みの底には、厚さ1cm程度の炭が堆積する。遺構の状況からは、S O 401とともに堅穴住居の可能性もあるが、確証は得られなかった。

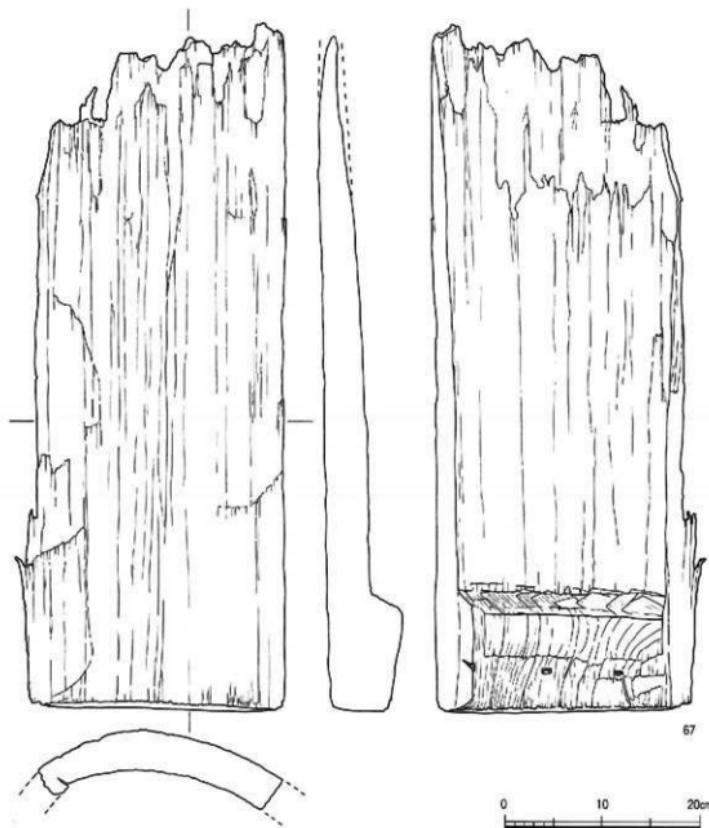
#### （その他の遺物）

#### 木製容器(67)

一本を削り抜いて底板を付け、桶とするもので、1区VII-⑩層中で検出した。⑩層は湧水量が多く、遺構に伴うものかは確認できなかった。検出レベルはT.P.+5.5m前後である。側板の長さ70cm・幅25cmが遺存しており、径50cm程度に復元できる。側板本体の厚さは3.0～4.5cmほどで、上部が薄くなっている。底部には厚さ6.5～7.5cmの断面台形の突帯があり、突帯内側の下部には方形の小孔(0.8×0.5cm)が斜上方に穿たれ、樹皮が詰まっている。類例には京都府古殿遺跡出土

例のほか、当遺跡でも竜華東西線99-3調査区・第20次調査で削り抜き桶が出土している。

古殿遺跡・竜華東西線99-3調査区出土例は、ともに井戸側に転用されていた。前者は底板を下から押し込んで木釘で固定するもので、本例の樹皮が詰まった小孔を木釘の痕跡と見れば、同タイプのものと考えられる。後者は「据部内面に赤色顔料を塗った帯状の別材を木釘で留め付けて」おり、本例とは異なるタイプである。底板を下から押し込むタイプは弥生時代後期～4世紀(古墳時代前期)頃の出土例があり、本例も古墳時代前期(布留式期)のものと考えられる。



第12図 木製容器(67)実測図(S=1/5)

### 3.まとめ

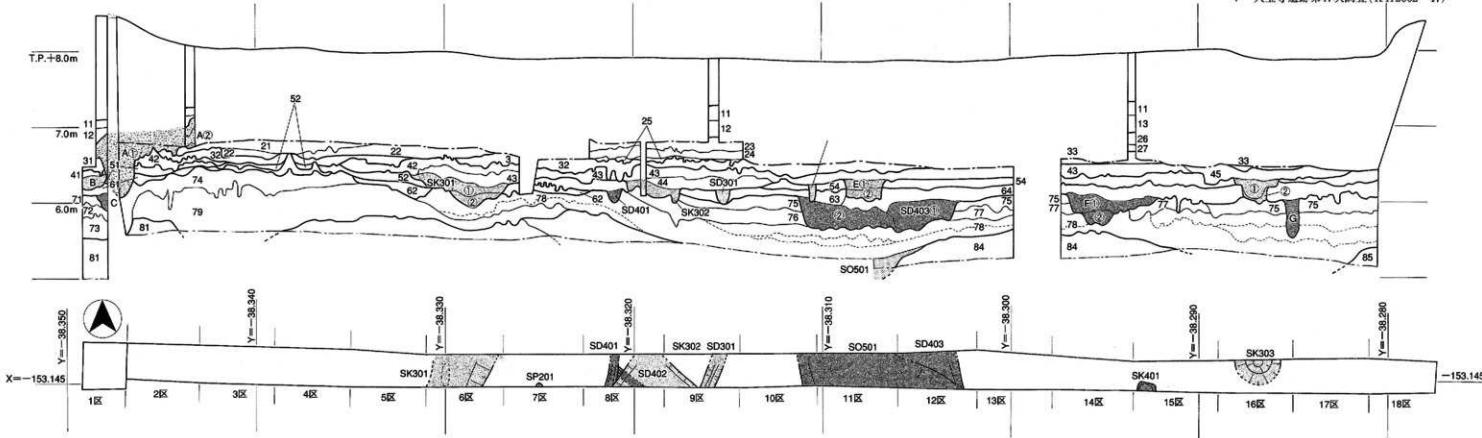
通常の発掘調査とは異なり、工事に併行して「掘る→記録する→埋める」を1日単位で繰り返したため、現地での検討の時間はなかったが、第1～5面の遺構面を確認することができた。各遺構面は、第1面－近世以降操車場が構築されるまで、第2面－古墳時代中期～平安時代頃、第3面－古墳時代前期前半(布留式古相)、第4面－古墳時代初頭後半(庄内式新相)～前期前半(布留式古相)、第5面－弥生時代終末～古墳時代初頭前半(庄内式古相)となる。

一日あたりの調査面積が狭小なため、遺構を明確に検出できたわけではないが、周辺の調査結果と同様、弥生時代終末期～古墳時代前期前半(布留式古相)に主要な遺構・遺物が存在していたようである。この時期の遺構には、土器集積を伴う土坑S K 301や井戸の存在を想定させる木製容器67の出土、住居の可能性のある土坑S K 302、落ち込みS O 401・402、焼土坑S K 303などがあり、生活に密着した場であったことがわかる。また、溝S D 403からは、人和型庄内甕40や吉備系甕41、土製支脚42のほか、他地方の系譜を引くと考えられる上器なども出土しており、他地方との交流が盛んであったことが裏付けられた。

#### 註

- ・註5 編み物の用語は小林行雄1961『統古代の技術』によった。
- ・註6 石野博信・関川尚功 1976『轆轤向遺跡の調査』奈良県立橿原考古学研究所編
- ・註7 土製支脚の各部の名称は、山内英樹 2001『四国の支脚形土器』『庄内式土器研究X V』によった。
- ・註8 梅木謙・ 1991『松山平野の考古土器－編年試案』『松山大学構内遺跡－第2次調査』松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター また、梅木氏には土製支脚を実見していただき、「西部瀬戸内の複合口縁甕とともに広がる角のある支脚」であるとのご教示を得た。
- ・註9 寺沢 嘉 1986『畿内古式土器の編年と一・三の問題』『矢部遺跡－国道24号線橿原バイパス建設に伴う遺跡調査報告書(II)－』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第49冊 奈良県立橿原考古学研究所
- ・註10 高橋慶 1991「土師器の編年 中國・四国」「古墳時代の研究 第6巻」雄山閣
- ・註11 平良泰久 1978『古殿遺跡発掘調査概要』『埋蔵文化財発掘調査概報1978』京都府教育委員会
- ・註12 西村 歩 2000『久宝寺遺跡(竪草東西線)発掘調査終了報告書』(財)大阪文化財センター
- ・註13 坪田真一 2000『Ⅲ 久宝寺遺跡(第20次調査)』『(財)八尾市文化財調査研究会報告66』(財)八尾市文化財調査研究会 N R 501出土例は「底板を上から落としこむタイプ」で、古墳時代中期頃のものである。
- ・註14 奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所史料第36冊

V 久宝寺遺跡第47次調査(KJII2002-47)



I 11 SBG2/1青灰色細粒砂質シルト

SBG5/1青灰色細粒砂質シルト

SBG5/2青灰色細粒砂質シルト

SBG5/3青灰色細粒砂質シルト

SBG5/4青灰色細粒砂質シルト

SBG5/5青灰色細粒砂質シルト

SBG5/6青灰色細粒砂質シルト

SBG5/7青灰色細粒砂質シルト

SBG5/8青灰色細粒砂質シルト

SBG5/9青灰色細粒砂質シルト

SBG5/10青灰色細粒砂質シルト

SBG5/11青灰色細粒砂質シルト

SBG5/12青灰色細粒砂質シルト

SBG5/13青灰色細粒砂質シルト

SBG5/14青灰色細粒砂質シルト

SBG5/15青灰色細粒砂質シルト

SBG5/16青灰色細粒砂質シルト

SBG5/17青灰色細粒砂質シルト

SBG5/18青灰色細粒砂質シルト

SBG5/19青灰色細粒砂質シルト

SBG5/20青灰色細粒砂質シルト

SBG5/21青灰色細粒砂質シルト

SBG5/22青灰色細粒砂質シルト

SBG5/23青灰色細粒砂質シルト

SBG5/24青灰色細粒砂質シルト

SBG5/25青灰色細粒砂質シルト

SBG5/26青灰色細粒砂質シルト

SBG5/27青灰色細粒砂質シルト

SBG5/28青灰色細粒砂質シルト

SBG5/29青灰色細粒砂質シルト

SBG5/30青灰色細粒砂質シルト

SBG5/31青灰色細粒砂質シルト

SBG5/32青灰色細粒砂質シルト

SBG5/33青灰色細粒砂質シルト

SBG5/34青灰色細粒砂質シルト

SBG5/35青灰色細粒砂質シルト

SBG5/36青灰色細粒砂質シルト

SBG5/37青灰色細粒砂質シルト

SBG5/38青灰色細粒砂質シルト

SBG5/39青灰色細粒砂質シルト

SBG5/40青灰色細粒砂質シルト

SBG5/41青灰色細粒砂質シルト

SBG5/42青灰色細粒砂質シルト

SBG5/43青灰色細粒砂質シルト

SBG5/44青灰色細粒砂質シルト

SBG5/45青灰色細粒砂質シルト

SBG5/46青灰色細粒砂質シルト

SBG5/47青灰色細粒砂質シルト

SBG5/48青灰色細粒砂質シルト

SBG5/49青灰色細粒砂質シルト

SBG5/50青灰色細粒砂質シルト

SBG5/51青灰色細粒砂質シルト

SBG5/52青灰色細粒砂質シルト

SBG5/53青灰色細粒砂質シルト

SBG5/54青灰色細粒砂質シルト

SBG5/55青灰色細粒砂質シルト

SBG5/56青灰色細粒砂質シルト

SBG5/57青灰色細粒砂質シルト

SBG5/58青灰色細粒砂質シルト

SBG5/59青灰色細粒砂質シルト

SBG5/60青灰色細粒砂質シルト

SBG5/61青灰色細粒砂質シルト

SBG5/62青灰色細粒砂質シルト

SBG5/63青灰色細粒砂質シルト

SBG5/64青灰色細粒砂質シルト

SBG5/65青灰色細粒砂質シルト

SBG5/66青灰色細粒砂質シルト

SBG5/67青灰色細粒砂質シルト

SBG5/68青灰色細粒砂質シルト

SBG5/69青灰色細粒砂質シルト

SBG5/70青灰色細粒砂質シルト

SBG5/71青灰色細粒砂質シルト

SBG5/72青灰色細粒砂質シルト

SBG5/73青灰色細粒砂質シルト

SBG5/74青灰色細粒砂質シルト

SBG5/75青灰色細粒砂質シルト

SBG5/76青灰色細粒砂質シルト

SBG5/77青灰色細粒砂質シルト

SBG5/78青灰色細粒砂質シルト

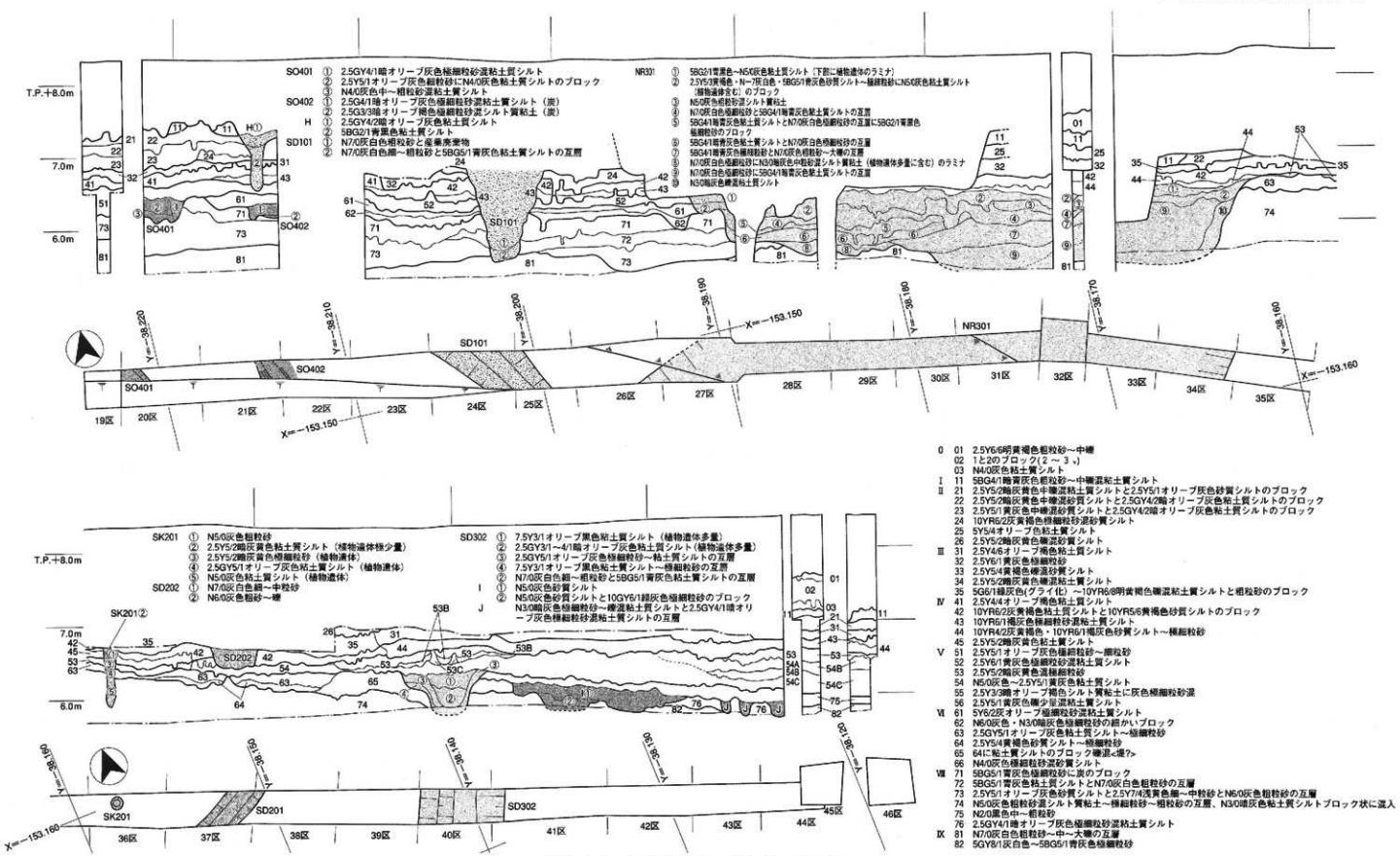
SBG5/79青灰色細粒砂質シルト

SBG5/80青灰色細粒砂質シルト

SBG5/81青灰色細粒砂質シルト

SK201 N40灰青色シルト粘土  
SK301 ① 2.5YS1/1青灰色粘土質シルト  
SK302 ② 2.5YS1/2青灰色粘土質シルト  
SK303 ③ 2.5YS1/3青灰色粘土質シルト  
SK304 ④ 2.5YS1/4青灰色粘土質シルト  
SD301 ⑤ SY4/1青灰色細粒砂質シルト  
SK401 ⑥ NG0/2色擦  
SD401 ⑦ 5BG3/1暗青灰色細粒砂質シルト  
SD402 ⑧ 5BG3/2暗青灰色細粒砂質シルト  
SD403 ⑨ N7/0白色粘土質シルト  
SD501 ⑩ N4/0白色粘土質シルトとN7/0灰白色細粒砂質の互層  
SK402 ⑪ 2.5YR2/2青灰色粘土質シルト～粗粒砂の互層  
A ⑫ 2.5YR2/3青灰色粘土質シルト～粗粒砂の互層  
B ⑬ 2.5YR2/4青灰色粘土質シルト～粗粒砂の互層  
C ⑭ 5BG4/1暗青灰色細粒砂質シルト  
D ⑮ 10YR4/2暗青灰色細粒砂質シルト  
E ⑯ 2.5YR2/2青灰色粘土質シルト(土壁の壁小片)  
F ⑰ 2.5GY3/1灰オーラー灰白色粘土質シルト(灰・灰土)  
G ⑱ 5Y5/1灰色細粒砂質泥炭粘土質シルト  
H ⑲ 4N4/0灰黑色細粒砂質泥炭粘土質シルト  
I ⑳ N3/0灰黑色細粒砂質泥炭粘土質シルト  
J ⑳ SBG6/1青灰色粘土質シルトの互層

第13図 1~18区平衡面図 (S=水平1/200・垂直1/40)



第14図 19~46区平面図 (S=水平1/200・垂直1/40)

## 出土遺物観察表

器種	出土地	法量(cm)	色調	胎土	備考
須恵器杯 完形	S P201	口 径 12.8 器 高 5.0	N5/0灰白色(表面) 5YR5/1褐色	密 石英(板根/板少)	底部表面にヘラ括き記号文、受部以下灰かぶり、自然融。
須恵器杯 完形	S P'201	口 径 14.1 器 高 5.3	5YR5/0灰白色	密 花崗岩(板根/板少)	底部内面に円心内タキ
小冠蓋 口縁~底部1/2	S K301	口 径 11.1 器 高 7.7 最大径 8.4	11.1 SYR5/6明赤褐色~ 10YR8/3浅黄色	密 赤色酸化土粒(細/多)	外側に保存者。
直口器 口縁~底部1/2	S K301	口 径 11.9 器 高 17.4 最大径 12.9	SYR5/6明赤褐色~ 10YR4/1褐色	密 赤色酸化土粒(細/多)	外側には赤色刷毛塗布か。
高杯 ほぼ完形	S K301	口 径 14.4 器 高 8.9 最大径 11.4	10YR8/3浅黄色	密~やや粗 石英(中/多)	底部に4孔
高杯 ほぼ完形	S K301	口 径 15.5 器 高 10.2 最大径 11.5	10YR8/3浅黄色	密~やや粗 石英(中/多)	底部に4孔
束段鉢 LII縁~底部1/2	S K301	口 径 16.9 器 高 5.8	SYR5/6明赤褐色	密 赤色酸化土粒(細/中)	外側底部に黒斑
小型鉢 完形	S K301	口 径 10.7 器 高 7.3 最大径 3.4	10YR8/3浅黄色	やや粗 赤色酸化土粒(石英相/多)	手づくね、LII縁部は波状を呈する。
小原窯 完形	S K301	口 径 10.1 器 高 11.5 最大径 11.3	5YR5/6明赤褐色~ 2.5YR8/3浅黄色	やや粗 チャート・石英(平/少)	外側・内面底面に保存者。
布置窯 休~底部完存	S K301	器 高 11.8 最大径 17.5	7.5YR6/4にぼい褐色~ 10YR2/1黒色	粗 花崗岩・チャート(粗/多)	外側・内面底部に保存者
高杯 口縁~縁上部 2/3	S K301	口 径 12.1 残存高 8.1	SYR5/6明赤褐色	密~やや粗 チャート(板根/少)	1孔残存
二重口盤 口縁部1/8以下	S K302	口 径 19.5 残存高 3.7	10YR6/2灰黃褐色	やや粗 チャート・角閃石(細/少)、長芯石英(中/少)	外側に鷹巣きの波状文+直線文+波状文、内面に波状文3帯。
脚柱状底部完存	S K302	基部径 3.0 残存高 8.0	10YR7/6明黄褐色	密 赤色酸化土粒(細/少)	底部裏面にヘラケズリ。
高杯 脚柱状底部完存	S K302	基部径 3.1 残存高 6.5	10YR7/2にぼい黃褐色~ ~10YR7/6明黄褐色	やや粗~粗 チャート・石英(中/板少)	
V様式系器 LII縁~体部完存	S K302	口 径 16.2 器 高 13.0 最大径 17.7	10YR8/2灰白色~ 10YR8/6黄褐色~ 10YR2/1黑色	粗 チャート・石英(板根/多)	底部裏面にタキあり。
庄内式窯 口縁~底部1/4	S K302	口 径 14.0 残存高 4.5	10YR5/6黄褐色	やや粗~粗 角閃石(粗/多)	タキ出し口縁
庄内式窯 口縁~肩部1/4	S K302	口 径 15.4 残存高 5.1	10YR2/1黒褐色~ 10YR4/4褐色	やや粗~粗 赤色酸化土粒(細/多)、角閃石(中/多)	
LII式窯 口縁~底部1/4	S K302	口 径 15.4 復元高 18.0 最大径 17.3	10YR2/1黒褐色~ 10YR3/1黒褐色~ (断面)10YR5/6黄褐色	粗 花崗岩・角閃石(中/多)	
小型鉢 LII縁~体部1/2	S K303	口 径 11.9 残存高 5.0	7.5YR6/6褐色~ 10YR8/3浅黄色	密 赤色酸化土粒・石英(細/板少)	
高杯 LII縁部1/8以下	S D301	口 径 18.4 残存高 5.0	7.5YR6/6褐色~ 2.5YR8/3浅黄色	密~やや粗 チャート・石英(中/多)	
高杯 肩部1/8以下	S D301	残存高 16.0 裕 径 3.1	7.5YR6/6褐色~ 2.5YR8/3浅黄色	密 赤色酸化土粒(板根/少)	
裏 口縁部1/6	S D401	口 径 13.2 残存高 3.7	7.5YR3/1黒褐色~ 7.5YR6/6褐色	密~赤色酸化土粒(板根/少)	
カゴ目土器 底部1/4	S D401	残存高 3.7 底一辺 5.1	10YR8/3浅黄色	粗 石英・長芯・チャート(粗/多)、赤色酸化土粒(板根/少)	

器種	出土地	法量(cm)	色調	胎土	備考
24 小型器台 受部1/2船部完存	S D 403 -①層	II 径 器高 幅径	8.7 7.6 9.7	10YR7/3に近い黄褐色 角閃石・長石・石英・雲母(中/多)	
25 小形器台 受・颈部上1/2/3	S D 403 -①層	II 径 残存高	8.8 5.1	5YR7/3に近い褐色 (断面)N4/0灰色	密~やや粗 赤色陶化土粒 (中/多)
26 高杯 杯部1/4	S D 403 -①層	口 径 残存高	13.8 5.5	10YR8/1灰白色	密~やや粗 花崗岩赤色酸化 十枚・角閃石(極少)・石英・ 雲母・チャート(中/少)
27 高杯 脚部1/6	S D 403 -①層	残存高 幅径	3.6 13.8	2.5Y7/1灰白色	やや粗 チャート・石英(粗/多)
28 屏 山形~体部1/3~ 底部完存	S D 403 -①層	口 径 器高 底 径	15.9 7.5 5.1	10YR2/1黒色~ 10YR6/1褐色	やや粗 花崗岩・チャート・石英 ・長石・雲母・角閃石(細~中/多)
29 筋 II様~体部1/4~ 底部完存	S D 403 -①層	残存高 底 径	8.1 3.1	2.5Y7/2灰褐色	雨 石英・チャート・赤色酸化 上粒(細/少)
30 髄 底部完存	S D 403 -①層	残存高 底 径	3.6 4.7	10YR8/1灰白色	やや粗~粗 チャート・石英 (中/多)・花崗岩(極少/保少)
31 V様式系屏・蓋 体部1/4底部完存	S D 403 -①層	残存高 底 径	6.2 3.9	10YR6/2灰褐色	密~やや粗 長石・石英(細/多) ・チャート(粗/少)
32 蓋 体部1/4底部完存	S D 403 -①層	我存高 底 径	4.8 4.1	2.5Y8/3淡褐色~ 7.5Y8/3淡褐色	やや粗 石英・長石・赤色酸化 十枚(粗/多)
33 V様式系兜形 ~体部1/4	S D 403 -①層	口 径 残存高 最大径	14.9 6.4 12.7	2.5Y8/2灰褐色~ 2.5Y8/3淡褐色	密~やや粗 赤色酸化十枚・長石 (中/少)・チャート?(粗/細) (少)
34 V様式系兜 体部1/3	S D 403 -①層	残存高 最大径	16.2 17.0	10YR6/2灰褐色	術~やや粗 花崗岩(極粗/粗) 底部表面に木薙痕、3分割成形 (少)
35 V様式系兜 体部1/2底部完存	S D 403 -①層	残存高 底 径	4.6 3.9	10YR2/1黒色~ 10YR8/2灰白色	やや粗~粗 長石・石英(細/多)
36 庄内式器 I様1/2	S D 403 -①層	II 径 残存高	14.8 2.7	2.5Y3/1黒褐色~ 2.5Y3/4黄褐色	密~やや粗 角閃石・雲母(細/多)・ 長石(中/極少)
37 庄内式器 体~底部1/3	S D 403 -①層	残存高 底 径	5.5 3.4	2.5Y3/2黒褐色 (断面)2.5Y5/3灰褐色	やや粗 雲母・4英長石・角 石(細~中/多)
38 庄内式器 口縁~体部1/4	S D 403 -①層	口 径 残存高 最大径	16.4 9.8 20.0	2.5Y5/3灰褐色~ 2.5Y5/2黒褐色 最大径	密~やや粗 角閃石・雲母(細/多)・ 長石(細/多)
39 庄内式器 体~底部1/4	S D 403 -①層	残存高 最大径	11.3 20.4	2.5Y3/1黒褐色~ 2.5Y3/2黒褐色	術~やや粗 雲母・赤色酸化十 枚・長石・角閃石(細/少)
40 大和原庄内式器 口縁~体部1/4	S D 403 -①層	口 径 残存高 最大径	18.6 18.6 22.4	10YR3/1黒褐色~ 10YR8/1灰白色	密~やや粗 石英・角閃石(細/多)
41 古備系器 II様部1/4	S D 403 -①層	II 径 残存高 最大径	13.9 3.9	10YR3/2黒褐色~ 10YR6/2灰褐色	密~やや粗 赤色酸化土粒・長 石(粗/少)
43 一重口縁蓋 蓋~体部1/2	S O 501 -①層	製部径 器 高	4.8 4.8	2.5Y3/1黒褐色~ 2.5Y7/2灰褐色	やや粗 角閃石・雲母(細/少)・ 花崗岩・石英・長石(中/少)
44 広口壺 口縁部1/2	S O 501 -①層	口徑残 存 高	17.6 6.4	2.5Y7/2灰褐色~ 7.5Y7/6褐色	やや粗 長石・石英・雲母・赤色 酸化土粒・チャート(中/多)・花 崗岩(極粗/少)
45 蓋 底部完存	S O 501 -①層	残存高 底 径	2.1 4.9	5Y8/1灰褐色~N3/0暗灰 色	密~やや粗 チャート・石英 (中/少)
46 体部1/3	S O 501 -①層	残存高 底 径	14.6 32.1	10YR4/1黒褐色~ 10YR7/2に近い黄褐色	やや粗 花崗岩(中/少)
47 高杯 杯部完存	S O 501 -①層	口径残 存 高	21.5 6.7	2.5Y8/3淡褐色(断面) N6/0灰褐色	術~やや粗 チャート・石英・ 雲母(中/多)
48 高杯 杯部完存	S O 501 -①層	残存高 幅径	6.0 14.8	2.5Y8/3淡褐色	やや粗 花崗岩・チャート・石 英(中/多)
					推進部回線に保有者

器種	出土地	法寸(㎝)	色調	胎土	備考
49 口縁～体部完全	S O 501	口 径 16.0 残存高 11.2 最大径 18.7	2.5Y3/1黒褐色～ 2.5Y8/3淡黄色	やや粗 磨毛・角凹み(細/多)。(深付口か) 長石・石英(中/多)	
50 LI縁～体部 1/8	S O 501	口 径 13.5 残存高 8.8 最大径 12.5	2.5Y8/3淡黄色	やや粗 チャート・角内石(細/多)、長石・石英(中/多)	
51 LI縁～体部 1/4	S O 501	口 径 12.8 残存高 5.0 最大径 11.4	2.5Y8/3淡黄色	やや粗 長石・石英・チャート・ 角閃石(中/多)	
52 LI縫部1/4 体部1/2	S O 501	口 径 14.2 残存高 8.1 最大径 14.1	2.5Y8/1灰白色	やや粗 長石・石英・裏厚・チャ ート(粗/多)	
53 体～底部完全	S O 501	残存高 最大径 底 径 4.9	10.4 5Y8/3淡黄色～N3/0暗 灰褐色	やや粗 角閃石・素母(細/多)、 石英(中/多)、花崗岩(粗/少)	底部表面ヘラケズリ
54 底部有孔土器 底部1/4	S O 501	残存高 底 径 4.5	2.5Y3/1灰褐色～ 2.5Y5/2灰淡黄色	やや粗 チャート・石英(中/多)	孔径は1.3cm
55 釜 体部1/2	N R 301 -③層		10TR6/4にぶい黃褐色 -5Y7/4灰白色	密 長石・チャート・赤色酸化 土粒(細/粗/極少)	
56 直口壺 口縁部完全	N R 301 -③層	口 径 9.5 残存高 6.6	2.5Y8/2灰白色 (断面)10YR6/6明黄褐色	密 石英・長石(粗/少)	
57 底部完全	N R 301 -③層	残存高 底 径 3.8	7.5YRS/4淡黄褐色	やや薄 石英・長石・赤色酸化 土粒(中/極多)	底部表面ヘラケズリ、唇表面調離 上位(中/極多)
58 高杯 杯部1/2 底部光滑	N R 301 -③層	口 径 11.9 器 高 9.2 底 径 10.2	10YR8/2灰白色～ 5YR8/4淡褐色	粗 石英・長石(粗/多)	粗いヘラミガキ
59 高杯 口縁～脚縫部 1/4	N R 301 -③層	口 径 18.5 器 高 11.9 底 径 14.8	7.5YR6/6橙色 (断面)N3/0暗灰褐色	密 赤色酸化土粒(細/多)、長石 石英(中/少)	柱状部の接合は挿入法
60 LI縫部 1/8	N R 301 -③層	口 径 19.5 残存高 4.8	10YR7/3にぶい灰橙色 ～10YR6/6明黄褐色	密 石英・チャート・角閃石・雲 母(細/多)	
61 口縁～脚縫部 3/4	N R 301 -③層	口 径 11.9 器 高 9.2 底 径 10.2	10YR8/2灰白色 (断面)5YR8/4淡褐色	粗 石英・チャート(中/粗多)、 赤色酸化土粒・角閃石(細/多)	柱状部の接合は竹管律入法
62 高杯 杯部1/2 底部完全	N R 301 -③層	口 径 22.8 残存高 7.3	7.5YR7/6橙色	密 赤色酸化土粒(細/少)	柱状部の接合は挿入法
63 N内式壺 口縁～体部 2/3	N R 301 -③層	口 径 16.0 残存高 8.5	10YR4/3にぶい黄褐色	やや粗 石英・長石・角閃石・雲母・ 赤色酸化土粒(細/多)、花崗岩(中 /極少)	
64 LI縁～体部 1/4	N R 301 -③層	口 径 14.9 残存高 10.8 最大径 16.9	N7/0灰白色	やや粗 嘉母・赤色酸化土粒(細/多)、 角内石・長石(中/多)	
65 LI縫部 1/4	N R 301 -③層	口 径 15.4 残存高 3.3	10YR4/3にぶい黄褐色 ～10YR6/1褐色	やや粗 赤色酸化土粒(細/多)、 石英・長石・角閃石(中/粗多)、 花崗岩(粗/極少)	
66 庄内式壺 口縁～体部 1/3	N R 301 -③層	口 径 14.9 残存高 4.7	2.5Y8/1灰白色	やや粗 赤色酸化土粒(細/多)、 角閃石・雲母(中/多)	



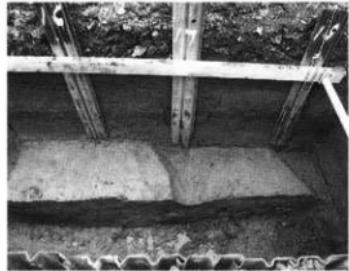
SK 301東部遺物出土状況（北から）



SK 302・SD 301（南東から）



SD 401・402（北から）



SD 402（南から）



SK 301西部遺物出土状況（北から）



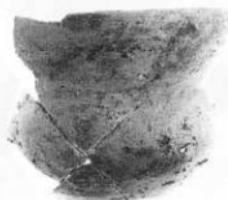
SK 303（南から）



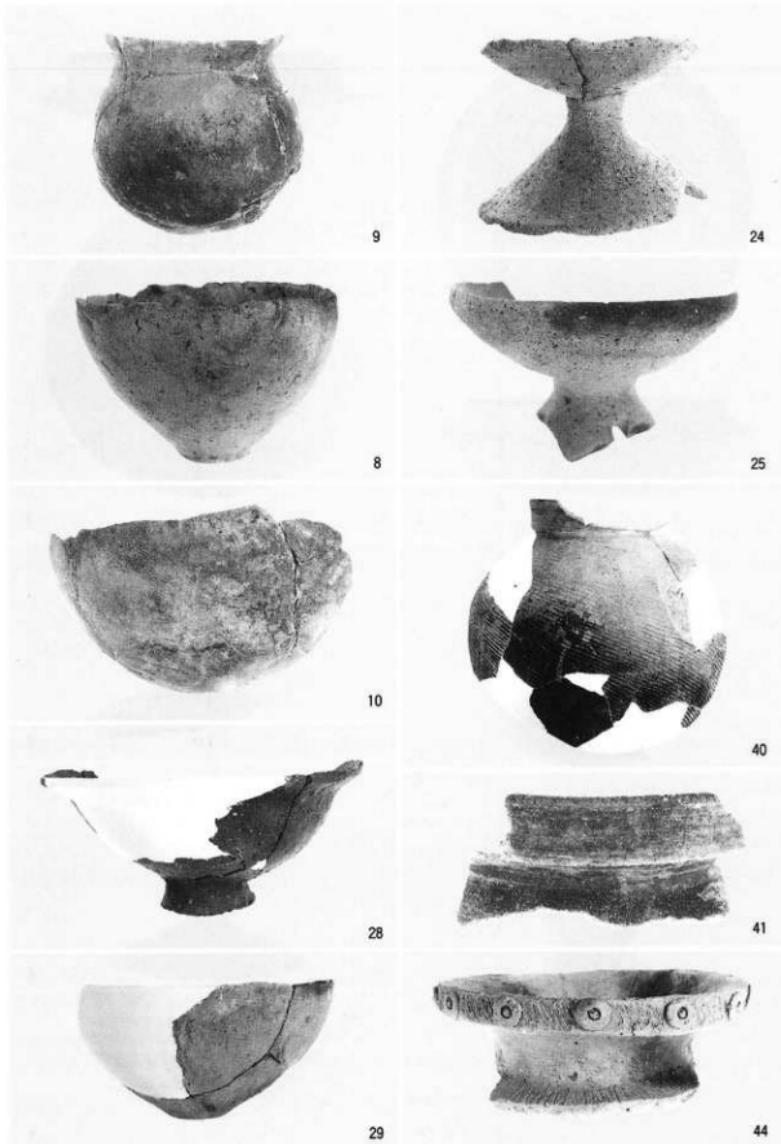
SD 403（南東から）



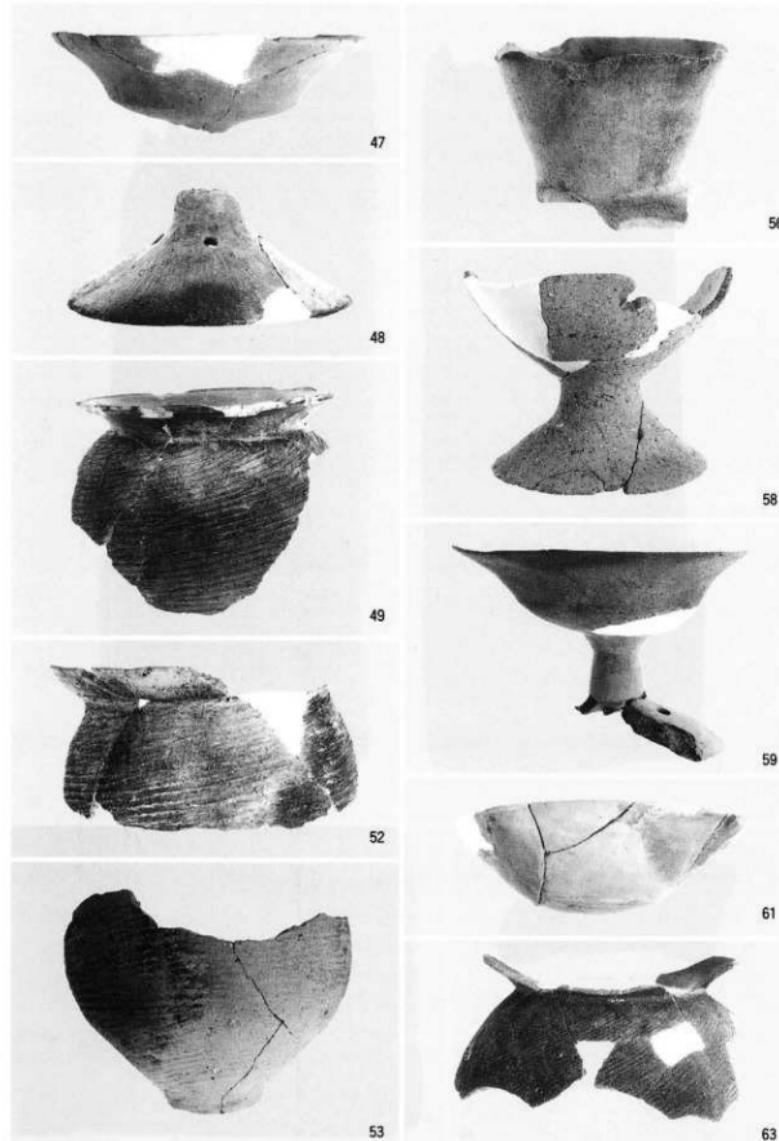
SD 501遺物出土状況（北西から）



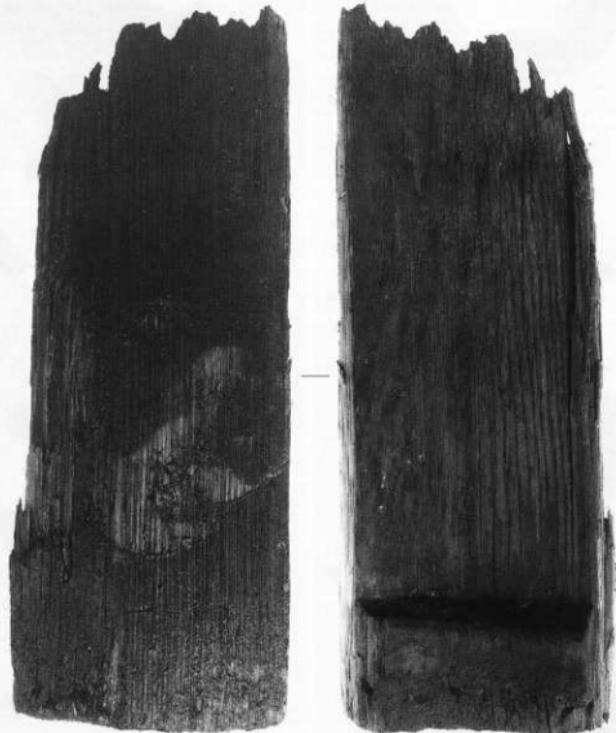
S P 201 (1・2)、S K 301 (3~7)



S K 301 (8~10)、S D 403 (24・25・28・29・40・41)、S O 501 (44)



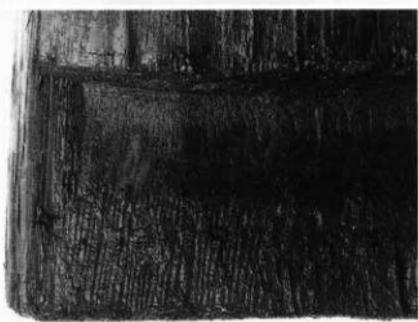
S O 501 (47~49・52・53)、N R 301 (56・58・59・61・63)



67



42



土製支脚 (42) · 木製容器 (67)

VI 小阪合遺跡第38次調査（K S 2002-38）

# 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市若草町地内で実施した公共下水道工事(平成14年度小阪合排水区第6工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する小阪合遺跡第38次(KS2002-38)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第396号 平成15年2月15日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成14年6月26日～9月30日(実働5日間)にかけて、樋口 薫を調査担当者として実施した。調査面積は約33.28m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査にあたっては、下記の方々の参加を得た(敬称略、五十音順)。  
飯塚直世・鈴木裕治
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成15年10月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、以下の通りである。  
【遺物実測】 市森千恵子・鈴木・徳谷尚子・中野靖之・實樹婦実子  
【トレース】 市森  
【執筆・編集】 樋口

## 本 文 目 次

1.はじめに.....	59
2.調査概要.....	60
1) 調査方法と経過.....	60
2) 基本層序.....	60
3) 検出遺構と出土遺物.....	61
3.まとめ.....	65

## VI 小阪合遺跡第38次調査(K S 2002-38)

### 1. はじめに

大阪府の東部、現在の大和川と石川の合流する付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に区画されている。この河内平野は、旧大和川の分流がもたらす沖積作用によって形成してきた。今回報告する小阪合遺跡は、この大平野の東部を画する八尾市のはば中央に位置する。現在の行政区画では、若草町、小阪合町1・2丁目、南小阪合町2・4丁目、青山町1~5丁目、山本町南7・8丁目の東西約0.5~1.0km、南北約1.0kmがその範囲と推定されている。地形的には、旧大和川の分流である玉串川や楠根川、長瀬川などの河川がもたらした沖積地上に位置する。

当遺跡は、昭和30年、若草町内で行われた大阪府住宅供給公社による住宅建設工事の際、古墳時代の遺物が出土し、その存在がはじめて確認された。その後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター・当調査研究会による多次にわたる調査が実施され、弥生時代中期～近世に至る複合遺跡であることが知られてきた。近年では、(財)大阪府



第1図 調査地周辺図 (S=1/2500)

文化財調査研究センター(現(財)大阪府文化財センター)による府営住宅建替工事に伴う大規模な調査が実施された。ここでは、弥生時代～鎌倉時代の遺構が多数検出された(駒井・本間1998)(本間2003)。以下概説すると、弥生時代では、後期後半の水田が見つかっており、生産域として利用されてきたようである。古墳時代初頭では、竪穴住居が2棟検出されており、当地が居住域であった可能性が高い。また調査地の東方には、楠根川の埋没河川と考えられる流路を確認している。中期になると、掘立柱建物をはじめ多量の遺物も出土していることから、居住域として機能していたことは確実である。一方、後期～飛鳥時代になると、遺構・遺物が希薄になるようである。奈良時代～平安時代にかけては、居住域を形成する遺構群が検出されているほか、河川内からは、牛や馬の骨とともに和同開珎などの和銅鏡が61枚など出土している。この河川内遺物の出土状況は、祭祀を行った可能性が指摘でき、当地の北部に位置する東郷廃寺(消1995)とともに、祭祀を執り行う居住域、つまり寺院や官衙的な施設の存在を垣間見ることができそうである。平安時代後期～鎌倉時代にかけては、鋤溝が多数検出されているところをみると、生産域に変わりつつあったのかもしれない。なお、この調査地の西側隣接する第43次調査地でも、T.P.+7.4m前後において、古墳時代前期～鎌倉時代にかけての遺構面を検出している。この内、古墳時代前期の遺構としては、土器棺墓を2基検出しており、当地が墓域として機能していたことが推測されるほか、鎌倉時代後期に比定される柱穴も確認されており、この時期には居住域に変貌を遂げていた(高萩1994)可能性が考えられる。

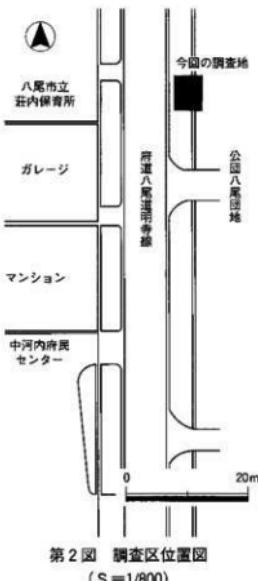
## 2. 調査概要

### 1) 調査方法と経過

今回の調査は、八尾市若草町地内で行われた公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した第38次調査(K.S.2002-38)にあたる。調査区は1箇所(6.4×5.2m面積約33.28m<sup>2</sup>)である。調査では、現地表(T.P.+8.439m)下6.0m前後までを機械と人力を併用して掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。なお、調査は平成15年6月26日～9月30日にかけて実施した。調査日数は実働5日間である。

### 2) 基本層序

現地表0.4～1.4m前後までは現代の搅乱に伴う客土・盛土(0層)である。以下現地表下0.4～6.0m前後までの5.6m間で、22層もの地層を確認した。1層にはぶい黄褐色を呈した細礫混粘土質シルト。ブロック土で形成された地層である。整地に伴うものと推測される。2層にはぶい褐色～黄灰色の粘土質シルトである。本層もブロック土で形成されている。水田耕作土の可能性が考えられる。なお本層は、東方(2A層)と西方(2B層)で若干粒度組成が異なる。3層は褐灰色の細粒砂～中粒砂混粘土質シルト。4・5層は、ともにブロックで形成された黄褐色粘土質シルトである。4層上面にお

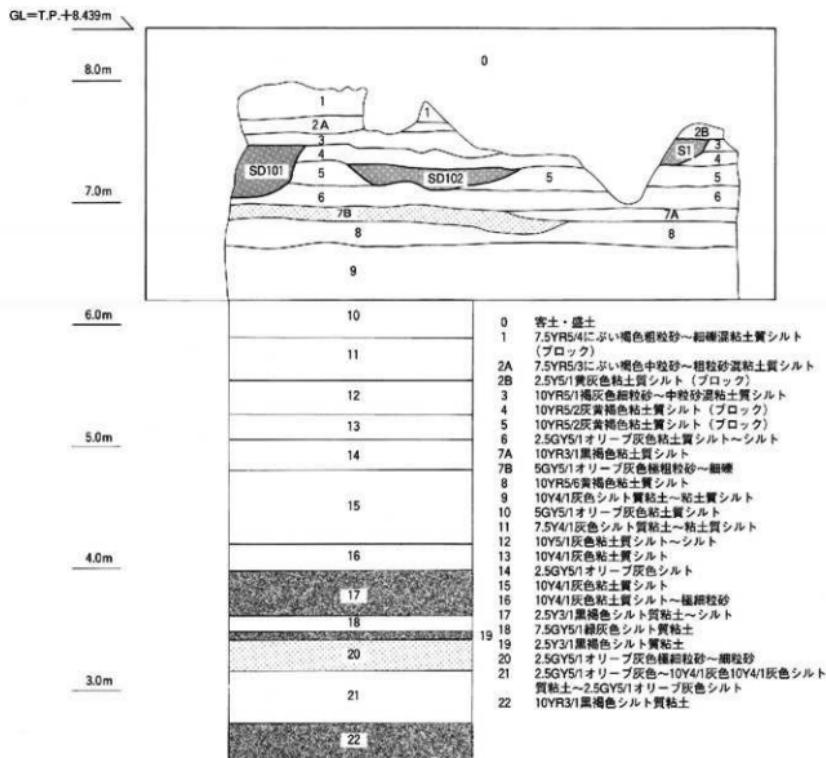


第2図 調査区位置図  
(S=1/800)

いてSD101、5層上面においてSD102がそれぞれ構築される。6層はオリーブ灰色を帯びた粘土質シルト～シルトである。湿地性の堆積物である。7層は、厚層0.2m前後の流水堆積物で構成される。東方ほど粒度組成が粗く(7B層)、西に向かうにつれて漸次細粒化(7A層)の傾向を強める。おそらく、本調査区東方に存在すると推測される流路からの溢流堆積物と考えられる。以下、8~22層については、粘性に富む粘土質シルトを主体とした地層が堆積する。概ね、閉塞的な湿地帶のような環境下において形成された水成層である。この内、17・19層は、視覚的に見極めが可能な黒色を帯びた地層である。いわゆる暗色帶と認定できる地層と考えられる。なお、各地層の詳細は、地層一覧表を参照されたい。

### 3) 検出遺構と出土遺物

T.P.+7.3m前後の5層上面において、土坑2基(S K101・102)、溝2条(S D101・102)を検



第3図 地層断面図 (S=1/40)

表1 地層断面一覧表

地層名	色調	粒度組成	堆積構造	層厚(cm)	備考
0			ブロック		谷十・盛土である。
1	7.5YR5/4 に赤い褐色	粗粒砂～細粒混粘土質シルト(2～4cm大のブロックで形成)(雲状Mnを多く含む)(+基盤片混在)	ブロック	0.3	中層の壁兼屏?
2A	7.5YR5/3 に赤い褐色	中粒砂～粗粒混粘土質シルト(雲状Mnを極めて多く含む)	?	0.15	
2B	2.5Y5/1 黒灰色	粘土質シルト(2～4cm大のブロックで形成)	ブロック	上流域	水田耕作土の可能性あり。
3	10YR5/1 褐色	細粒砂～中粒砂混粘土質シルト(雲灰Mnを少許含む)	?	0.15	中の道側帶基部。酸化のためか、サックとすると感じ。
4	10YR5/2 灰褐色	粘土質シルト(2～3cm大のブロックで形成)(Mn斑を含む)(雲灰Mnを含む)(土器断片混在)	ブロック	上流域	古墳頂面の堆積構築層。 奈良～平安の農耕構築層。
5	10YR5/2 灰褐色	粘土質シルト(2～3cm大のブロックで形成)(Mn斑を含む)	ブロック	上流域	
6	2.5GY5/1 オリーブ灰色	粘土質シルト～シルト(雲灰Mnを含む)(グライ化層)	水成層	0.2	砂礫層上層に堆積した泥炭性の地層。西方のみ有り。
7A	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	?	0.1	
7B	5GY5/1 オリーブ灰色	粗粒砂～細粒	水成層	0.1～0.15	
8	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト(雲灰Feを極めて多く含む)	水成層	0.2	
9	10Y/1 灰色	シルト質粘土～粘土質シルト(災害物を含む)	水成層	0.45	
10	5GY3/1 オリーブ灰色	粘土質シルト(ブライマー)(グライ化層である)	水成層	0.3	グライ化が顕著。
11	7.5Y4/1 灰色	シルト質粘土～粘土質シルト(災害物を少量含む)	水成層	0.35	
12	10Y5/1 灰色	粘土質シルト～シルト(植物遺体をラミナ状に含む)(災害物をラミナ状に含む)	水成層 (ラミナ)	0.25	
13	10Y4/1 灰色	粘土質シルト(災害物を含む)	水成層	0.2	
14	2.5GY5/1 オリーブ灰色	シルト(ラミナ構造あり)	水成層 (ラミナ)	0.25	
15	10Y4/1 灰色	粘土質シルト(災害物をラミナ状に含む)	水成層 (ラミナ)	0.6	
16	10Y4/1 灰色	粘土質シルト～細粒砂(ラミナを形成)	水成層 (ラミナ)	0.2	
17	2.5Y3/1 黒褐色	シルト質粘土～シルト(災害Caの鉛柱が混在)	水成層	0.37	暗色帯を形成。
18	2.5GY5/1 黒褐色	シルト質粘土(グライ化)	水成層	0.12	
19	2.5Y3/1 黒褐色	シルト質粘土	水成層	0.06	暗色帯を形成。
20	2.5GY5/1 オリーブ灰色	板縦粒砂～細粒砂(グライ化)	水成層	0.25	
21	2.5GY5/1オリーブ 灰～10Y4/1灰 色	10Y4/1灰色シルト質粘土～2.5GY5/1オリーブ灰色シ ルトのラミナ	水成層 (ラミナ)	0.4	
22	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土(植物遺体を極めて多く含む)(植物遺体がラミナ状に入る)	水成層 (ラミナ)	0.15以上	
S 1	10YR6/3 に赤い黃褐色	細粒混粘土質シルト～シルト(2～5cm大のブロックで形成)	ブロック 単層		3層上面構造の構造内層上である。

出した。この内S 101については、4層上面が本来の遺構構築面である。なお、各遺構出土遺物については、一覧表を作成したのでそちらを参照されたい。

#### 土坑(S K)

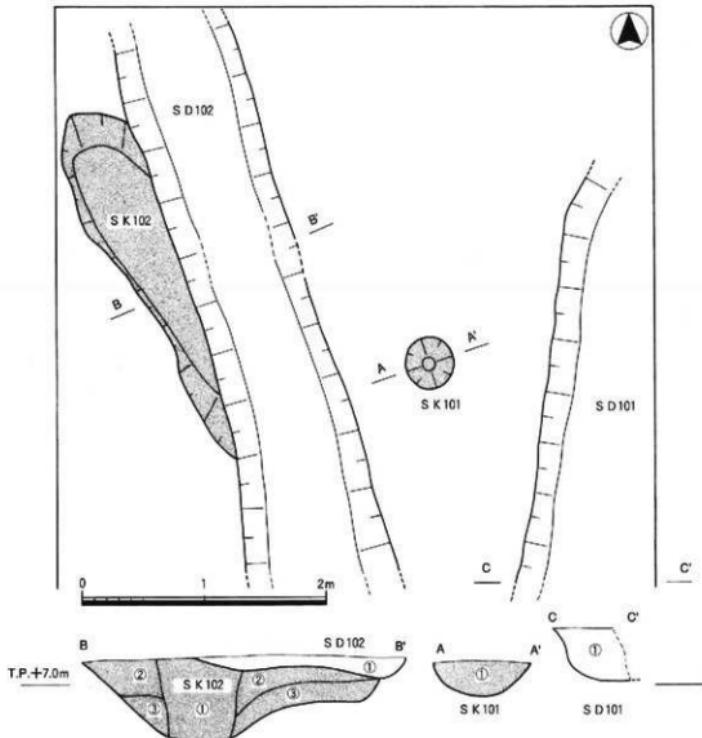
S K 101は、平面形状が円形(径約40cm)、断面形状が椀状を成し、深さは約14cmである。埠上は10YR3/1黒褐色を帯びた極粗粒砂～細粒混粘土質シルトの單層である。2.5Y5/1黄灰色シルトがブロック(3～4cm大)で混在している。埠上には土師器の細片が混在していた。

南東～北西方向に主軸をもつS K 102は、上面をS D 102に切られている。南東～北西が3.13m、

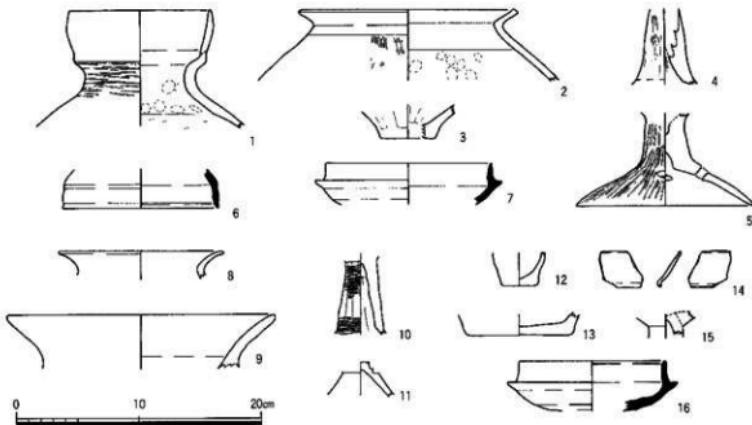
南西-北東が0.75mの規模を有する。断面形状はレンズ形～不定形を成し、深さは約34cmを測る。埋土は、上から①7.5GY5/1緑灰色粘土質シルト～極細粒砂、②2.5GY4/1黄灰色細礫混粘土質シルト、③10YR5/2灰黃褐色粘土質シルトが堆積する。いずれも3～4cm大のブロックで形成されている。埋土内からは、古墳時代前期に属する古式土師器(1～5)や須恵器(6・7)が出土した。

#### 溝(SD)

SD 101は南南西-北北東に伸びる溝である。東肩は調査区外に至るため全容は不明である。検出規模は、南南西-北北東3.5m以上、東南東-西北西1.15m以上を有する。埋土は、10YR4/1褐灰色粘土質シルト(3～5cm大のブロックで形成・炭化物を極少量含む)の単層である。埋土には、



第4図 検出構造平面図( $S=1/40$ )・断面図( $S=1/20$ )



遺物 番号	器種 形式	部位	法量 ( )一復元	成形・調整・装飾	色調	備考	出土 連続
1	古式土瓶形 壺	口縁部～ 肩部	口径 (11.5) 器高 9.7以上	(外) 製瓶は横方向の細かいミガキ。底は削成で不明瞭。 (内) 口縁部は横ナデ。腹部は右方向にケズリを行なう。	2.5YR/1灰白色	搬入品。	S K 102
2	古式土瓶形 壺	口縁部～ 肩部	口径 (17.2)	(外) 口縁部～張部は横ナデ。肩部は縱方向のハケナデを有す。 (内) 口縁部～張部は横ナデ。肩部は捺押えが著しく残る。	7.5YR/6褐色	搬入品。	S K 102
3	古式土瓶形 壺	体部下部 底溝	底溝 (4.3) 器高 2.8以上	(外) 体部は腹・底の板ナデ。底溝はナダ。 (内) 壓延には横ナデ。	7.5YR/8.3深褐色 9.7.5YR/4.1灰褐色 底面 10YR/2.1黒色	牛牛廻西龍。	S K 102
4	古式土瓶形 壺	柱状部 高杯	器高 6.2以上	(外) ハケナデ。 (内) 横方向の、しばり痕が見える。	2.5YR/1灰白色 内 7.5YR/7.4にぶい褐色	非牛廻西龍。	S K 102
5	古式土瓶形 壺	柱状部～ 腰部	腰径 (14.6)	(外) 橫方向の細かいミガキ。 (内) 壓延は横方向の板ナデ。腰附近は横方向の板ナデを行なう。	10YR/3にぶい褐色	牛牛廻西龍。 腰部には4個の円孔透けあり。	S K 102
6	似泡器 壺	口縁部～ 天井部	口径 (12.8)	(外) 沖削ナデ	NS/灰色		S K 102
7	須密壺 杯身	口縁部～ 杯部	口径 (13.6)	(外) 沖削ナデ。 (内) 沖削ナデ。	NS/灰白色		S K 102
8	古式土瓶形 壺	口縁部～ 肩部	口径 (13.4)	(外) 沖削ナデ。 (内) 沖削ナデ。	7.5YR/4浅褐色	非牛廻西龍。	S D 101
9	古式土瓶形 壺	口縁部	口径 (21.8)	(外) 横ナデ。 (内) 横ナデ。	10YR/3にぶい黃褐色	非牛廻西龍。	S D 101
10	古式土瓶形 壺	柱状部	腰高 6.7以上	(外) 縦方向に歯取り調の板ナデを行なった該装方向の細かいミガキを密に持す。 (内) 板ナデ、底溝時の捺押えが見られる。	7.5YR/8.3灰白色 7.5YR/3にぶい褐色	牛牛廻西龍。 精製品。	S D 101
11	古式土瓶形 小型盤台	胸部	器高 2.7以上	(外) ガキと思われるが削成で不明瞭。	7.5YR/3にぶい褐色	牛牛廻西龍。	S D 101
12	古式土瓶形 壺	体部下半 ～底部	底径 (2.5)	(内) 板ナデ、底溝時の捺押えも見える。	10YR/4灰黃褐色	牛牛廻西龍か?	S D 102
13	古式土瓶形 壺	底部	底径 (7.6)	(外) ナデ、底溝のため不明瞭。 (内) ナデ、底溝のため不明瞭。	10YR/5灰黃褐色	牛牛廻西龍か?	S D 102
14	古式土瓶形 壺	口縁部～ 肩部	口径 (3.0)	(外) 横ナデ。 (内) 横ナデ。	10YR/6灰白色	非牛廻西龍。	S D 102
15	古式土瓶形 壺	杯底部～ 柱状部上部	器高 2.2以上	(外) 壓延のため不明瞭。 (内) 底溝のため不明瞭。	7.5YR/6褐色 (内) 7.5YR/7.4にぶい褐色	非牛廻西龍。	S D 102
16	須密壺 杯身	口縁部～ 杯部	口径 (11.9)	(外) 口縁部～杯高 1/3は円柱ナデ。杯高 1/3は回転ヘタ。 (内) 沖削ナデ。	NS/灰色		S D 102

第5図 出土遺物実測図 (S-1/4) · 表2 出土遺物観察表

古式土師器の細片(8~11)が混在していた。

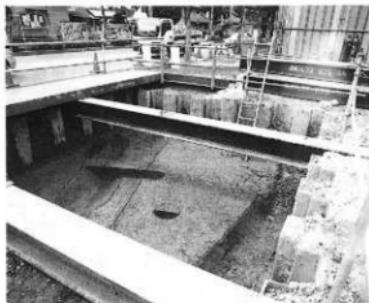
一方S D 102は南南東~北北西に直線的に伸びる溝で、南南東~北北西4.5m以上、西南西~東北東0.9mの規模をもつ。断面形状は皿状を成し、深さは約5cmと非常に浅い。埋土は単層で、2.5Y4/1黄灰色粗粒砂~極粗粒砂混粘土質シルト~シルト(2~4cm大のブロックで形成)で充填されていた。埋土には古式土師器(12~15)や須恵器(16)の細片が混在していた。

### 3.まとめ

今回の調査では、5層上面において4基の遺構を検出した。各遺構の性格については、調査面積が狭いなどの問題があって不明な点が多い。しかしながら、S D 101・102は、直線的に伸びることが予想され、何らかの規格性を認めることができそうである。区画に伴うものか?。一方遺構内から出土した遺物については、いずれも遺構に伴うものではなく、遺構内埋土に混入していたものであることが予測される。したがって遺物の時期は、遺構の機能していた時期をさすのではなく、少なくとも廃絶時期を示すに留まるものと思われる。ところで今回の調査は、下水道工事に並行して実施されたものであったため、調査精度が不良と言わざるを得ない状況であった。したがって、遺物の取り上げについては、若干精度が落ちる可能性が高い。このような点を踏まえた上で、概ねS K 102が古墳時代初頭~前期、S D 102が古墳時代中期~後期、S D 101が古墳時代中期~後期以降を廃絶時期に比定したい。また、S K 102からは東部瀬戸内地域から搬入されたと思われる古式土師器が出土している。直接遺構に伴う遺物ではないが、これらの地域と何らかの交流の一端を示す資料として注目したい。

#### 参考文献・引用文献

- ・駒井正明・本間元樹 2000『小阪合遺跡 (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第51集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・本間元樹 2003「小阪合遺跡の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会(第47回)資料』(財)大阪府文化財センター
- ・高萩千秋 1994「X IV 東郷遺跡第43次調査(T G 93-43)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・酒 素 1995「東郷廃寺発掘調査報告」『八尾市文化財紀要7』八尾市教育委員会
- ・樋口 薫 2001「X 東郷遺跡第55次調査(T G 99-55)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』(財)八尾市文化財調査研究会



遺構検出状況（南東から）



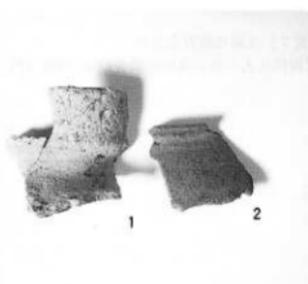
遺構検出状況（東から）



南壁地層（T.P.+7.3~8.0m付近）



南壁地層（T.P.+4.0~6.0m付近）



S K 102内出土遺物

VII 渋川廃寺第4次調査（S K T 2003-4）

## 例　　言

1. 本書は大阪府八尾市春日町1丁目地内で実施した公共下水道工事（14-116工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する渋川廃寺第4次調査（SKT2003-4）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書（八教生文第311号 平成14年12月10日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成15年4月3日～平成15年6月3日（実働22日）の期間で、金親満夫を担当者として実施した。なお1区の夜間調査は坪田真一と共に実施し、2区は成海佳子が担当した。調査面積は約122.5m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査に参加した補助員は伊藤静江・岩沢玲子・垣内洋平・加藤邦枝・川村一吉・竹田貴子・田島宣子・中村百合・永井律子・村田知子・吉川一栄・若林久美子である。
1. 内業整理は現地調査終了後隨時行い、平成15年12月に終了した。
1. 内業整理は上記の補助員のほか北原清子・村井俊子の協力のもと行った。
1. 本書で使用した土器編年と器種名については、古墳時代の土師器は「京鳴覚1992、辻美紀1999」、古墳時代の須恵器（TK73型式～TK217型式）は[田辺昭三1966、1981]、飛鳥・奈良時代の土器は[古代の土器研究会編1992、1993]、中世の土器は[尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、森島康雄1990]、軒瓦の型式は[毛利光俊彦・花谷浩1991]に従った。
1. 本書の執筆および編集は金親が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	67
2.調査概要.....	68
1) 調査方法と経過.....	68
2) 調査成果.....	70
3.まとめ.....	90

## VII 渋川廃寺第4次調査(SKT2003-4)

### 1. はじめに

渋川廃寺は八尾市西部に所在し、現在の行政区画では、渋川町5丁目、春日町1丁目を中心に、北の久宝寺遺跡、南の跡部遺跡にまたがって範囲設定がなされている。地理的には付け替え以前の大和川の主流である北の長瀬川、南の平野川に挟まれた自然堤防上に立地し、分流する二河川のはば付け根に位置する。旧国郡では河内国渋川郡に属し、長瀬川を挟んだ対岸には竜華寺跡が、南部の亀瀬越道(奈良街道)沿いには「下の太子」大聖勝軍寺が所在する。



写真1 調査地周辺(西から)

渋川寺という名称は、文安5年(1448)に訓海によって書かれた『太子伝玉林抄』に「瀧河寺 河州 推古天皇御願 在彼神妙掠東北六七町 鐘堂 在掠木北 彼合戦時 進太子御勝之所也」と記されるのが初見で、以後文献でその名称は見られず、『太子伝玉林抄』が唯一の史料であった。

しかし付近の田畠からは古瓦が発見されることが多く、大正年間刊行の『大阪府全誌』と『中河内郡廃寺』に塔心礎が近年まで残っていたと記され、寺院の存在は周知のことであった。当時は周辺の俗称から「寶積寺」という寺名が用いられている。昭和初期には創建期の高句麗系軒丸瓦と法隆寺系軒平瓦が発見されており、高句麗系軒丸瓦は藤澤一夫氏により「瀧河寺式」と型式設定がなされている(藤澤1941)。渋川廃寺の創建年代は7世紀第2四半期に比定されている。



第1図 調査地周辺図 (S=1/10000)

渋川廃寺周辺は東に淀川へと繋がる長瀬川が流れ、南に大和から難波へと続く亀瀬越道が通り、地理的に最重要地点であった。また、南部に広がる跡部の地は物部氏の本拠地と推定され、地の利の有用性は周辺地域より際立っていたと考えられる。

渋川廃寺は過去3度の調査が行われており、今回の調査地は第2・3次調査地の南に接する。平成元年度の第1次調査では鷹尾が、平成13年度の第2次調査では大量の瓦と塔基壇が検出されている。



写真2 現状の塔心礎



第2図 調査位置図 (S=1/2500)

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事(平成14年度第116工区)に伴う人孔部分5ヶ所および開削部分2ヶ所の調査で、当研究会が渋川廃寺で実施した第4次調査にある。調査面積は人孔部分が各約2.0m四方(1区のみ約2.0m×3.0m)、開削部分が約1.0m×56.0m(4区)と約1.0m×44.5m(6区)で計約122.5m<sup>2</sup>である。調査地区名は南西に位置する人孔部分を1区とし、北部の人孔部分と開削部分を西より2~7区とする。調査は下水道工事と並行しており、人孔部分は一日に1ヶ所を原則として、開削部分は一日に5~10mの距離で行った。また、1区は道路事情の関係上、夜間を行った。

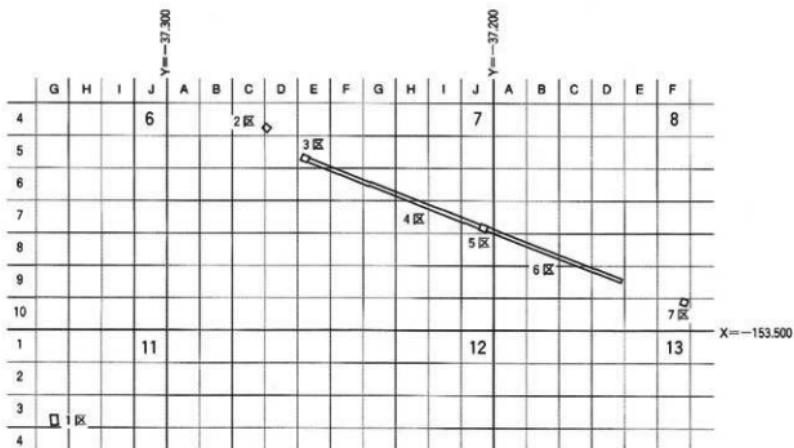
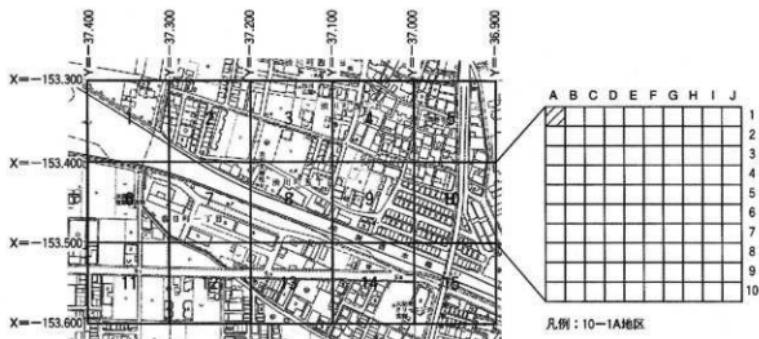
なお1区は銅鐸が出土した跡部遺跡第5次調査の西部に隣接し、本来ならば跡部遺跡内に包括される地点であるが、一連の工事に伴う調査であるため、今回は渋川廃寺として取り扱った。

地区割については、第2・3次調査に準じ、国土座標第VI系を基準に設定を行った。渋川廃寺の推定地を中心に、東西500m・南北300mについて、100m四方で15区に区画した。さらに、そ

の15区をそれぞれ10m四方に区画し、東西方向を西からA～J、南北方向を北から1～10で示し、10m四方での位置を標記する。

調査は現地表(T.P+9.3～9.7m)下1.1～1.4mまでを機械掘削とし、工事掘削範囲に応じて以下0.9～1.1mについて人力・機械掘削を併用して調査を実施した。

以下、調査区毎にその成果を報告する。ただし、3～6区は連続した調査区で、遺構が調査区をまたがるため、まとめて報告を行う。



第3図 地区割図(S=1/6000)および調査区設定図(S=1/1500)

## 2) 調査成果

### 〈1区〉

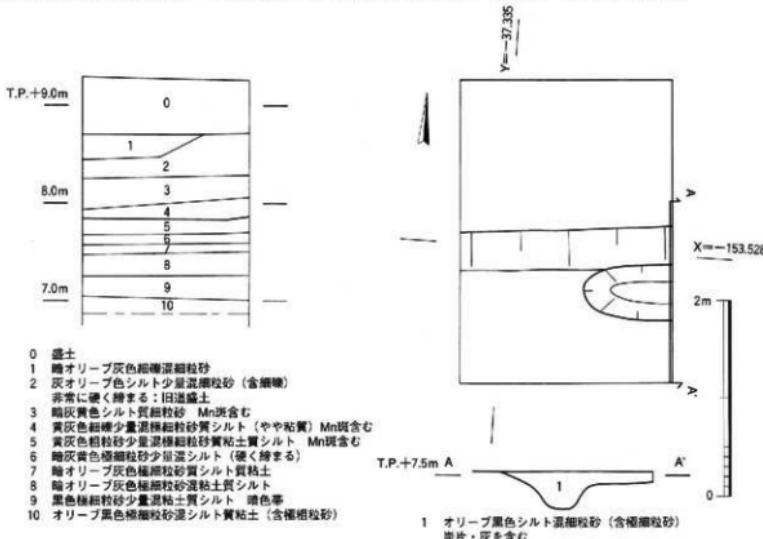
1区は11-3G地区に位置する。現地表(T.P.+9.3m)下約0.6mで非常に硬く締まる地層(2層)が見られる。これはアスファルト敷設以前の旧道であり、調査区西側は約1/3が落ち込み、道路は周囲より約0.25m高くなる。3・4層は盛土層である。5層上面(T.P.+7.8m)で東西方向に伸びる溝1条(S D101)を検出した。8層以下は極細粒砂を含む粘土質シルトのグライ化層(10層は暗色帶)が主体となっており、沼沢地を想定させる。東接する跡部遺跡第5次調査ではT.P.+6.9~7.0mで古墳時代前期前半の住居跡・土坑・溝などが検出されている。しかし、本調査区ではこの時期の遺構は検出されておらず、9層中からV様式系壺の小片が1点出土しているのみである。また銅鏃埋納坑はT.P.+6.7m付近での検出であり、工事掘削深度はこのレベルまでは及んでいないため、関連する遺構・遺物などは検出していない。

### S D101(第4図、図版一)

調査区南部の11-3G地区で検出した東西に伸びる溝である。南肩は調査区外に至り、幅は1.6m以上を測る。深さは0.15mであるが、北東部に深く落込む箇所があり、深さは0.38mを測る。埋土は極粗粒砂を含むシルト混細粒砂で、炭片や灰を非常に多く含む。さらに溝内の落込み部分とその周囲では、灰が集中して堆積していた。遺物は土師器・須恵器・瓦が出土した。



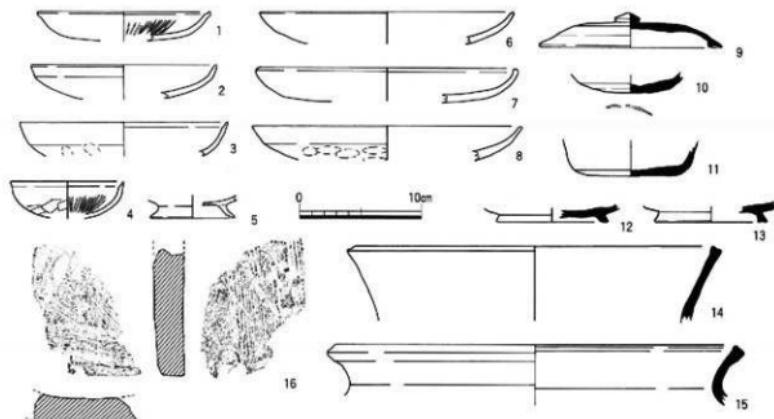
写真3 1区北壁断面



第4図 1区北壁断面模式図およびS D101平断面図 (S=1/50)

1～8は土師器、9～15は須恵器、16は瓦である(第5図)。1～4は杯Cである。1・4の内面には放射状の暗文が施される。1・4は飛鳥時代中葉、2・3は飛鳥時代後半のものと考えられる。5は杯Bの底部で、飛鳥時代中葉頃のものと思われる。6～8は皿Aで、飛鳥時代後半のものである。9は杯G蓋である。天井部に宝珠形つまみを有し、口縁部内面に短いかえりが付く。飛鳥IIIに属する。10～11は杯Gである。底部はともに未調整であるが、11は切り放し面の周間に1条のヘラ削りを施す。10は飛鳥時代前半～中葉、11は飛鳥時代中葉～後半のものと考えられる。12・13は高台を持つ杯の底部である。とともに飛鳥時代後半～奈良時代前半のものである。14は盤Aの口縁部である。内外面ともにナデで整形される。奈良時代中葉頃のものと思われる。15は壺で、飛鳥IIIに属する。16は平瓦である。凹面に布目痕、凸面に繩目タタキを施す。凹面端部に幅の狭い面取りを施す。凸面の繩目タタキは所々ナデ消されており、端部は強いナデを施している。

これらの遺物より、SD101は、飛鳥時代中葉～後半に溝として機能しており、奈良時代中葉頃には完全に埋没したと考えられる。



第5図 SD101出土遺物実測図 (S=1/4)

## 〈2区〉

2区は7-4CD地区に位置する。現地表(T.P.+9.7m)下0.9～1.0mで近世～現代の耕作土(1層)が見られる。土壤化した極粗粒砂～細礫主体の7-a層上面(T.P.+8.25m)で、西に落込む中世頃の溝SD102(4～6層)を断面で確認した。この溝は北接する洪川廃寺第3次調査SD207に統くものである。7層以下は水成堆積による砂礫層である。上層の7-a・b層は極粗粒砂～細礫が主体で層厚0.5mを測る。下層の8層は細粒砂と粗粒砂が互層となり、斜行ラミナを形成している。遺物は3層とSD102の埋土である5層中から瓦が出土した。

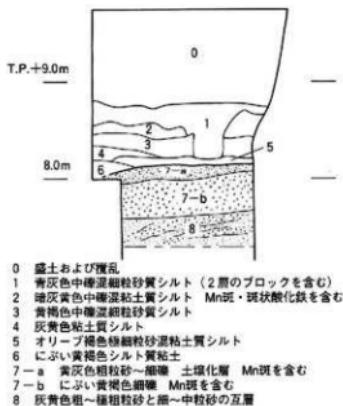
3層出土遺物(第7図-17) 17は丸瓦である。凸面はナデで整形され、凹面には布目痕が残る。

S D 102出土遺物(第7図-18~20、図版三) 18は丸瓦である。凸面はナデが施され、凹面には布目痕が残る。19・20は平瓦である。19は凹面に布目痕を残し、凸面に縄目タタキを施す。側縁部は凸凹面ともに面取りがなされており、断面は三角である。20の凹面はナデで整形されている。凸面は斜格子タタキを、側縁部は縦方向のハケを施す。

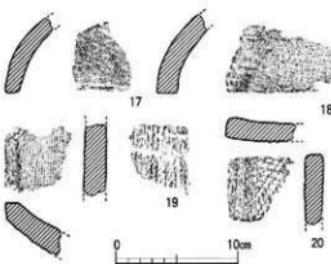
### 〈3~6区〉

3区は7-5E地区、4区は7-5E F、6E FG H、7H I J地区、5区は7-7J地区、6区は7-7J、8-7A、8ABC、9CD地区に位置する。3~6区の地層については、基本層序を最も端的に表す11箇所(A~K)を抽出し、模式図で示した。

現代の搅乱により現存しない箇所もあるが、西部では現地表(T.P.+9.7m前後)下約0.6mで、中央~東部にかけては約0.8~0.9mで近~現代の耕作土が見られる。D1層はその耕作土に対する島畑盛土である。近世の島畑盛土(B1・2層、C2・3層、D2・3層、J1・2層)はT.P.+8.7~8.8m付近で確認できる。各島畑とも2層の盛土からなり、0.35~0.4mの厚みを持つ。付随する水田はこれら以外の各箇所に存在し、最深部(K3層)ではT.P.+8.25mまで達する。近世の島畑盛土を除去すると、西部~中央部では中世頃に整地されたと思われる極細粒砂質シルト主体の地層(E3層、F2・3層、G3層)が存在し、ほぼT.P.+8.4m前後で水平に整地されている。東部は砂礫層(長瀬川の自然堤防)の盛り上がり(I4層、K4層)があるために、整地は高低差のできる西部と中央部になされている。なお、H3層、I3層は中世頃の水田耕土である。西部~中央部では、中世の整地層下面に極細粒砂混粘土質シルト~シルト主体のB4層、C5層、D4層、E4層(T.P.+8.2~8.3m)が存在し、古代の造構面を形成している。古代の造構面以下は、前述した砂礫層が堆積しており、その上面が古墳時代後期の造構面となっている。



第6図 2区北壁断面図 (S=1/50)

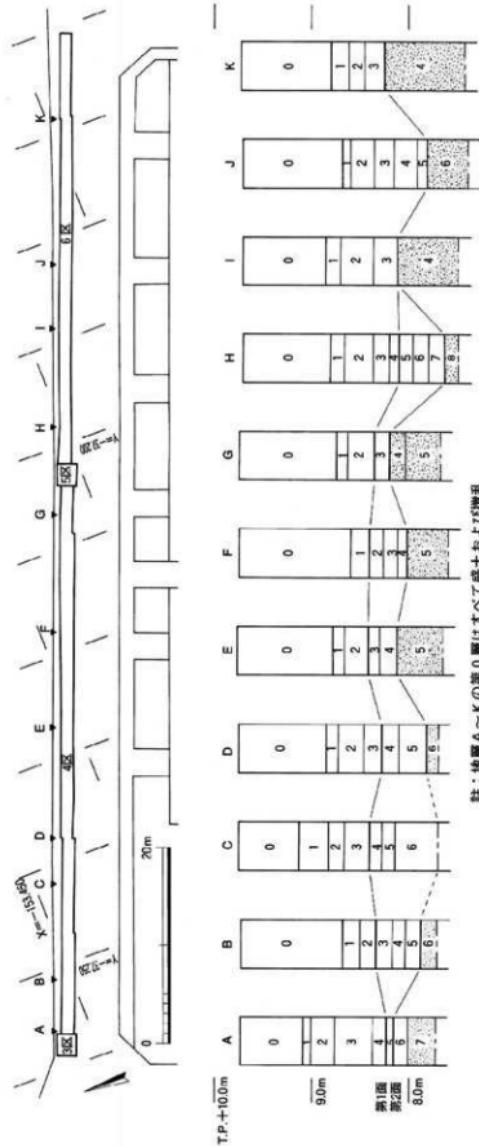


第7図 2区出土遺物実測図 (S=1/4)



写真4 6区(地層H付近) 北壁断面

## VII 渋川庵寺第4次調査(SKT2003-4)



註：地図A～Kの第0題はすべて博士たちの問題

第8図 4~6区地層模式圖(平面: S=1/500・断面: S=1/50)

### 第1面

3区～4区東部西より飛鳥～奈良時代の遺構(T.P.+8.3～8.4m)、4区東部東より～6区で中世の遺構(T.P.+8.4～8.5m)を検出した。第1面では土坑3基、溝8条、土壤状遺構1基を検出した。

#### S K101(第10図、図版一)

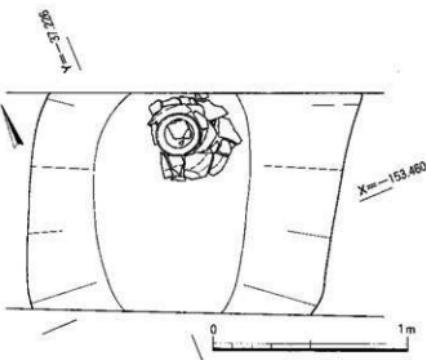
4区中央部の7-6・7H地区で検出した楕円形の土坑である。南・北部は調査区外に至る。E2層下面(T.P.+8.4m)が検出面で、規模は東西幅1.6m、南北幅1.3m以上、深さ0.4mを測る。埋土はシルトの小ブロックを含む細～粗粒砂質シルトである。土坑中央部北よりには、完形の須恵器壺(24)が口を上に向けて据えられており、土坑により潰れた状態で出土している。その他に土師器が出土した。

21～23は土師器、24は須恵器である(第11・12図、図版三)。21は小型の鉢で、口縁部に片口を持つ。22は杯である。23は瓶である。底部の蒸気孔は中央に円孔を配し、外周に3個の楕円形孔を持つ。体部外面は斜め方向のハケ、内面は縦および斜め方向のケズリで整形される。21～23は飛鳥時代前半のものである。24は壺である。口径21.5cm、器高47.3cmを測る。体部外面は上半が縦方向の平行タキ、下半が格子風のタタキで整形される。さらに、中位付近にカキメを、また体部内面は同心円文タタキを施す。TK217型式に属する。

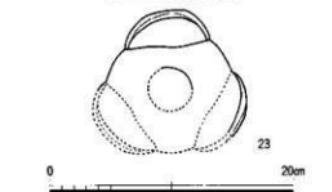
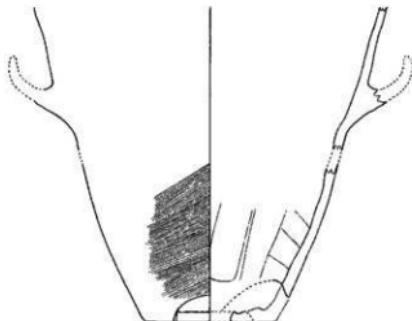
これらの遺物により、SK101は飛鳥時代前半の時期を与えることができる。

#### S K102(図版一)

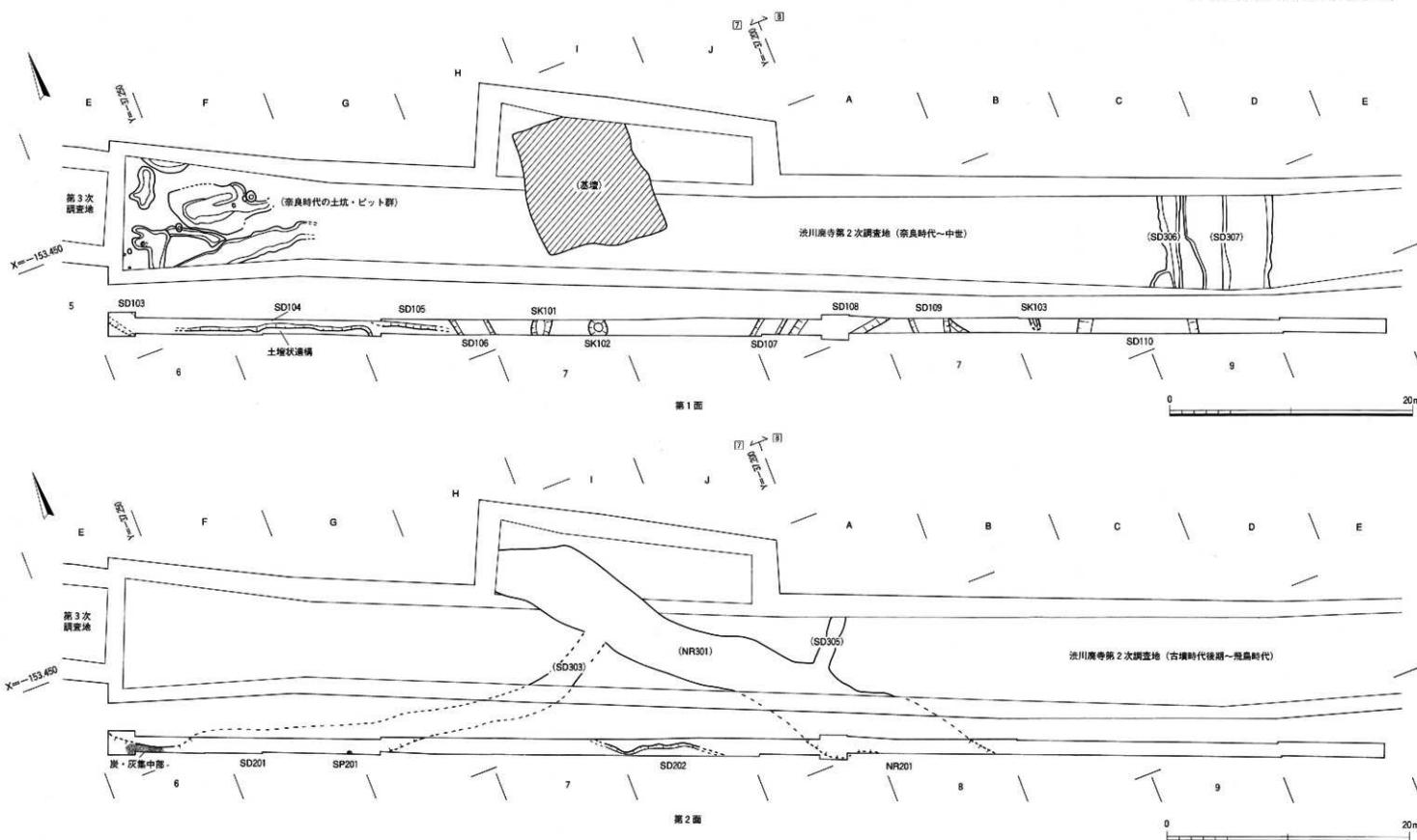
4区西部西よりの7-7I地区で検出した土坑である。南北部は調査区外に至る。F2層下面(T.P.+8.5m)が検出面で、径1.55mの円形を呈する。深さは0.21mで、埋土は粗粒砂混粘土質シルトである。遺物は土師器・須恵器が出土した。SK102の時期は、出土遺物より飛鳥時代と考えられる。



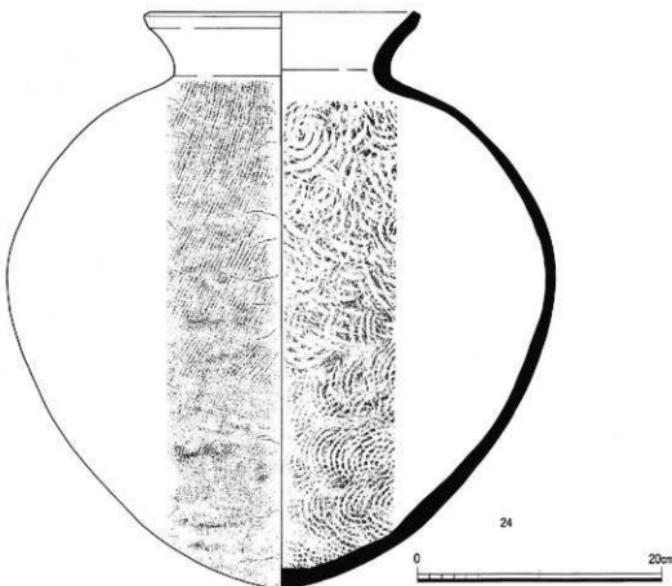
第9図 SK101須恵器壺出土状況(S=1/25)



第10図 SK101出土遺物実測図-1(S=1/4)



第11図 3～6区(第1・2面)および江川庵寺第2・3次調査地平面図(S=1/300)



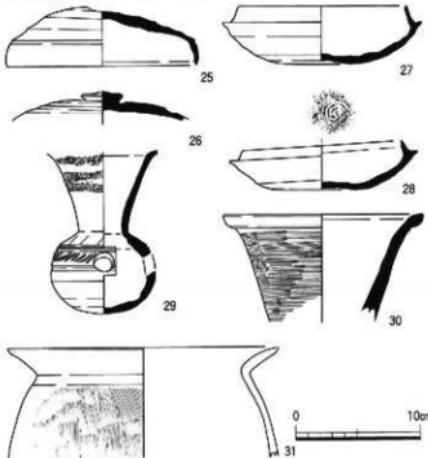
第12図 S K 101出土遺物実測図-2 (S=1/4)

## S K 103

6区中央部西よりの8-8B地区で検出した土坑である。北部は調査区外に至り、南部は近世の水田に擾乱を受ける。I 3層下面(T.P.+8.4~8.5m)が構築面で、東西幅0.75m、南北幅0.50m以上、深さ0.50mを測る。埋土は3層に分けられ、上層がシルトのブロックを含む極細粒砂混シルト、中層が粗粒砂を含む細粒砂質粘土質シルト、下層がシルト混細~極粗粒砂である。遺物は出土していない。時期は、周囲の状況から中世頃と考えられる。

## S D 103

3区~4区最東部の7-5E地区で検出した南北に伸びる溝である。3区には既存のガス管が存在し、それを避けての掘削で



第13図 S D 103出土遺物実測図 (S=1/4)

あったため、溝本米の姿は検出できていない。南北部は調査区外に至る。A 3層下面(T.P.+8.3m)が検出面で、壁断面等から東西幅約3.0m、深さ0.4mの溝を推定できる。埋土は細粒砂のブロックを含む細礫混シルトで、遺物は土師器・須恵器が出土した。

25~30は須恵器、31は土師器である(第13図、図版三)。25は杯蓋で、MT15型式に属する。断面は暗赤灰色をなす。26は杯B蓋である。天井部にやや偏平な宝珠形つまみを持つ。飛鳥IVに属する。27・28は杯身である。27はTK10型式、28はTK43型式に属する。また、28は底部内面に同心円のスタンプを施す。29は魁である。球形の体部を持つ。口頸部上半には波状文を施す。肩部に2本、体部中位に1本の凹線をめぐらし、それら凹線で区画した間に横描き列点文を施す。また、肩部には斜め方向の範描沈線をめぐらす。体部下半はヘラ削りで整形している。MT15型式に属する。30は摺鉢である。体部にカキメを施す。飛鳥時代中葉頃のものと思われる。31は甕である。飛鳥時代後半のものである。

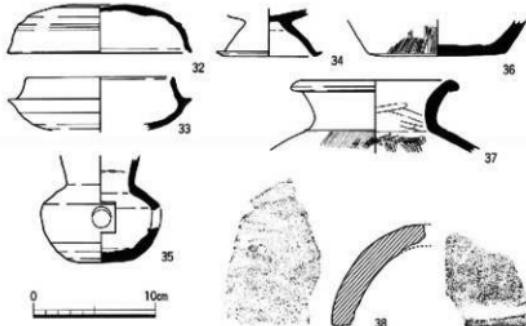
これらの遺物から、SD103は飛鳥時代中葉~後半に機能していた溝であると考えられる。

#### SD104(第20図)

4区西部の7~5・6E F、6G地区で検出した東西に伸びる溝である。土壌状遺構の北に付随するもので、北肩は調査区外に至る。B 3層、C 4層上面(T.P.+8.3~8.4m)が構築面で、検出長16.0m、幅1.0m以上、深さ0.22~0.30mを測る。埋土はシルト質中粒砂・細礫を主体に堆積している。土壌状遺構の性格によっては、その排水溝と考えられるが、埋土は流水していた堆積状況を示さない。遺物は土師器・須恵器・瓦が出土した。

32~37は須恵器、38は瓦である(第14図、図版三)。32は杯蓋で、TK10型式に属する。33は杯身で、MT15型式に属する。34は高杯の脚部である。脚部は丸みを持ち、底縁部は外上方につまみ上げる。TK43型式に属する。35は魁である。肩部の張りが少ないので、やや偏平な球形の体部を持つ。TK10型式に属する。36は平底壺の底部である。体部外面最下方と底部にタタキを施すが、底部のタタキはナデ消されている。奈良時代中葉のものと思われる。37は甕である。肩部から下方には、タタキを消すように継方向のハケを施している。TK10~43型式のものである。38は丸瓦である。凸面はナデで整形され、天井部付近では面取りがなされている。凹面には布目痕が残る。また凸面端部に幅の狭い面取りを行っている。

SD104は、土壌状遺構の築かれた奈良時代前半から機能をしており、出土した遺物から奈良時代後半までには埋没したものと考えられる。なおSD104出土の古墳時代後期中葉~後半の遺物は、溝掘削の際、下層のSD201から捲き上がったものである。



第14図 SD104出土遺物実測図 (S=1/4)

## S D 105(図版一)

4区中央部西よりの7-6G地区で検出した東西に伸びる溝である。北肩は調査区外に至る。さらに東部はS D 106によって切られる。D 4層上面(T.P.+8.2~8.3m)が構築面で、検出長4.7m、幅0.9m以上、深さ0.24~0.30mを測る。埋土は極粗粒砂を含む極細~中粒砂混シルトである。遺物は須恵器が出土した。

41は須恵器細頸壺の口頭部である(第15図)。口径は8.3cmを測る。奈良時代中葉のものである。

## S D 106

4区中央部の7-6GH地区で検出した南北に伸びる溝である。E 2層下面(T.P.+8.4m)が検出面で、幅2.65m、深さ0.17mを測る。埋土は2層に分けられ、上層が細礫を少暈含む極細粒砂混シルト、下層が細礫混シルト質細~粗粒砂である。遺物は須恵器が出土した。

39・40・42は須恵器である(第15図、図版三)。39は杯G蓋である。天井部に宝珠形つまみを持ち、口縁部内面に短いかえりが付く。飛鳥IIIに属する。40は有蓋高杯の蓋である。天井部に頂部がやや尖る偏平なつまみを有する。天井部と口縁部を分ける稜はややにぶい。断面は暗赤灰色をなす。TK 23~47型式のものである。42は壺である。ほぼ球形の体部にやや外に開く口頭部を持つ。体部中位にはカキメがなされており、底部はヘラ削りで整形される。断面は暗赤灰色をなす。6世紀後半~7世紀前半のものである。

S D 106の出土遺物はS D 105出土の遺物より古い時期のものであるが、S D 105より後出の構であることより、その時期は奈良時代中葉以降と考えられる。

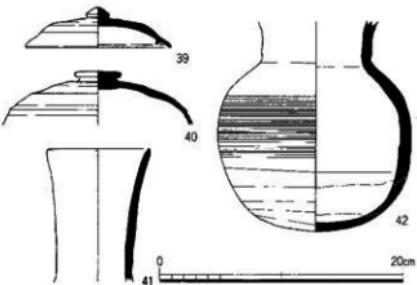
## S D 107

4区東部東よりの7-7J地区で検出した南北に伸びる溝である。G 2層下面(T.P.+8.4m)が検出面で、幅2.2m、深さ0.29mを測る。埋土は2層に分けられ、上層が細礫ブロックを含む極細粒砂質シルト、下層が粘土質シルト混細粒砂~細礫である。遺物は須恵器・瓦器・瓦類が出土している。

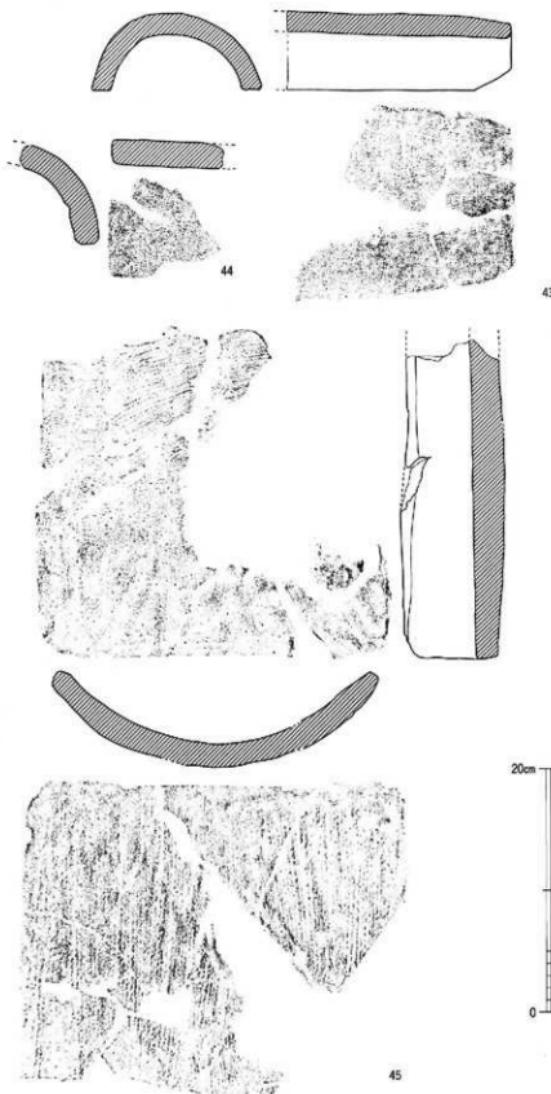
43~45は瓦である(第16図)。43・44は丸瓦である。43は行基葺丸瓦で、凸面はナデにより整形され、所々縄目タタキを施す。凹面は布目痕が残る。また、狭端面の側縁側は斜めに切り落としている。44の凸面はナデが施され、凹面は布目痕が残る。45は平瓦である。凹面は布目痕が残り、凸面には縄目タタキを施す。端部は凹面向取りを行っている。

## S D 108

4区最東部~6調査区最西部の7-7J、8-7A地区で検出した南北に伸びる溝である。G 2層下面(T.P.+8.4m)が検出面で、幅4.5m、深さ0.4~0.55mを測る。埋土は細礫を含む極細~中粒砂混シルトを主体に構成され、西に向かうにつれ粘性が増す。遺物は須恵器・瓦器・瓦類が出土している。



第15図 S D 105・106出土遺物実測図 (S=1/4)



第16図 S D 107出土遺物実測図 (S = 1/4)

## S D 109

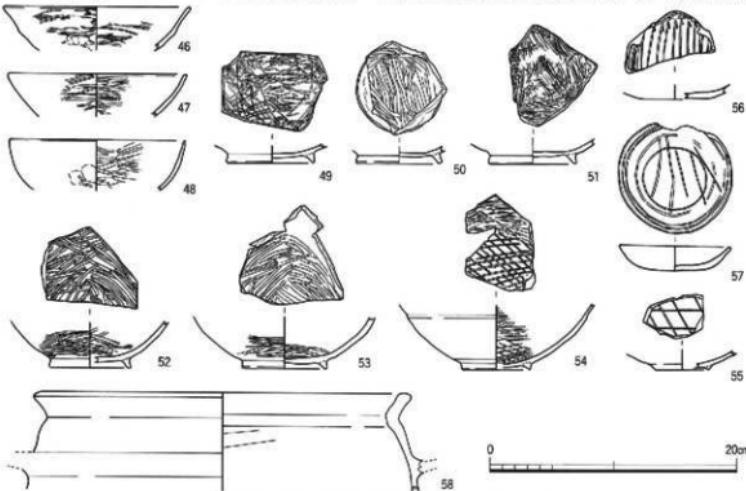
6区西部の8-8A地区で検出した南北に伸びる溝である。H 3層下面(T.P.+8.2m)が検出面で、幅3.5m、深さ0.35mを測る。埋土は概ね2層に分けられ、上層が粗～極粗粒砂の混じる細粒砂質粘土質シルト、下層が極細粒砂混粘土質シルトで構成される。遺物は土師器・瓦類が出土している。

S D 107～109は水田の最深部を溝として捉えたもので、第2次調査地検出の水田203に続く。

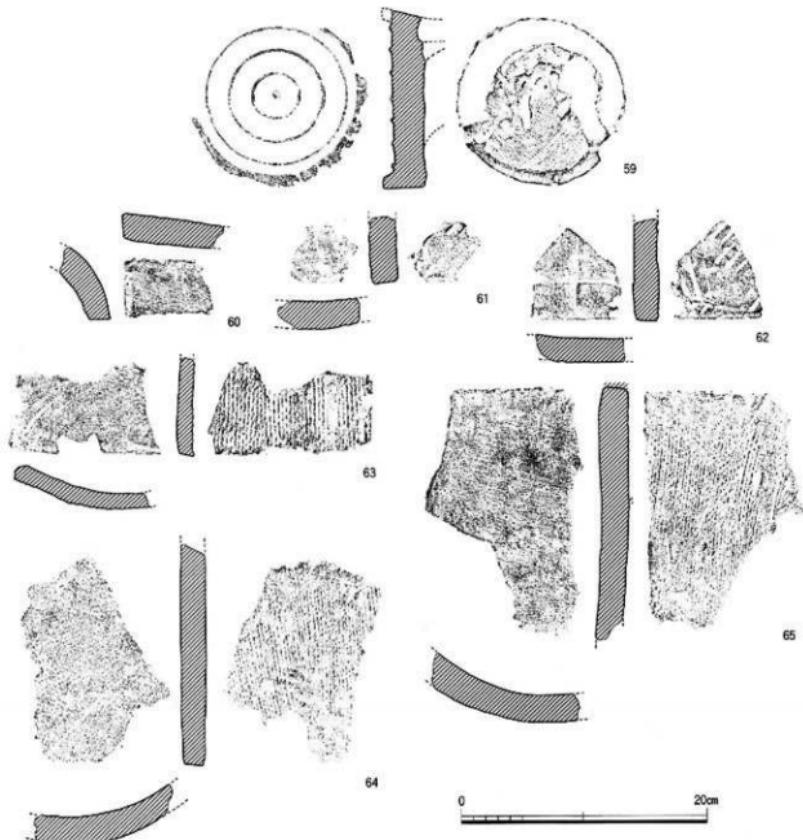
## S D 110(図版一)

6区中央部の8-8B C地区で検出した南北に伸びる溝である。K 4層下面(T.P.+8.4m)が検出面で、幅0.75m、深さ0.50mを測る。埋土は3層に分けられ、上層が粗粒砂～細礫を含むシルト質細～中粒砂、中層が細礫を含む中粒砂質粘土質シルト、下層が極粗粒砂を含む細粒砂質粘土質シルトである。S D 110は溝として報告したが、S D 107～109と同様に水田の可能性がある。遺物は土師器・須恵器・瓦器・瓦類が出土している。

46～57は瓦器、58は土師器、59～65は瓦である(第17・18図、図版三・四)。46～55は椀である。46は外面に強いユビオサエが残り、体部中位に稜をなす。内面には口縁部に密なヘラミガキを施す。47のヘラミガキは内外面ともに粗い。48は外面にユビオサエが残り、内面のヘラミガキは粗い。口縁端部は強いナデにより尖りぎみである。49・51の見込みのヘラミガキは乱方向に施す。高台は高く、断面は三角形である。50は密な平行線状のヘラミガキを見込みに施す。高台の断面は台形である。52・53の見込みには、やや密に平行線状のヘラミガキを弧状に施している。54は見込みに斜格子状の暗文を施す。体部外面には強いナデによる段がめぐる。55は低い断面三角形の高台を持ち、見込みは幅の広い斜格子状の暗文が施される。これらの瓦器椀の時期は、49～53が12世紀前半、46・47・54が12世紀中葉、47・55が12世紀後半と考えられる。56・57は小皿であ



第17図 S D 110出土遺物実測図一 (S=1/4)



第18図 S D 110出土遺物実測図一2 (S = 1/4)

る。56は見込みに明瞭な平行線状の暗文を施す。57は短い単位のヘラミガキが口縁部内面に沿って粗くなされ、見込みには数条の平行線状の暗文が施される。56が12世紀中葉、57が12世紀中葉～後半のものと考えられる。58は羽釜で、口径29.4cmを測る。12世紀中葉～後半のものである。59は重圓文軒丸瓦である。中心に径0.7cmの珠点を持ち、圓線は3重にめぐる。瓦当径14.7cm、瓦当厚3.6cmを測る。圓線は内から外に向けて太く高くなっている。圓線の内径は第1圈：3.5cm、第2圈：7.2cm、第3圈：10.8cmで、各圓線の間隔は均等である。内区径は12.2cmを測る。外縁は外傾する台形状で、高さは0.9cm、幅は1.3cmである。外縁の内区側には范ズレにより段をなす所がある。瓦当側面は縦方向のケズリにより整えられている。裏面は布目痕が接合粘土下まで残り、丸瓦の接合しない周縁部は面取りされている。丸瓦は瓦当のほか外周に沿って設けた溝に接合さ

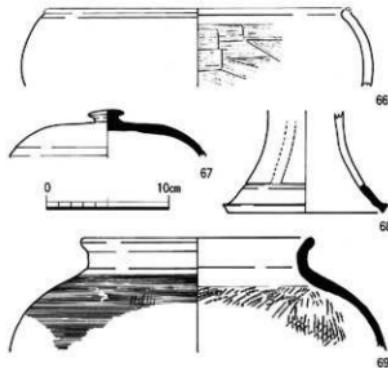
れ、接合粘土で補強した痕が残る。また接合粘土を取り付ける際のユビオサエとナデの痕が残る。平城宮6012A型式に比定でき、これは天平初頭～天平17年(730年頃～745年)の平城宮第II期後半に位置付けられている。60は丸瓦である。凸面はナデを施す。凹面は布目痕が残る。また凸面端部および側縁部に幅の狭い面取りを行っている。61～65は平瓦である。61の凹面はナデで整形され、凸面は綾杉文タタキを施す。端部は両面ともに狭い面取りがなされている。62は四面に布目痕が残るが、端部に幅広く布目痕がおよばない所がある。凸面は綾杉文タタキを施す。端部は両面ともに狭い面取りを施している。63・64の凹面には布目痕が残り、凸面には縄目タタキを施す。端部は凹面に、側縁部は両面ともに狭い面取りを行っている。65は凹面に布目痕が残り、その上から幅の広いハケがなされている。凸面は縄目タタキを施す。

S D110は出土遺物より少なくとも13世紀には埋没したと考えられ、S D107～109も同時期の遺構と推測される。

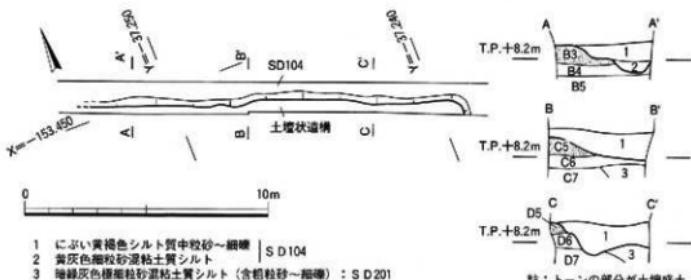
#### 土壇状遺構(第20図・図版二)

4区西部～中央部西よりの7-5・6E F、6G地区で検出した。南部は調査区外に至る。盛土はB4層、C5層上面(T.P.+8.1～8.3m)をベースに0.1～0.25mの高さを持ち、検出長15.5m、幅0.5m以上を測る。遺構の西部に関しては、明確なラインを検出することができなかった。土壇は第2次調査検出の基壇と非常によく似た地層で構成されている。ベース面に0.04mの厚みで黄褐色の硬く縮まるシルトの層を薄く盛った後に、灰黃褐色の中粒砂～細礫を含む極細粒砂泥シルトを重ねて造り出している。土壇内には、飛鳥～奈良時代前半までの遺物が中心に包含されている。

第2次調査検出の基壇と同時期の遺構である。しかし建物等の土壇としては若干貧弱であり、幅狭い調査地内での検出であることと相まって、その性格は明確にできない。また先にも触れたが、



第19図 土壇状遺構内出土遺物実測図 (S=1/4)



第20図 土壇状遺構およびSD104断面図(平面図:S=1/200、断面図:S=1/50)

北に付随する S D 104は土壇状遺構に対し、有機的な機能を持っていたものと考えられる。土壇内から土師器・須恵器・馬齒が出土した。

66は土師器、67～69は須恵器である(第19図)。66は鉢Aである。口縁端部が内傾する面をなし外方に肥厚するものである。平城Ⅲに属する。67は杯B蓋である。天井部に丸く偏平なつまみを持つ。飛鳥Vに属する。68は高杯の脚部で、すかしは3方である。TK209型式に属する。69は甕である。肩部から体部にカキメを施す。内面の同心円文はナデにより擦り消されている。TK217型式に属する。

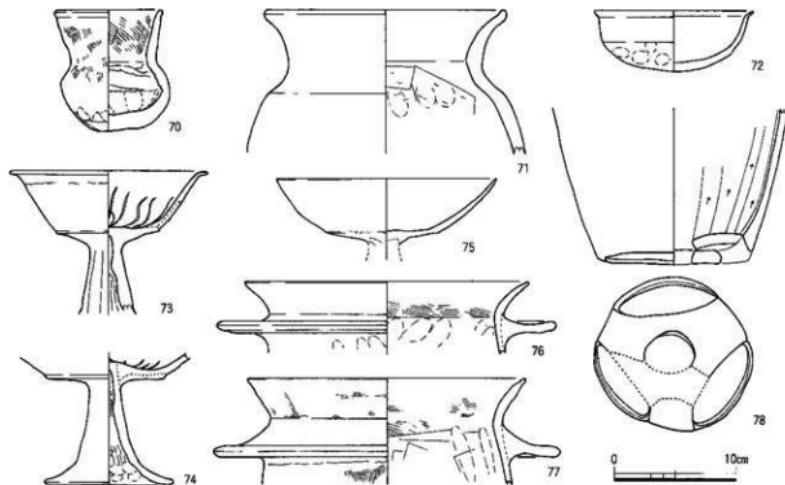
土壇状遺構は奈良時代前半に築かれ、S D 104出土の遺物から奈良時代後半には機能を終えていたと思われる。

## 第2面

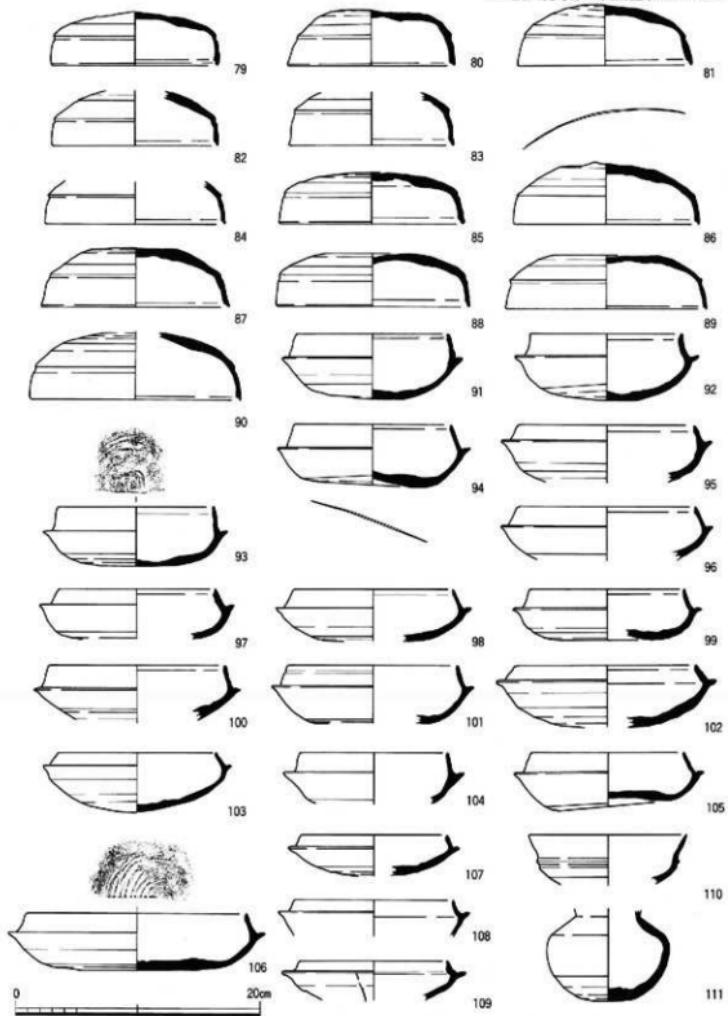
渋川廃寺造営以前の遺構面である。長瀬川の左岸に自然堤防として堆積した砂礫層上面(T.P.+8.1～8.2m)で検出した。古墳時代後期～飛鳥時代の遺構が確認できた。第2面では、溝2条、柱穴1基、自然流路1条を検出した。

## S D 201

3区～4区中央部西よりの7-5・6 E F、6 G地区で検出した溝である。3区では東西南方向に、4区では南北方向に伸びる。南北部は調査区外に至る。A 6層、E 5層上面(T.P.+8.1～8.2m)が構築面で、推定幅3.0m前後、深さ0.45m以上を測る。埋土は極細粒砂質粘土質シルトのグライ化層が主体で、下方は砂礫を含む。また全体的に小さな炭片が散見される。3区と4区の接続部付近では、炭および灰が集中して堆積している箇所があり、別遺構が存在していた可能性がある。第2次調査検出のS D 303に統くと考えられ、S D 303は同調査検出のN R 301に合流する。遺物は上層から土師器・須恵器が多量に出土した。



第21図 S D 201出土遺物実測図-1 (S = 1/4)



第22図 S D 201出土遺物実測図-2 (S = 1/4)

70~78は土師器、79~111は須恵器である(第21・22図、図版三・四)。70は小型壺である。手づくねで、頸部内外面と肩部外面にハケを施すが、外面のハケはまばらである。外面と頸部内面に赤色顔料を施す。6世紀前半のものである。71は壺である。肩部外面に段を有する。胎土は粗く、1~4mm大の長石を多く含む。6世紀中葉頃のものと考える。72は杯である。体部外面上半

と内面はナデで整形され、体部外面下半はユビオサエが残る。6世紀前半～中葉ごろのものである。73～75は有稜高杯である。75は楕円形の杯部で、その稜はにぶい。73・74は杯部内面に放射状暗文を施す。また、73の脚部外面にはゆるい面取りがなされている。73・74が6世紀前半～中葉、75が6世紀後半のものである。76・77は羽釜である。76は大きく外反する口縁部の直下に水平の鍔がつく。77は短い頭部から外反する口縁部を持ち、鍔はやや下方を向く。口縁端部内外面に強いナデがなされている。78は瓶である。底部の蒸気孔は中央に円孔を配し、外周に3個の梢円形孔を持つ。内面は縱方向のケズリで調整されている。76～78は6世紀中葉～後半のものと思われる。79～90は壺蓋である。79・80はTK23型式に属する。79は口縁端部内面に明瞭な段を有する。80の断面は暗赤灰色をなす。81～89はMT15型式に属する。口径は81～83が14cm前後、85～88が15.5cm前後である。また86の天井部にはヘラ記号を有する。90は天井部と口縁部を区切る棱が非常ににぶい。TK10型式に属する。91～109は杯身である。90～98はMT15型式に属する。90は口縁端部内面に段を持ち、91～98は内傾する端部が浅く窪む。また93の内面底には同心円文のスタンプを施し、94の体部にはヘラ記号がなされている。99～106はTK10型式に属する。99・101の口縁端部内面には沈線が1条めぐる。106の口径は18.0cmと非常に大きい。また内面底には同心円文のスタンプを残す。107～109はTK43型式に属する。110は無蓋高杯の杯部である。MT15型式に属する。また断面は暗赤灰色をなす。111は甌である。底部には、製作段階に充填した円板を残したものとしている。TK10型式に属する。SD201出土の遺物は、MT15型式・TK10型式を中心とするTK23～TK43型式までの須恵器杯身蓋がその大半を占める。図化し得なかつたが須恵器甌なども数点出土している。SD201は古墳時代後期以前から機能しており、後期前半頃から土器の廃棄が始まる。第2次調査SD303出土の遺物から飛鳥時代前半には完全に埋まつたと考える。

#### SD202(写真5、図版二)

4区東部の7-7H1地区で検出した東西に蛇行する溝である。南肩は調査区外に至る。また西部はSK102によって切られる。F5層上面(T.P.+8.1m)が構築面であるが、溝本来の北肩は調査区外にあり、SD202は溝が一段落ち込むラインを示している。検出長7.9m、幅1.0m以上、深さ0.16mを測る。埋土は2層に分けられ、上層が極粗粒砂を含む細～中粒砂泥シルト、下層がやや粘質のシルトブロックを含む細～粗粒砂質粘土質シルトである。溝の最上層で、ほぼ完形の須恵器杯身(123)・杯蓋(120)が、据え置かれたような状態で1点づつ出土している。遺物は土師器・須恵器が出土した。

112～115は土師器、116～137は須恵器である(第23図、図版五)。112は有稜高杯である。やや内溝気味に伸びる杯部に外反する口縁端部を持つ。6世紀後半のものと考えられる。113は杯である。体部外面下半にユビオサエが残り、その他はナデにより整形される。6世紀後半のものである。114は甌である。口縁部は「く」の字に屈曲する。口縁端部内面が肥厚することで端部外面に面をなし、沈線をめぐ

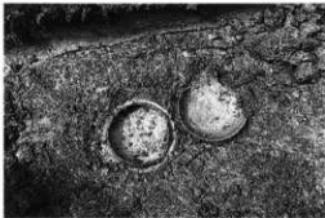
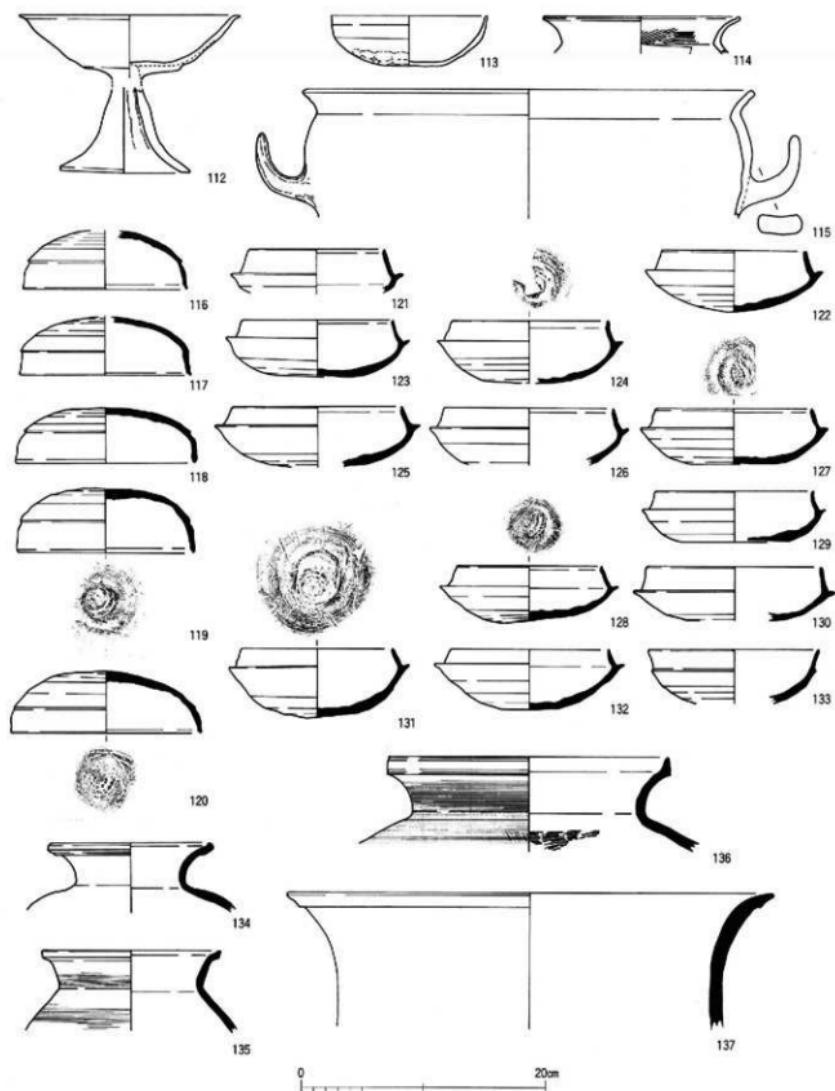


写真5 SD202遺物出土状況(北東から)



第23図 S D 202出土遺物実測図 (S = 1/4)

らす。飛鳥時代前半のものと考えられる。115は鍋である。口縁部の屈曲は著しく、端部は面をなす。体部中位に偏平で先端を尖らせた把手を有する。飛鳥時代前半のものと思われる。116～120は杯蓋である。116はTK23型式に属する。また断面は暗赤灰色をなす。117～120はMT15型式に属する。118・119の天井部内面には同心円文のスタンプを施す。121～132は杯身である。121はTK23型式に属する。122～128はMT15型式に属する。122はやや内傾する口縁端頂部の面に凹線がめぐる。その他は内傾する端部内面が浅く窪む。124・127・128の内面底には同心円文のスタンプを施す。129～131はTK10型式に属する。131の内面底には同心円文のスタンプを施す。132はTK43型式に属する。133は無蓋高杯の杯部で、TK10型式に属する。134～136は壺である。135・136は頸部から肩部にかけてカキメを施す。MT15型式に属する。137は広口壺で、初期須恵器の範疇に収まるものである。

S D 202はS D 201と同時期に機能しており、溝が完全に埋まるのもS D 201と同じく飛鳥時代前半ごろと考える。

#### S P 201(写真6)

4区東部中央よりの7-5F地区で検出した柱穴である。南部は調査区外に至る。C6層上面(T.P.+8.15m)が構築面で、S D 201を掘り込む。一辺0.4m、深さ0.15mの隅丸方形で、やや北により径0.1mの柱痕が残る。埋土は炭片を含む粘土質シルトである。遺物は出土していない。時期は上位層であるB4・C6層内出土遺物やS D 201の最終段階と同レベルであることから、古墳時代後期後半に収まると思われる。



写真6 S P 201 (北東から)

#### N R 201(写真7)

4区最東部～6区西部の7-7J、8-8A地区で、壁断面で確認した南北に伸びる自然流路である。南北部は調査区外に至る。G4層上面(T.P.+8.2m)より切り込んでおり、最大幅は推定で9.0mを復原できる。深さは0.9mを測る。第2次調査N R 301に続く流路である。埋土は大別して3層に分けられ、1層が粘土質シルト～シルト(H5層)、2層がグライ化した細粒砂混シルト質粘土で細かいラミナ状の細粒砂を含み(H6層)、3層が植物遺体を含むシルト～極細粒砂(H7層)で構成される。遺物は出土していない。時期はS D 201が第2次調査地で合流するため、同時期のものと思われる。



写真7 N R 201北壁断面

#### 遺構に伴わない遺物

瓦類(第24図、図版五) 142は単弁八弁蓮華文の高句麗系軒丸瓦である。瓦当は范ズレの状態である。胎土は粗く、色調は内外面が灰白色で、断面がにぶい黄褐色である。瓦当裏面には、丸瓦の接合溝が瓦当のほぼ外周に沿って設けられており、接合粘土で補強した痕が残る。143～145は丸瓦である。143の凸面はケズリで整形され、凹面は布目痕が残る。また、凹面の側縁端部付近には分割界線が残る。144・145は玉縁付丸瓦である。凸面はナデで整形され、凹面には布目痕



第24図 4~6区出土瓦類実測図 (S=1/4)

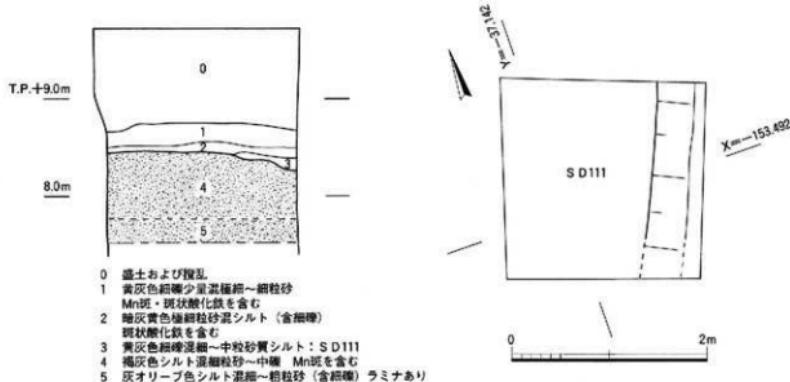
(142・146~148: K 3層、143~145: B 1・2層、149: H 3層、150: F 1層、151: D 2・3層、152: C 1層)

が残る。胴部と玉縁部は分割で作り出している。146~152は平瓦である。146の凹面はナデで整形し、凸面は格子目タタキを施す。凹面端部には狭い面取りがなされている。147は凹面に布目痕が残り、凸面には綾杉文タタキを施している。148の凹面には布目痕と糸切り痕が、凸面にはハケが施されている。149・150・152は、凹面に布目痕が残り、凸面にはナデで整形され、やや面取り気味に仕上げている。凹面の側縁端部は面取りを行っている。

### 〈7区〉

調査区南部に既設埋没管が存在したため、この部分以外を調査対象とした。現地表(T.P.+9.7m)下約1.0mで近世～現代の耕作土(1・2層)が見られる。2層下面(T.P.+8.45m)で南北方向に伸びる溝(S D 111)を検出した。4層以下は水成堆積による砂疊層である。4層は非常に硬く締まるシルト混細粒砂～中疊で、5層は細疊を含むシルト混細～粗粒砂で、ラミナが見られる。

**S D 111(第26図、図版二)** 調査区最西部の8-10F地区で検出した南北に伸びる溝である。東肩は調査区外に至る。幅0.6m以上、深さ0.17mを測る。埋土は細疊混細～中粒砂質シルトである。耕作に伴う溝である。遺物は出土していないが、中世頃の時期が与えられる。



第25図 7区北壁断面図および平面図 (S=1/50)

### 3.まとめ

調査の結果、古墳時代後期以前～中世の遺構を確認した。以下、本調査および周辺の調査事例をふまえて、当該地の歴史を概観する。

渋川廃寺造営以前である古墳時代後期の遺構として S D 201・202、S P 201、N R 201がある。古墳時代後期を通じて機能する2条の溝に土器が廃棄されていたことは、近隣に居住域が存在したことを示唆する。しかし、本調査地(5区を中心と考える。以後同じ。)の西方約150mの地点の久宝寺遺跡第29次調査(以下、久宝寺第29次調査)では、南東から北西に流れる自然河川(N R 4001)があり、その西側では後期の遺構は検出されていない。さらに、N R 201より東側には第2次調査および本調査でも遺構の検出はない。周辺では、第3次調査において東西方向の溝(S D 401)が検出されるのみである。西の自然河川と東の自然流路に挟まれた東西約150mの間で、南側(あるいは北側)に生活面が広がるものと推測される。飛躍が許されるのならば、跡部という土地柄、物部氏2代(尾輿、守屋)に関わる居住域が広がっていたとは考えられないだろうか。S D 201が埋没した後はそれを切り込んで S P 201があり、後期後半段階にも当該地あるいはその南側に生活面が広がっていたと思われる。これらの遺構は渋川廃寺造営のために整地されたと推測され、飛鳥時代前半には完全に埋没する。

津川廃寺創建期(7世紀第2四半期)を含む飛鳥時代の遺構にはSK101・102、SD101・103がある。過去の調査における飛鳥時代の遺構は、第1次調査で地鎮を想定させる土器群、土壙状遺構、掘立柱群、久宝寺第29次調査で東西方向の溝(SD3060)と南東から北西に流れる自然河川(NR3002)が検出されている。飛鳥時代の遺物は、創建期に使用された高句麗系軒丸瓦や飛鳥時代の土器が後出の遺構あるいは包含層中からの出土がほとんどである。現在のところ周辺において、創建期の寺院に直接関わる遺構は確認されておらず、飛鳥時代における伽藍配置や寺域は確定するには至っていない。

奈良時代の遺構にはSD104~106、土壙状遺構がある。周辺の調査では、第2次調査で基壇、土坑群、ピット群などが、第3次調査では土坑群と南北方向の溝(SD403)が、久宝寺第29次調査では井戸(S E3003)、掘立柱建物(SB3001)、南東から北西に流れる溝(SD3052)および墨書き木簡が出土した自然河川(NR3001・3003)が検出されている。奈良時代になると当該地は、寺院再建に伴い大規模な整地を行っている。第2次調査検出の基壇は、掘り出された塔心礎の元位置についての検討により、塔に伴う基壇であることを示した(拙稿2004)。さらに基壇周辺より「下主寸…塔分…」と線刻された平瓦が出土していることも有力な手掛かりとなっている。また寺域については、第3次調査のSD403が区画溝と考えられ、奈良時代における寺域の西端が確認されたことは特筆に値する。第2次調査検出の南北方向の溝(SD307)の最終的な埋没時期は平安時代末ごろであるが、SD307以東に奈良時代の遺構がないことを考えると、この溝が寺域の東端である可能性は非常に高い。(今回の調査では平面的に確認することができなかった)津川廃寺は平安時代前半ごろには廃絶したと推定されているが、その廃絶後も溝は存在し、第2次調査東方に展開する居住域の廃棄場として利用したと考えたい。本調査検出の土壙状遺構は、第2次調査の基壇と非常によく似た盛土で構成されていることからも、寺院に関連するものであることは間違いない、寺域の南方はさらに広がると推測できる。奈良時代の居住域は、本調査地の西方約210mで検出した久宝寺第29次調査の溝と自然河川(これらは時期差によって流路を変化したもの)より以西に広がることを、さらに墨書き木簡の出土から近隣での役所の存在を、報告者は指摘している(原田2003)。

中世の遺構にはSK102・103、SD107~111がある。本調査検出の中世の遺構は、生産に関するものである。第2次調査では居住域と生産域を、第3次調査では生産域を検出している。先述の通り、第2次調査では本調査地の東方、約85mより以東に居住域が存在する。

近世以後の当該地は、畠畠および水田で構成される生産域で、近年の土地再開発まで生産域として利用されていた。

註

- 註1 賀積寺という寺名は周辺の俗称から名付けられたと言われている。しかし『八尾市史 史料編』掲載の中務文書にある『慶長17年(1612)河州浜川村植松村御検地帳』に、「法着寺」という小字名が見られるところから、実際に存在した小字名であったことが窺い知れる。
- 註2 中・南河内では神並遺跡(中西1998)、法通寺跡(下村1985)〈東大阪市〉、久宝寺遺跡(一瀬1987)、東鷹庵寺(奥1989)〈八尾市〉、河内国分尼寺(石田1987)、船橋庵寺(竹下1987、若林1998)〈柏原市〉、衣縫庵寺(芝野・館1987)、北岡遺跡(天野1996)、葛井寺(上田1989・1994・1996・1997・2003、佐々木1998・1999、新間1998)〈藤井寺市〉、野中寺(羽曳野市教育委員会1996)〈羽曳野市〉において重圓文軒丸瓦が出土している。なかでも、河内国分尼寺、北岡遺跡、葛井寺、野中寺のものは、瓦当中央に珠点を持つ平城式に比定される。

また重圓文軒丸瓦が重廊文軒平瓦とセット関係にあることは、後期難波宮で採用されていたことで広く知られている。現在のところ、浜川庵寺の調査では重廊文軒平瓦は出土していない。しかし、本調査区の西方約750mで実施した久宝寺遺跡第33次調査において、井戸から平城宮6572型式の重廊文軒平瓦が出土している。浜川庵寺の中心からは若干距離があるようにも思われるが、ここでは浜川庵寺で採用された軒瓦が数点出土していることからも、この重廊文軒平瓦は今回出土の重圓文軒丸瓦とセットとなるものと考えられる。この重廊文軒平瓦の詳細は正報告に譲るが、参考として写真を掲載した。



写真8 重圓文軒平瓦

引用・参考文献

- 青木勘時 1990「23. 浜川庵寺(S K T 90-1)」〔(財)八尾市文化財調査研究報告28 八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度〕財団法人八尾市文化財調査研究会
- 天野末喜 1996「第1章 北岡遺跡の調査(3 K T C区)」「北岡遺跡 藤井寺市文化財報告第13集」藤井寺市教育委員会事務局
- 石田成年 1987「第5章 国分尼寺跡」「柏原市埋蔵文化財発掘調査概要 1986年度」柏原市教育委員会
- 竹下賢監修 1987「付草 船橋遺跡」「柏原市埋蔵文化財発掘調査概要 1986年度」柏原市教育委員会
- 一瀬和夫 1987「第4章第5節 瓦類」「久宝寺南(その2)」大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- 井上正雄 1976「第三篇第二章第二節第三十五項 竜華村」「大阪府全志」巻之四(復刻版)清文堂出版
- 上田 謙 1989「Ⅲ 葛井寺遺跡の調査 3区」「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅳ 藤井寺市文化財報告第4集」 1994「Ⅲ 葛井寺遺跡・葛井寺跡の調査」「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅸ 藤井寺市文化財報告第10集」 1996「第5章 葛井寺遺跡の調査(5. F J 93-13区)」「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅺ 藤井寺市文化財報告第14集」 1997「第5章 葛井寺遺跡の調査(5. F J 95-24区)」「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅻ 藤井寺市文化財報告第15集」 2003「第4章 葛井寺跡の調査(1. F J T 98-2区)」「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅹ 藤井寺市文化財報告第16集」 2003「第4章 葛井寺跡の調査(1. F J T 98-2区)」「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅺ 藤井寺市文化財報告第23集」藤井寺市教育委員会事務局
- 尾上 実・森島康雄・近江俊秀 1995「Ⅲ 土器・陶磁器 6. 瓦器帆」「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社
- 奥 和之 1989「第3章 4. 自然流路の出土遺物について」「東郷遺跡発掘調査概要・I」大阪府教育委員会
- 片岡紫峰 1924「賀積寺」「中河内郡庵寺」片岡英宗
- 京嶋 覚 1992「古墳時代後半期における土師器の器種構成」「長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅲ」財団法人大阪市文化財協会
- 古代の土器研究会編 1992「古代の土器 I 都域の土器集成」古代の土器研究会
- 古代の土器研究会編 1993「古代の土器 II 都域の土器集成II」古代の土器研究会
- 佐々木理 1998「第4章 葛井寺遺跡の調査(1. F J 95-21区)」「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅹ 藤井

- 寺市文化財報告第17集』 1999「第3章 葛井寺遺跡の調査(3. F J 97-19・20区)」「石川流域遺跡群発掘調査報告X IV 藤井寺市文化財報告第19集』 藤井寺市教育委員会事務局
- ・芝野圭之助・館 邦典 1979「第2章 78-3区」「国府遺跡発掘調査概要・IX』 大阪府教育委員会
  - ・下村晴文 1985『法通寺』 財団法人東大阪市文化財協会
  - ・新開義夫 1998「第5章 葛井寺の調査(1. F J T 96-1区)」「石川流域遺跡群発掘調査報告X III 藤井寺市文化財報告第17集』 藤井寺市教育委員会事務局
  - ・財団法人八尾市文化財調査研究会 1990『渋川庵寺第1次発掘調査概要(現地説明会資料)』
  - ・財団法人八尾市文化財調査研究会 2002『渋川庵寺(現地説明会資料)』
  - ・田辺昭二 1966『陶邑古窯址群 I』 平安学園考古学クラブ 1981『須恵器大成』 角川書店
  - ・辻 美紀 1999『古墳時代中・後期の上飾器に関する一考察』『国家形成期の考古学--大阪大学考古学研究室10周年記念論集』 大阪大学考古学研究室
  - ・坪田真一・金親満夫・酒 斎 2003『渋川庵寺とその背景』『河内どんこう No67』 財団法人八尾市文化協会
  - ・坪田真一・金親満夫 2004『(財)八尾市文化財調査研究報告79 渋川庵寺』 財団法人八尾市文化財調査研究会
  - ・成海佳子・橋口 薫・金親満夫 2001「4. 久宝寺遺跡第33次調査(K H 2000-33)」「平成12年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』 財団法人八尾市文化財調査研究会
  - ・羽曳野市教育委員会編 1996『羽曳野の古代寺院 I 野中寺』 羽曳野市教育委員会
  - ・原田昌則他 2003『(財)八尾市文化財調査研究報告74 久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書』 財団法人八尾市文化財調査研究会
  - ・中西克宏 1988「V. 遺物」「神並遺跡III」 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会
  - ・藤澤一夫 1941「攝河泉出土古瓦の研究」「佛教考古学論叢」桑名文星堂
  - ・森島康雄 1990「中河内の羽釜」「中近世土器の基礎研究VI」日本中世土器研究会
  - ・毛利光後彦・花谷浩 1991「平城宮・京出土軒瓦幅年の再検討」「平城宮発掘調査報告XIII』奈良国立文化財研究所
  - ・八尾市史編纂委員会編 1960『八尾市史 史料編』 大阪府八尾市役所
  - ・安井良三他 1991『(財)八尾市文化財調査研究報告31 痕跡遺跡発掘調査報告書』 財団法人八尾市文化財調査研究会
  - ・若林邦彦 1998「第3章第1節 96-1-1~5トレンチ」「船橋遺跡 (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告第29集』 (財)大阪府文化財調査研究センター



4区SK101（南東から）



4区SK101出土須恵器甕（南から）



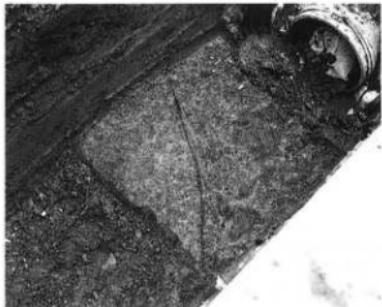
4区SK102（南東から）



1区SD101（南西から）



4区SD105（東から）



6区SD110西脇（南西から）



7区S D112（南西から）



4区S D202（東から）



4区土壇状造構（東から）



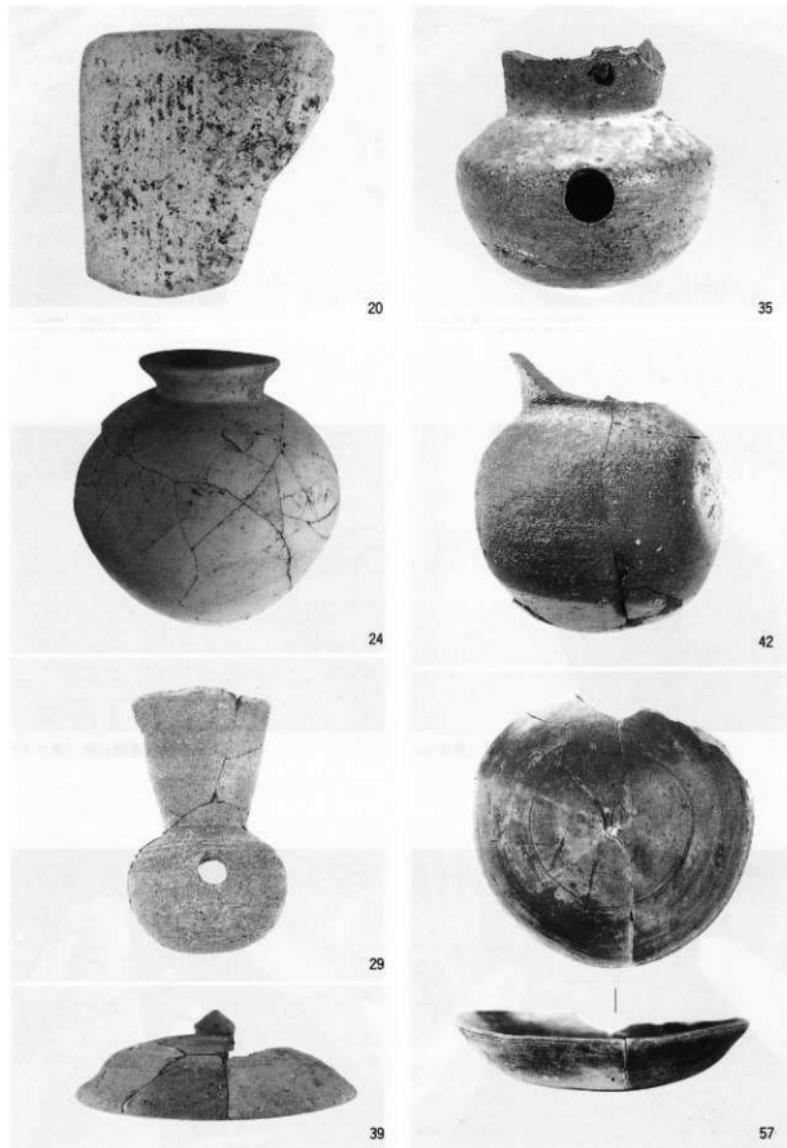
4区土壇状造構近影（東から）



4～6区地層F付近西壁



調査風景



2区 (20)、SK101 (24)、SD103 (29)、SD104 (35)、SD106 (39・42)、SD110 (57)



59



62



71



78

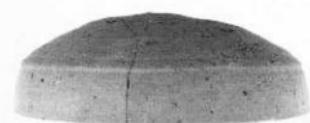


72

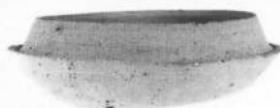


81

S D 110 (59・62)、S D 201 (71・72・78・81)



86



94



120



123



124



146



147



142



148

S D201 (86・94)、S D202 (120・123・124)、6区K3層 (142・146～148)

VIII 成法寺遺跡第19次調査（S H2003-19）

## 例　　言

1. 本書は大阪府八尾市高美町2丁目地内で実施した公共下水道建設(14-108工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する成法寺遺跡第19次調査(SH2003-19)の発掘調査業務は八尾市教育委員会の指示書(八教生文第423号 平成15年5月8日)に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成15年5月15日～同年5月21日(実働3日)にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約35m<sup>2</sup>を測る。
1. 現地調査に参加した補助員は國津れいこ・中野靖之・横山妙子である。
1. 内業調査は現地調査終了後隨時行い、平成15年12月31日に終了した。
1. 本書作成に関わる業務は、以下の通りである。

【遺物実測】徳谷尚子

【トレース】市森千恵子

【執筆・編集】西村

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	99
2.調査概要.....	99
1) 調査方法と経過.....	99
2) 検出遺構と出土遺物.....	99
3.まとめ .....	101

## VIII 成法寺遺跡第19次調査(S H2003-19)

### 1. はじめに

成法寺遺跡は八尾市のはば中央から北よりに位置し、現在の行政区画では光南町1～2丁目、清水町1～2丁目、南本町1～4丁目、高美町1～2丁目、陽光園1丁目、明美町1丁目、松山町1丁目がその範囲になっている。地形的には長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地に位置している。

当遺跡では、大阪府教育委員会(以下府教委)、八尾市教育委員会(以下市教委)、(財)八尾市文化財調査研究会(以下研究会)が発掘調査を実施しており、弥生時代～近代に至る遺構の検出および遺物の出土が確認されている。

今回の調査地の周辺では、研究会が発掘調査を行っており、第6次調査では、室町時代の遺構、遺物が検出されている(原田1991)。また、第12次調査では、弥生～奈良時代にかけての遺構・遺物が検出されている(坪田1994)。さらに、南に隣接している矢作遺跡第5次調査では、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての土器や須恵器、土師器などの遺物が出土している(森本2000)。

### 2. 調査概要

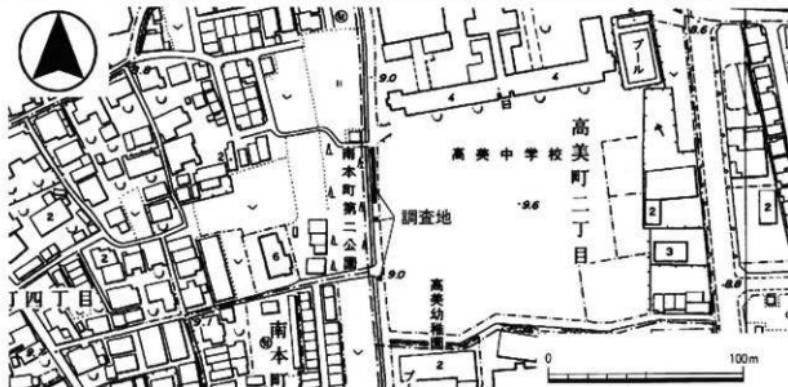
#### 1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道建設に伴う調査で、研究会が成法寺遺跡内で行った第19次調査である。調査は、現地表下約1.0mまで機械で掘削し、以下1.0mの厚みの地層は機械と人力を併用して掘削した。今回の調査では、八尾市下水道部作成の図に記載している標高値(調査地の南側[T.P.+9.279m])を使用した。

#### 2) 検出遺構と出土遺物

##### 〈第1区〉

東西1.8m、南北2.0mの調査区で、深さ1.8m前後まで掘削した。現地表面はT.P.+9.25m前後を測り、以下4層を確認した。T.P.+8.0m前後の2層からは、中世と思われる土師器や瓦の破



第1図 調査地周辺図 (S=1/2500)

片が出土した。しかし、遺構の検出はなかった。なお、調査区の西側には既設の水路、東側には既設の水道管があり、これらの工事の際に掘削が行われ、本来の地層は壊されていた。そのため中央部分の東西幅約1.3mの調査となった。

### 〈第2区〉

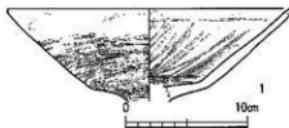
東西1.8m、南北2.0mの調査区で、深さ1.8m前後まで掘削した。現地表面はT.P.+9.15m前後を測り、以下3層を確認した。T.P.+7.7m前後の3層は、粘土のブロックが混り、古墳時代前期の古式土師器高杯(1)が出土した。1は内面放射状のミガキを、外面に右上がりのミガキを施す。なお、この層は遺構の埋土の可能性が高いと考える。

調査区のほぼ中央には既設の排水管があり、掘削が行われていたため、第1区同様本来の地層はほとんどが壊されていた。

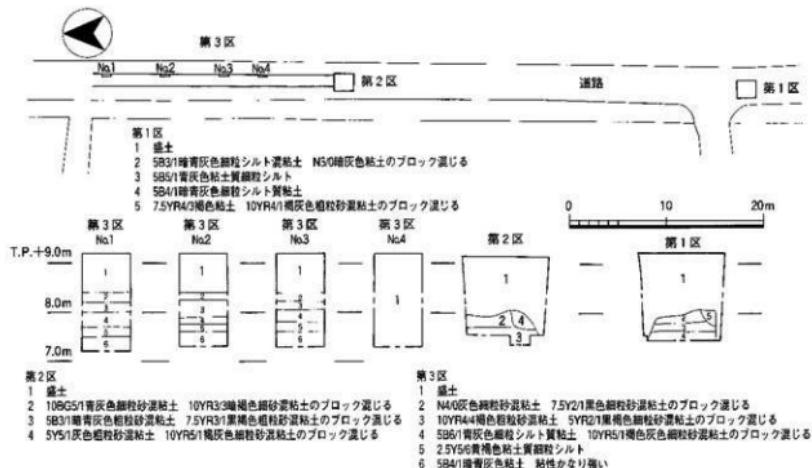
### 〈第3区〉

南北25m、東西1.0mの開削部分の調査区である。本来の地層は、既設の水路擁壁工事等の掘削で、ほとんどが壊されていた。そのため、深さ約2.0m前後までは機械で掘削し、地層が残存している部分について観察を行った。地層確認地点を北からNo1～No4とする。

No1～No4の現地表面はT.P.+9.2m前後で、No1～No3では6層を確認した。T.P.+8.0m前後の3層には中世の土師器や須恵器を含んでいたが、遺構の検出はなかった。なお、No4～第2区までは既存水路擁壁工事の盛土が深さ約2.0mまで存在していた。



第2図 第2区3層出土遺物実測図(S=1/4)



第3図 第1～3区 平断面図(平面: S=1/500、断面: S=1/100)

### 3. まとめ

今回の調査地の第2区では、古墳時代前期の高杯が3層から出土した。この遺物の表部はほとんど磨耗していないことから、遺構内から出土したものであると思われる。このことから第2区には古墳時代前期の遺構が存在していた可能性が高いと考える。

周辺の調査成果では弥生時代後期、古墳時代中期、奈良時代、室町時代の遺構が検出されているが、今回の調査では上記の時期の遺構の検出はなかった。

#### 参考文献

- ・高萩千秋、原田昌則1991「成法寺遺跡<第1次調査～第4次調査・第6次調査報告書>」(財)八尾市文化財調査研究会報告33(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一1994「I X成法寺遺跡第12次調査(S H93-12)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告42」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・森本めぐみ2000「X IV 矢作遺跡第5次調査(Y H98-5)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告65」財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助2000「X V 矢作遺跡第6次調査(Y H98-6)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告65」財団法人八尾市文化財調査研究会



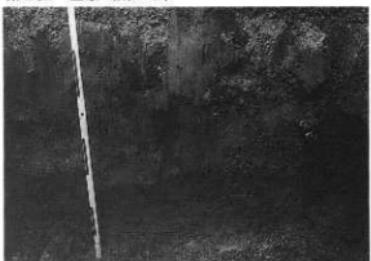
第1区 周辺（北から）



第2区 全景（南から）



第2区 周辺（南から）



第2区 南壁（北から）



第3区 周辺（北から）



第3区 No1東壁（西から）

IX 福万寺遺跡第2次調査 (F K2002-2)

## 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市上之島町1～3丁目地内で実施した公共下水道工事（平成14年度福万寺排水区第4工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する福万寺遺跡第2次（FK2002-2）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教生文第304号 平成14年12月2日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成15年3月24日～8月29日（実働10日間）にかけて、樋口 薫を調査担当者として実施した。ただし、途中2日間は、当調査研究会の西村公助、岡田清一両技師の協力を得た。調査面積は約52m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査にあたっては、下記の方々の参加を得た（敬称略、五十音順）。  
國津れいこ・鈴木裕治・曹龍・中野靖之
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成15年9月30日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、以下の通りである。  
【遺物実測・トレース】 市森千恵子  
【執筆・編集】 樋口

## 本 文 目 次

1.はじめに .....	103
2.調査概要 .....	104
1) 調査方法と経過 .....	104
2) 基本層序 .....	104
3) 検出遺構と出土遺物 .....	104
3.まとめ .....	106

## IX 福万寺遺跡第2次調査(FK2002-2)

### 1. はじめに

大阪府の東部、現在の大和川と石川の合流する付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に区画されている。この河内平野は、旧大和川の分流がもたらす沖積作用によって形成されてきた。今回報告する福万寺遺跡は、この大平野の東部を画する八尾市の北部に位置する。現在の行政区画では、福万寺町、福万寺町北、福万寺町南、上之島町北の東西約0.5km、南北約1.5kmがその範囲と推定されている。地形的には、恩智川と玉串川の挟まれた沖積地上に位置する。当遺跡では、これまでに東大阪市と市境を成す当遺跡北部において、恩智川治水緑地建設に伴う大規模な調査が大阪府教育委員会および(財)大阪府文化財センターにより行われている。その結果、縄文時代晚期～近世にかけての複合遺跡であることが明らかになった。特に、弥生時代以降近世に至るまで、旧大和川水系がもたらす豊富な水量と肥沃な土壌を利用して水田耕作が営まれてきたことが分かったほか、古墳時代の玉作り集団に関係する遺構群を検出(江浦1991)するなど貴重な成果を挙げている。今回の調査地は、当遺跡の南部に位置する。周辺では、昭和57年に当調査研究会による八尾市立上之島小学校建設に伴う発掘調査(FK82-1)が実施された。ここでは、13世紀前半～15世紀前半の掘立柱建物や井戸、土坑、溝で構成された居住域が検出された。また、中国磁器をはじめ、宋銭や刀子などの金属製品、硯なども出土しており、先述の遺構の内容と合わせると、農業経営を行い、しかも畿内の先進文化を導入し得た、武士的側面をもった人達の屋敷地であった可能性が高い(米田1990)と考えられている。今回の調査では、この成果を念頭に置きつつ、調査を進めた。



第1図 調査地周辺図 (S=1/5000)

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法と経過

今回の調査は、八尾市上之島町1～3丁目地内で行われた公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が福万寺遺跡内で実施した第2次調査(FK2002-2)にある。調査区は1箇所(7.2×7.2m 面積約52m<sup>2</sup>)である。調査は、現地表(T.P.+7.502m)下8.5m前後までを機械と人力を併用して掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。なお、調査期間は平成15年3月24日～8月29日(実働10日間)である。

### 2) 基本層序

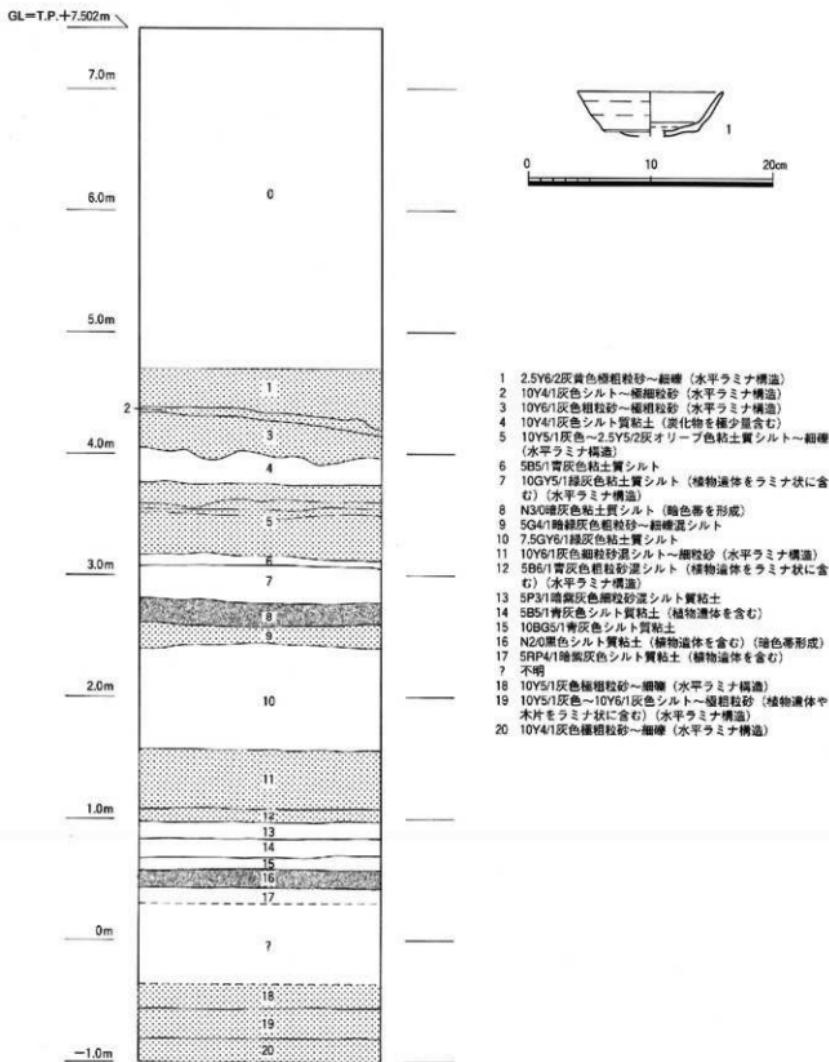
現地表下2.8m前後までは客土・盛土(0層)である。以下現地表下8.5m前後までの5.7m間で、20層もの地層を確認した。1～7層はシルト～細疊で形成された水平ラミナ層が堆積する。8層は暗灰色を帯びた粘土質シルトである。視覚的にも明瞭に判別できる地層であり、鍵層になり得る地層と推測される。9・10層はややグライ化が認められる湿地性の地層である。粘性に富む。11・12層は水平ラミナ構造が発達した流水層。一方、13～17層はシルト質粘土優勢の湿地性の堆積物で構成される。この内、粘性が極めて強い16層は黒色を呈し、8層同様暗赤色と認識できる地層である。18～20層は水平ラミナ構造を有する流水堆積層である。なお、各地層の詳細については、地層一覧表を参照されたい。

### 3) 検出遺構と出土遺物

遺構の検出は認められなかった。遺物は、須恵器杯身が1点(1)出土した。これは、1～5層のラミナ構造が顕著な水成層のいずれかの地層に包含されていたものである。詳細を述べると、口縁部は直線的に上外方に開き、端部は丸く終息するものである。底部は、内・外側ともに平坦ではない。特に外側は、大きく外側に膨らむ点が特徴的である。高台は貼り付けているようだが、先述した底部外側の特徴から、高台の機能はまったく失っていると言える。調整は、内・外側ともに横ナナフ。色調は灰色を呈する。高台の退化状況から判断すると、8世紀後半に属するものと推測される。



第2図 調査区位置図 (S=1/800)



第3図 地層断面図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/4)

表1 地層一覧表

地層名	色調	粒度組成	堆積構造	層厚 (m)	備考
1	2.5Y6/1灰黄色	極粗粒砂～細砂	流水性の堆積	水成層 (ラミナ)	0.5以上
2	10Y4/1灰色	シルト～極粗粒砂	流水性の堆積	水成層 (ラミナ)	0.05
3	10Y6/1灰色	粗粒砂～極粗粒砂	流水性の堆積	水成層 (ラミナ)	0.28
4	10Y4/1灰色	シルト質粘土(炭化物を微量含む)	混生性の堆積	水成層	0.23
5	10Y3/1灰色～ 2.5Y5/2灰オリーブ色	粘土質シルト～細砂	流水性の堆積	水成層 (ラミナ)	0.6 新本層シルト～シルト・中粒砂～粗粒砂・シルト～極粗粒砂でラミナを形成する
6	5B5/1青灰色	粘土質シルト	混生性の堆積	水成層	0.07
7	10G7.5/1緑灰色	粘土質シルト(植物遺体をラミナ状に含む)	混生性の堆積	水成層 (ラミナ)	0.3
8	3G/1褐色	粘土質シルト	混生性の堆積	水成層	0.2
9	5G4/1翠綠灰色	粗粒砂～粗疊層シルト	流水性の堆積	水成層	0.15
10	7.5G7/1緑灰色	粘土質シルト	混生性の堆積	水成層	0.9
11	10Y6/1灰色	細粒砂混シルト～細粒砂	流水性の堆積	水成層 (ラミナ)	0.5
12	5B6/1青灰色	粗粒砂混シルト(植物遺体をラミナ状に含む)	流水性の堆積	水成層 (ラミナ)	0.1
13	5P3/1暗紫灰色	粗粒砂混シルト質粘土	混生性の堆積	水成層	0.1
14	5B5/1青灰色	シルト質粘土(植物遺体を含む)	混生性の堆積	水成層	0.15
15	10BG5/1青灰色	シルト質粘土	混生性の堆積	水成層	0.09
16	N2/0黑色	シルト質粘土(植物遺体を含む)	混生性の堆積	水成層	0.15
17	5RN/1碧素灰色	シルト質粘土(植物遺体を含む)	混生性の堆積	水成層	0.15以上
不明					
18	10Y5/1灰色	極粗粒砂～細砂	流水性の堆積	水成層 (ラミナ)	0.2以上
19	10Y5/1灰色～ 10Y6/1灰色	シルト～極粗粒砂(植物遺体や木片をラミナ状に含む)	流水性の堆積	水成層 (ラミナ)	0.25
20	10Y4/1灰色	極粗粒砂～細砂	流水性の堆積	水成層 (ラミナ)	0.2以上

### 3.まとめ

今回の調査では、当調査研究会による第1次調査で検出された中世の遺構面、およびその前後の時代の遺跡の有無を確認することを念頭に調査を進めた。結果は上記の通りである。期待された中世の遺構面は存在せず、ラミナ構造が顕著に見える水成層が厚く堆積していたのみであった。一方その前後の時期についても、形成された時期は不明であるが水成層が続いていることから、今回の調査地が、各時代を通して、河床域に位置していたものと推測される。なお、今回の調査では、地層観察において、17層と18層の約60cm間にについて地層未確認部分が存在する。これは、調査担当者と業者の意思の疎通がうまく図れなかつたために生じた事態である。特にこの部分は、繩文時代晩期～弥生時代にかけての地層の年代を推測し得る暗色帯が存在した可能性が考えられる(樋口1997)ことから、それが確認できなかったことに責任を感じずにはいられない。

参考文献・引用文献

- ・江浦 洋 1991「Ⅶ. 考察 占墳時代集落の変遷と特質—池島・福万寺遺跡の占墳時代集落の評価をめぐる  
予測—」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅱ』(財)大阪文化財センター
- ・米田敏幸 1990『福万寺遺跡一上之島町北3丁目22-1の調査—』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・樋口 薫 2001「IV.大竹西遺跡第4次調査(OTN99-4)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告67』  
(財)八尾市文化財調査研究会



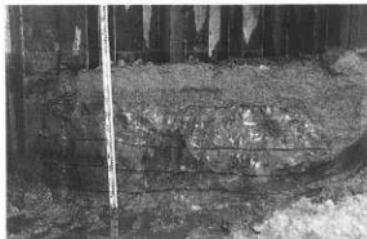
調査区周辺状況（南西から）



地層断面（T.P.+3.8~4.7m：西から）



地層断面（T.P.+3.2~3.6m：北東から）



地層断面（T.P.+2.5~3.2m：北東から）



地層断面（T.P.+1.0~2.0m：東から）



地層断面（T.P.-1.0~-0.4m：北東から）

X 弓削遺跡第5次調査 (Y G E 2003-5)

## 例 言

1. 本書は大阪府八尾市志紀町南3・4丁目地内で実施した公共下水道建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する弓削遺跡第5次調査(Y G E 2003-5)の発掘調査業務は八尾市教育委員会の指示書(八教生文第15号 平成15年7月28日)に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成15年9月1日～同年12月3日(実働5日)にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約22.8m<sup>2</sup>を測る。
1. 現地調査に参加した補助員は岩本順子・國津れいこ・鈴木裕治・都築聰子である。
1. 内業調査は現地調査終了後隨時行い、平成15年12月31日に終了した。
1. 本書に関わる業務は、以下の通りである。

【遺物実測】西村

【トレース】市森千恵子

【執筆・編集】西村

## 本 文 目 次

1.はじめに .....	109
2.調査概要 .....	109
1) 調査方法と経過 .....	109
2) 検出遺構と出土遺物 .....	110
3.まとめ .....	111

# X 弓削遺跡第5次調査(Y G E 2003-5)

## 1. はじめに

弓削遺跡は八尾市の南部に位置し、現在の行政区画では志紀町南2~4丁目、弓削町3丁目・弓削町南3丁目の各一部がその範囲になっている。地形的には長瀬川左岸の自然堤防上から西側にひろがる沖積地に位置している。

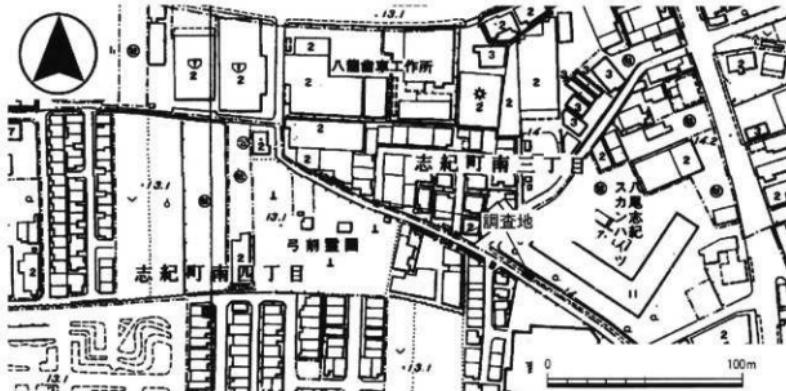
当遺跡では、大阪府教育委員会(以下府教委)、八尾市教育委員会(以下市教委)、(財)八尾市文化財調査研究会(以下研究会)が発掘調査を実施しており、弥生時代~近代に至る遺構・遺物の出土が確認されている。

特に、今回の調査地の周辺では、市教委と研究会が調査を行っており、弥生~奈良時代の遺構・遺物を検出している。北側約200m地点での研究会第1次調査では奈良時代の遺構や弥生時代の遺構を多く検出している(西村1985)。また、北側約50m地点の市教委弓削遺跡1999-524の調査と研究会第3次調査では、弥生時代中期~後期の遺物や古墳時代中期の埴輪の破片が出土しており(消2001・高萩2002)、市教委弓削遺跡98-380の調査では古墳時代の埴輪や、弥生時代の壺が出土している(藤井1999)。北西側約100m地点の研究会第4次調査では、弥生時代後期の土坑を検出している(西村2003)。さらに南側約50m地点の市教委弓削遺跡90-553の調査では、弥生時代後期の遺物が多く出土している(消1992)。

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道建設に伴う調査で、研究会が弓削遺跡内で行った第5次調査である。調査は、現地表下約5.5mまでを機械と人力を併用して掘削した。なお、今回の調査では、八尾市下水道部作成の図に記載している標高値(K B M 2 [T.P.+14.044m])を使用した。第1区は立坑部分(規模6.0×3.0m)、第2~4区は人孔部分(規模1.6×1.0m)である。



第1図 調査地周辺図 (S=1/2500)

## 2) 検出遺構と出土遺物

### 〈第1区〉

立坑部分の調査で、地層は上から、0層盛土、1層2.5Y7/6明黄褐色細粒シルトと粗粒シルトのラミナ。2層5Y5/1灰色粗粒砂。3層2.5Y5/1黄褐色粘土質シルト。4層5Y7/1灰白色細粒シルトと粗粒シルトのラミナ。5層N3/0暗灰色粗粒砂混粘土。6層2.5Y7/8 黄色細粒砂と粗粒砂のラミナ。7層2.5Y7/8 黄色粗粒砂と細粒砂のラミナ(細礫多く含む)。8層5Y7/4浅黄色細粒砂と粗粒砂のラミナ。9層N4/0灰色細粒シルト質粘土。10層10Y6/1オリーブ灰色粗粒シルトと細粒砂のラミナである。

1～4層は自然堆積の砂層である。5層は上面土壤化しており、上面で調査を行ったが遺構の検出および遺物の出土はなかった。7層～10層は砂層で、河川の堆積と思われる。8層内からは弥生土器(1)や古墳時代の須恵器の破片が出土していることから、古墳時代以降の河川である可能性が高い。1は弥生時代後期の甕である。褐色を呈し、胎土に角閃石を含んでいることから、生駒山地西麓産の土器であると推定される。

### 〈第2区〉

現地表下約2.8mの深さまで掘削を行い、5層の堆積を確認した。現地表面はT.P.+14.1m前後で、盛土の厚さは約1.4mを測る。以下には第1区と同様、河川の堆積を示す細粒砂やシルトが堆積していた。

### 〈第3区〉

現地表下約2.4mの深さまで掘削を行い、4層の堆積を確認した。現地表面はT.P.+13.8m前後で、盛土の厚さは0.4mを測る。以下には河川の堆積を示す細粒砂やシルトが堆積していた。

### 〈第4区〉

現地表下約2.5mの深さまで掘削を行い、3層の堆積を確認した。現地表面はT.P.+14.0m前後で、盛土の厚さは1.7mを測る。以下には河川の堆積を示す細粒砂やシルトが堆積していた。



第2図 第1～4区平断面図(平面:S=1/1000・断面:S=1/100)



第3図 第1区出土遺物実測図(S=1/4)

### 3.まとめ

第1区～第4区で検出した2層以下の砂層は、河川の堆積であり、時期は近代以前と思われる。川幅については肩を検出してないため不明である。しかし、北に約50mと近接している市教委弓削遺跡98-380の調査でも砂層を検出している(藤井1999)ことから、幅は50m以上であった可能性が高いと考えられる。流向は多少の蛇行はあったと思われるが、おそらく北東～南西方向であると考えられる。

#### 参考文献

- ・西村公助 1985 「弓削遺跡1次調査」『昭和59年度事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・酒 竜 1992.3 「5.弓削遺跡(90-553)」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告25平成3年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・藤井淳弘 1999.3 「13.弓削遺跡(98-380)」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告40 平成10年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・酒 竜 1999.3 「5.弓削遺跡(97-444)」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告41平成10年度公共事業 八尾市教育委員会
- ・酒 竜 2000 「弓削遺跡発掘調査報告書」八尾市文化財紀要10 八尾市教育委員会
- ・藤井淳弘 2001.3 「14.弓削遺跡(1999-429)の調査」『八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告44平成12年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・酒 竜 2001.3 「15.弓削遺跡(1999-524)の調査」『八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告44平成12年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・森本めぐみ 2001 「XⅢ 弓削遺跡(第2次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・高秋千秋 2002 「II弓削遺跡第3次調査(YGE2002-3)」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告3』八尾市教育委員会 財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 2003 「33.弓削遺跡(2002-66)の調査」『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告48 平成14年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・西村公助 2003 「34.弓削遺跡(2002-23)の調査」『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告48 平成14年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・西村公助 2003 「XⅣ 弓削遺跡(第4次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・北野 重1993「木郷遺跡 1991・1992年度」 柏原市文化財概報1992-Ⅲ 柏原市教育委員会
- ・北野 重1999「木郷遺跡—公共下水道管理設に伴う—」 柏原市文化財概報1998-Ⅳ 柏原市教育委員会



第1区 周辺（北西から）



第1区 全景（南から）



第2区 周辺（北西から）



第2区 全景（北西から）



第3区 周辺（北西から）



第3区 全景（西から）



第4区 周辺（北西から）



第4区 東壁（西から）

# 報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく
書名	財團法人 八尾市文化財調査研究会報告78
調査名	I 恵智遺跡第14次調査 II 亀井遺跡第14次調査 III 木の本遺跡第9次調査 IV 木の本遺跡第11次調査 V 久宝寺遺跡第47次調査 VI 小阪合遺跡第38次調査 VII 渋川庵寺第4次調査 VIII 成法寺遺跡第19次調査 IX 福万寺遺跡第2次調査 X 弓削遺跡第5次調査
巻次	
シリーズ名	財團法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	78
編著者名	I・VI・IX-樋口 薫 II-高萩千秋 III-V-成海佳子 IV-岡田清一 VII-金親満夫 VII-X-西村公助
編集機関	財團法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 0729-94-4700
発行年月日	西暦2004年3月31日

所取遺跡	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査 原因
恵智遺跡 (第14次調査)	大阪府八尾市恵智中町 1丁目地内	27212	30	34度36分 22秒	135度37分 46秒	20020709 ~ 20030326	28.14 公共 下水道
亀井遺跡 (第14次調査)	大阪府八尾市亀井町1~4丁目、新都 木町4丁目、渋川庵寺町1丁目地内	27212	26	34度36分 47秒	135度34分 52秒	20030123 ~ 20031203	64.0 公共 下水道
木の本遺跡 (第9次調査)	大阪府八尾市木の本 2・6~8丁目	27212	35	34度35分 56秒	135度35分 32秒	20020708 ~ 20030820	102.0 公共 下水道
木の本遺跡 (第11次調査)	大阪府八尾市木の本 3・4丁目	27212	35	34度36分 01秒	135度35分 24秒	20030227 ~ 20030731	39.0 公共 下水道
久宝寺遺跡 (第47次調査)	大阪府八尾市北亀井町 2・3丁目	27212	23	34度37分 07秒	135度34分 55秒	20030228 ~ 20030702	153.4 公共 下水道
小阪合遺跡 (第38次調査)	大阪府八尾市若草町 地内	27212	40	34度37分 24秒	135度36分 44秒	20020626 ~ 20020930	33.28 公共 下水道
渋川庵寺 (第4次調査)	大阪府八尾市春日町 地内	27212	75	34度36分 57秒	135度35分 38秒	20030403 ~ 20030603	122.5 公共 下水道
成法寺遺跡 (第19次調査)	大阪府八尾市高美町 2丁目地内	27212	73	34度37分 07秒	135度36分 38秒	20030515 ~ 20030621	35.0 公共 下水道
福万寺遺跡 (第2次調査)	大阪府八尾市上之島町 1~3丁目地内	27212	72	34度37分 59秒	135度37分 36秒	20030324 ~ 20030629	52.0 公共 下水道
弓削遺跡 (第5次調査)	大阪府八尾市紀町南 3・4丁目地内	27212	71	34度35分 27秒	135度37分 11秒	20030901 ~ 20031203	22.8 公共 下水道

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
忍智遺跡 (第14次調査)	集落	弥生時代中期	土坑	弥生土器	
龜井遺跡 (第14次調査)	集落	弥生時代	遺物包含層	弥生時代	
木の本遺跡 (第9次調査)	集落	古墳時代中期	河川	古式土師器・須恵器・木製品・自然木	
		平安時代以前	溝・落ち込み		
木の本遺跡 (第11次調査)	集落	弥生時代後期～古墳時代前期	河川	弥生土器・古式土師器	
久宝寺遺跡 (第47次調査)	集落	弥生時代終末～古墳時代前期(布留式期)	土坑・溝・落ち込み・河川?	弥生土器・古式土師器・上製支脚	
		古墳時代中期	小穴	須恵器	
		近世～近代	溝		
小坂合遺跡 (第38次調査)	集落	古墳時代前期	土坑	古式土師器	古墳時代前期に属する 鍬入土器の出土を見た。
		古墳時代中～後期	溝	須恵器	
		古墳時代中～後期以降	溝		
浅川院寺 (第4次調査)	寺跡	古墳時代後期	小穴・溝・河川	土師器・須恵器	
		飛鳥～奈良時代	土壇状遺構・溝	土師器・須恵器・瓦	
		中世	土坑・溝	土師器・須恵器・瓦器	
成法寺遺跡 (第19次調査)	集落	古墳時代初頭		古式土師器	
御万寺遺跡 (第2次調査)	集落	弥生時代～中世	河川		
弓削遺跡 (第5次調査)	集落	近世	河川		

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告78

- I 恩智遺跡(第14次調査)
- II 龜井遺跡(第14次調査)
- III 木の本遺跡(第9次調査)
- IV 木の本遺跡(第11次調査)
- V 久宝寺遺跡(第47次調査)
- VI 小阪合遺跡(第38次調査)
- VII 渋川廃寺(第4次調査)
- VIII 成法寺遺跡(第19次調査)
- IX 福万寺遺跡(第2次調査)
- X 弓削遺跡(第5次調査)

発行 平成16年3月  
編集 財團法人八尾市文化財調査研究会  
〒581-0821  
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2  
TEL・FAX (0729) 94-4700

印刷 株近畿印刷センター  
表紙 レザック66 <260kg>  
本文 ニューエイジ <70kg>  
図版 ニューエイジ <70kg>

